茶乃叢書

二十五

十

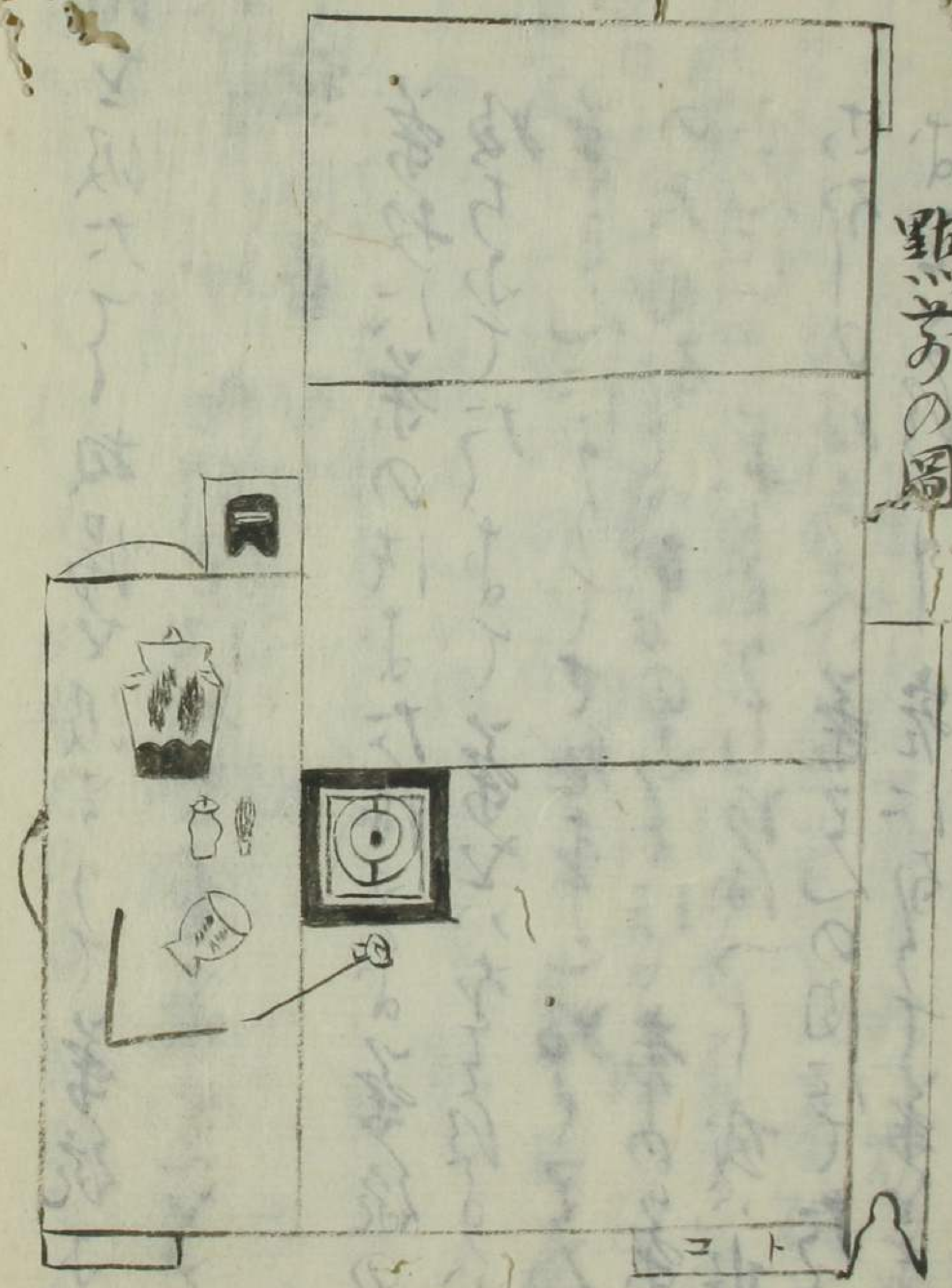
ヲ多 9
674
25

扨茶せんをとりて茶せんの穂にちりあらば
そなたより手拭にて茶ちりおとしては
又おハ又茶せんにいまて始り左の手に
立て茶巾をとり右の手にて茶せんを
其侭も湯さがしへ捨て茶碗を始よりて白
はしくこれなる茶碗をもこしをかめにはしく
茶せんの始め時ちて茶をいれ茶杓に
て茶をすくとも八茶茶せんをまわりて
られて茶味甘く茶湯かうばしく
しこ始めより茶せんの始めうちに茶を入
さて大よみにかくやめたまふべし茶巾

をさめしとけば茶入れをとりて茶
しやく持かへ茶入れの蓋をとりて炉の脇
ちかくたゝみのうへにおきて茶をハ茶碗に
いれ茶しやくを茶わんにのせ置て茶
入の口にはねたる茶を拭ひて
蓋をしてもとの所へなをし置て扨茶
しやくにて茶わんの内の茶をハ能所によ
て好さにて茶しやくを好よてもとのことく
く茶入にかきよせ置て扨引しやくを右の
手にとりなをしたして又好さにて釜の
蓋をとりて竹もくのせたの上へ柄杓を立

て湯を汲たて扨湯を汲とりて茶碗に
いれて引しやくを竹もとにかきおき茶筅をと
りて點法事あり
茶杓ハ茶のはなたはそよ茶碗の
好ちかふてたてまて茶をハあをそほらに
茶わんによりてせ細事こ好くまし
の天目あるハなかのさとにて常の茶
わんにてもそえちかはつし或ハ水
さしの好ち又ハ茶わんの内にてた
しかをとれぬ茶ニ而りて茶をき
しよそ好ほぞ茶やありふてらへはは

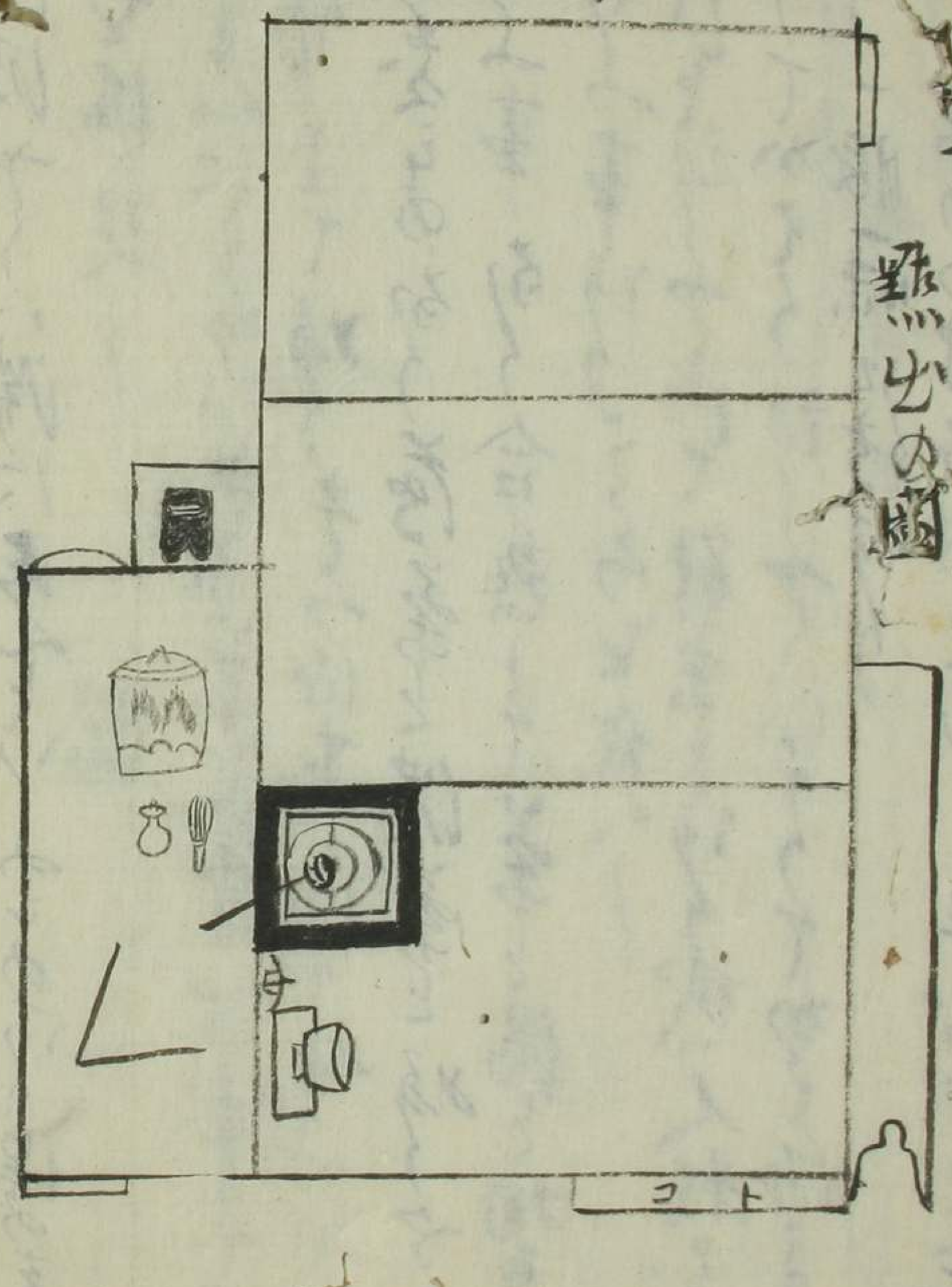
同　點茶の圖



○湯ハ汲やうハ湯に走んといふその外ハ湯の走い
中を汲入へし
○茶たてにいかほと薄茶と茶たての穏まては
およそよて好りまて候事なり好みかけ之
ならまたのあり薄茶と濃茶と好りやうり
違ふ事なり合熟して茶と湯と相あふ
ところ事なりところと付べし
○湯ひとくしやにて薄茶も候も茶人数ニ
よりてかへてかへしやくによりてかへ候
御一服一味に候なり
○客茶のいは候かきさし　候ちかくにち

○これさしに付て茶わんを返りへし
○松下座にて茶をのみ仕舞て茶わんを上
座へかへれは上座茶わんをそれ迄えんがを
きして茶わんを見て次へわたしなり
次第同前
下座は茶わんを上座へかへしへし　上客
亭主の名代にいでずてかへすなりなり
亭主のまへにかへしへし
　茶碗によりてはえんばいにかへしも
　内に宗匠の添茶わん有れは先
亭へして亭主茶わんをまゝ返りて

てもら[illegible]つし　點出の圖



かくのふて又ハ書寄り
また夫にて茶をのみて居候ゆへ必上座より
次第にのこして これ迄かへりし事有
候ゆへよりてのむ也 三人客式ハ四人ツレの時ハ先
にかへれば又人数ハ三人ツレの時ハかへりて よい
候事也　茶を出す時亭主前にハ大体茶碗
あらげ ツレ外の者も茶の口に残し
て亭主候それをすゝぎもどして 其の茶を
いふツレ聞てハ先かへりて 心得
これも ツレ同たる事也 又三人ツレの時ハ
通にても出候し かくに亭主も見て 相伴

出す事も同じ候ふよ成べし
○客茶わんを戴くかぎてみぬ様にさし
たのひざを手に付てそのひらにのせて右
の手にて茶わんを外回のかくし様をしてみ
候へし 同席の者もよく見候し 或いめ加減有之を
見して見候よいの 打合客のめをおくたて
亭主に見候よ 取りつて同様ふまし亭主見たり
たゞ見ぬ候いよし
○亭主 客と茶碗によらず 或い茶入其外の
道具にても亭主ばかり見候ハ皆 可被下し
結構な道具を亭主 見候も同し

○亭主茶わんを洗ておんぐをあげて客より
まへひざにさげして茶わんを下へおく
べし
○客手附一同に右手をはなして茶の一礼
可然へし
○亭主も右手をつみて一礼をとるき掛湯を汲て
茶わんハいりきて水をまへかりと汲て茶
わんの湯ハ半分いれて半分ハ釜へもどし
ひしやくを釜にかけ置右の手にて茶碗ヲ
とりなおし左の手にのせ右の手にてひざの茶
わんの始ちかくよし つぎた濃茶を出し

てあるしへおきて右の手にて茶わんのはたを
とりて茶わんを下に置て客よりむかひて
ねりた濃茶をどうぞといふて進りやう
○客先ハ右の膝の前にのみやうへし
○亭主も客のあとだにてすゝぎひて仕舞に
て濃茶て進め其のちいさゝかして茶碗を
とりかへ湯をハさふらしおきて茶わんを
下に置てひしやくをとりて水を汲て茶
わんに入れ又ひしやくに汲て半分ハ入れ半分ハ
釜へもどしそくひしやくを釜にかきをよせて
茶せんをとりて茶わんにいれ茶筅とをハ

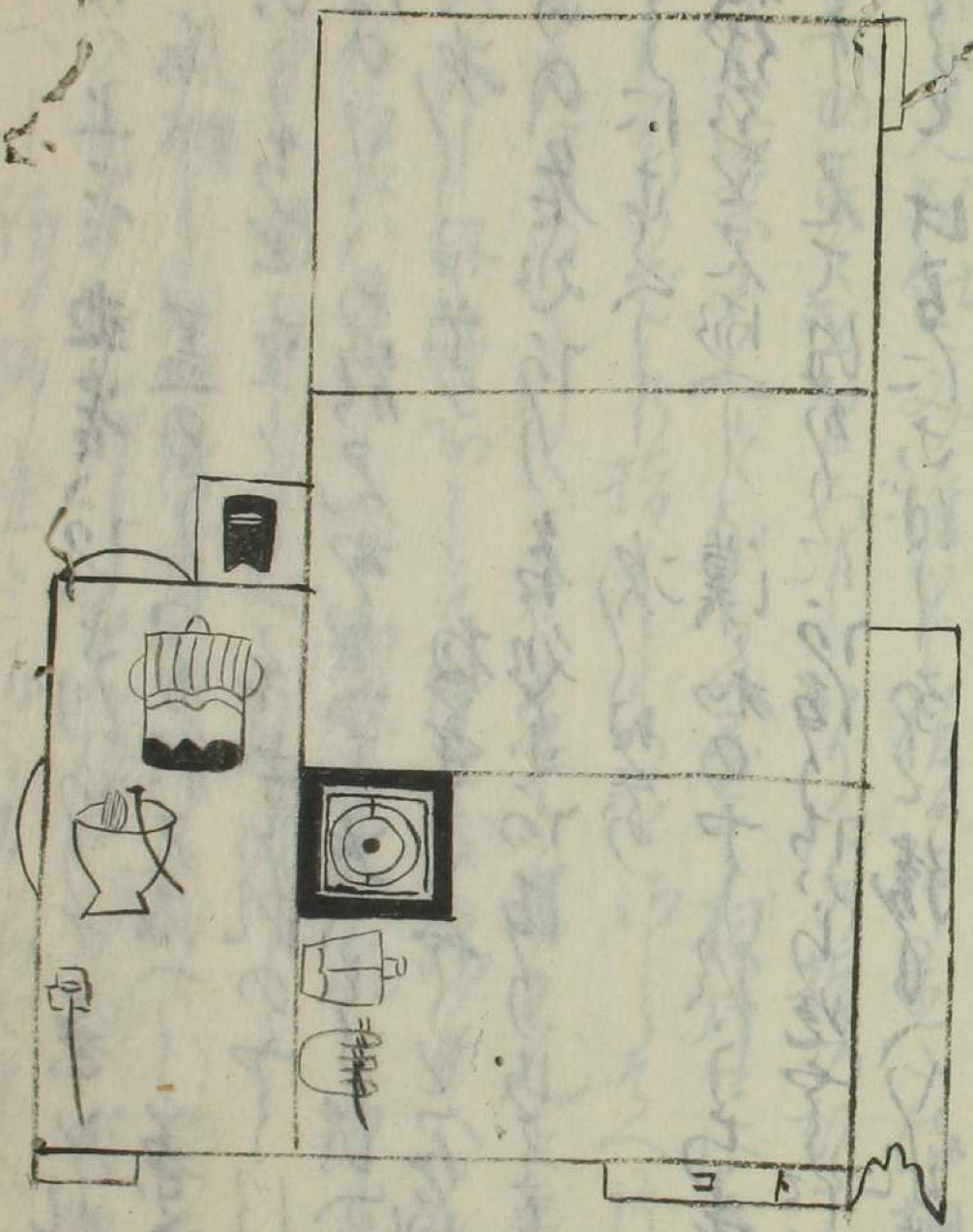
ちりどもあらばあらためぬ所あらば座
て茶わんよりつぎひざに置茶巾にて
茶わんの水をふきとり扨て茶せんを取
おいて茶巾をたゝみて茶わんに入れて
茶せんをとり初のごとくいれ取さるり
ふくさ茶しやくを取よて茶わんにのせ
をおがりにたのかさむばしの座に置よ
て釜に水をさして湯ぐしやくとりて柄杓
をたの手に持てたの手にて釜の蓋をとめて
作ことをとりてこぼしへいれ到しやく
こぼしへのせて茶道口のさきへよせ置

水指の蓋を取て　水指乃蓋をし
水指の蓋ハ取やうの物の蓋ハふく
さにて取まるべし手にて取を
ハくそりの付ものありて又金物続ハ
手にてもちて取まるべし
左取ハ左のつりを取りて取くさにて
ハ取まるべし

板　茶いれを仕舞ふ次ハ客分茶入
をとひもして見候へし
○亭主一言挨拶して此度所にひいて取
○茶をとふして茶いれの取らさを下ル

○並て茶入れの口を始まず蓋をして茶入れを
始よふ毛のならびおりしろよ表を客の
かたへいだすべしこれもかよふその手の中へ
いれ事なり
○客茶杓も所望しならばひて見るべし
○亭主も作の茶しやくならば茶入れなどを
出しよくみせていだすべし　常のちや
しやくは茶入れにならべていだすべし
袋有ときは袋の座を座敷になして
いだすべし

茶いだしの圖



○客ハ上客並客かはりて茶入を
見廻し蓋のうらも能見廻し茶入の
口のうちを重とくふきされのやうに又
座の前へとめ能見廻して次へとなし
次しは袋　板茶しやうを見廻し
みつの各処かゝり各処にかゝりけむら地
やうにまへし　次しは袋
板袋を見廻し　漢和のやうにうち表と
もゆり見てはかりにかゝりけうら地やうに見し
○亭主　けるにおはし前と緒ほへいれちや
かへしを持ていりて　板いでけ座り箱ちや

茶入を仕舞持出て初め飾座ハ棚乃
うへの東さをふろしかり二つの指の記ぐり此
かへし茶入をとくからへ出て板片口にいゝを入
てとちいで二の指にかを持して片口を
茶席口のさいハよせ出て茶入と乗とを
二けしに飾付よせ片に残緒ほへ座へ
時に客ハ茶しやう袋茶入れをかよ面の
志手へ圖のとくにかへしつし
○又棚に初め飾茶入かざりてあるへハ初め亭主
の茶入をかざしを緒ほへ座へ時かへれ
へしハ初め飾座へ座るまてちや東さハ後ち

たはこ盆炭斗かたつけ座敷へ見はかり薄ちや
茶わんを持はは座中へ茶入をかされ
よく有り
薄茶の時の師ハ初めは濃茶のかわり
に似せ申に師へし出しけれとも初の
めんたうより後ハ焼物金物の
おきものへし茶わん何とも色のひまて
濃茶ちやわんにかへりたるをもちへし
茶しやくも台かへてもちへし
薄茶の時ハめいめい菓子をもちへし
後とも障子何をを明て點へし

○亭主 先袋をぬきてたゝみの上におきて袋
茶しやくそへてかいほうさをむかふへ可して
のふくにおちかへて足大ゆびにておはつて茶
いれをそろへて持そへて釜のふたをへし
○客 薄ちや一二ふくもすてまて上客たて
炭をこのむへし
○亭主かゝさしりて立炭をとへしけれ時
座をとりてもよし又それにもよし
不じぶれやられもよし
○数寄屋入りて後入炭を出すまもなり候時ハ
亭主 座をとりて出たへたと釜のかいれ三羽

にて路地土壇まてもそおて炭入を中程
のきてへよせ居処を志たりて客の炭をハ
守まへし
○まんだ不座より長火ばしをのせて出ル
まんだの席ハ習ひなり
○炭とりにくみいれ共もみハざる炭より
炭あいて炭斎炭丸輪かき輪かへらい
又らくにも炭おくをれやりまゐみい
置くし
○釜りきの炭ハ亭主の炭あて釜をかま
させおき添りよし

○数寄やかこひ亦どにてハ釜のふた音を聞
て勝てひをや申へし
炭斗の時ハふた音を聞て各の茶一服
點へしけ時又右を所望すへき也
と申請なりもなりしとまハけ時のも所用
○客かへりの時ハ亭主も路地迄でおくり候
申へし亭主も客に替ひ向日迄の礼書
取と必ず出留と申へし客人ハきまり次第ハ
なし
客かへりたる後とて路地或ハ待合ひなたり
を戸を締て仕舞候ハなし一刻ほと外ハ名

訪の節は心得へし
一 蹲踞の客路地をこゝろすへし　之也
坂又は一方より蹲踞の事等云々記ス
内庭ニ入ル道具ノ品
一 腰掛のうしろの方へ入　竺　人数ホト
一 円座　人数ホト　一ツ腰掛の時ハ人数ホト宛
宛　二ツ腰掛の時ハ一方ニ入　或ハ円座二ツ宛
宛又一方ニ入　或ハ円座三ツ宛のうち三人ノ
時ハ上座ノ腰掛ニ入　円座一ツ上座ノ腰掛ニ入
円座斗ニ宛かり内腰掛も　煙草盆ニ入
物数寄次第かり内腰掛へ硯箱ニ入るもあり

茶之異名
異名ハ茶の湯の事なり　去りて和名さまざまにあれは
何事も古人の茶事の如くにして其の風流さ
しらせ或ハ法寺請に入て異名の古語
あと何等の其ハ名茶と云或ハ茶果の茶道
あとに入かの古事なり
一 茶を　茗ト云ひ　荈ト云ひ　茶ト云ふ
一 唐ニてハいつも如の茶をハ極品と云ふなと
まゝ津ね何人も何事又語かくさまをこそ有なり
唐ニて極上品ノ茶の事を知ハ建安ト云ふ如
龍焙トいふ一番極品を龍団とも

いふなり
一北苑トいふ処ノ鳳山といふ茶これも極品なり
これを鳳団ともいふなり廿二種いかなるもの
茶王なり本朝ノ物むかし 後むかし などいふ
ものなし
一本朝へ茶の渡りしは傳教大師ノ時なり其節
渡唐して帰朝ノ時茶の實を持来りて樹られ
しが其後梅尾山ノ明恵上人其實を植られ
しが其後宇治の里人これを見て此木ハ宇治
の山ニ年来植来なりとてこれを作られ
て世上ニ弘しは其茶梅尾山の茶がハ味ひすぐれ

てきたりし也其後世上にひろまりて宇治の茶ところ
となれども東山殿の時代にハ湯出茶にして
ありし也近きて碾タルコトナリそれ迄ハ製作の
ことはなし義公之御時代よりして唐より
器物をもたらしてそれをもちゐてそれ今とよ
いふて製作シ能得て宇治の里にもたらし置れ
元来唐より持来りしものなり
一碾茶といへるハ元来唐より持来りし葉茶
なり唐より持来りて世上にこれを唐茶として
本朝のものとせしかど點て飲る事ハ昔より
ありしものなりしかしや本唐よりの桐傳

ありしものなりしこれを世に　ひろめんとて蔡君
謨といふ人の茶録をうつし記し所の物を引て
先生もて板行せしを
一唐物の茶入の事を世に茶入といふは唐物
なるもの也とて油をいるゝ器といふもいふ唐土にて
すたり何の用なる事にやありて茶入有り然るに
そのかみ數千年以前に唐にて八茶をまか
て茶入にいれてこれを茶筅にて點て飲し
其茶具圖賛といふ茶筅の圖賛あり磨のつもり
おふ茶録にえらり　茶の起翻原をしるしてよ
ゝ二千年以前に知る所あらはされてしるべし

一宇治にて茶の始りしは傳教渡唐ありし前に
ありてのちにも茶といへる事ありし大師の持来りて
樹へ植しむるは梅尾明恵寺に茶をうゑそのいはれ
とおもふ所なりて宇治の里人は宇治にすゝめて也分
こいふものを主取なりし數百年前より此事にて
薪なりしもの七百年のむかしより自然を茶なる嘉し
土地とみえたり
二百年以前に　玉水彩池　ひきとりありとうり
茶苑をつくりしかれども宇治の里のおもて極上の
茶はいでず唐もえらべのよろし　諸品ふかくちかとは
いへとも建安のむかしに極品の茶はいでず　なまし

まとかり

異名

大茗

一 餘姚ノ人山ニいりて茗（チヤ）を採ル常瀑布山といふ
山中ニいりてちゑをえりて語るへいれけ所ら
大茗いはゆるなり 大茗ト異名ス

清茗

西湯武昌盧江なといふ処らいずれ茶の極品
建安ニハをよひ出朝ニ来とへていりて処ら
又丹陽近江なといふ処の茶をよむ宋なり
巴東といふ処の人茶をさしらゆゑ上品なり

されども建安の茶をよむ名泉なるゆへニ茶
味よろしくて龍焙ハなけれども上茶の
いはゆるなり 巴東ニて八清茗ト異名ス

雲花

劉禹錫か茶ノ歌ニ 白雲満レ椀（テ）ニ花徘徊スト
いへる茶盃の内ニゆらく白雲ノちとお物の
ゆゑなり ことしい処を花トいふゆるなり
雲花ト異名ス

雀舌

東坡か詩ニ 揀（テ）芽（ヲ）分（ツ）二雀舌（ヲ） 賜（ワ）茗（ヲ）出（ス）二龍團（ヲ）と
いへり 茶の芽ハすじめの雀の舌のちとしなとのゆへなり

雀舌ト異名ス

龍団

茶ハ龍・鳳ノ二種ゟ貴キハなしとなり上茶
ニ龍ノ字ト又鳳ノ字ヲとりて二種極品と定め
たるなりけり二種を大切ニして諸方より詰め
たるなり蔡君謨ヵ詰タルモ此龍焙なり極上品
なるによりて龍ノ字ヲとりて龍焙ト異名ス

酒䟭

唐詩ニ睡起茶多酒盞䟭ナリとあり酒ニ
は乱れて種々の流しなるニ茶を飲めハ蕪
さるぞみなりて目さめたるとなりて酒ハわすれるく

てきえらしめるものなるを茶ハ心を清くなして
種々のもさまもなるへしニ酒䟭ト異名ス

縷金

茶の品ハ龍鳳より貴キハなし蔡君謨ヵ龍焙ヲ
きざ斤詰しよ餅茶トテ餅ノさまく海のやうなる茶
二十ヶ茶ノ目きざ斤一両ニしニ其價直金二両
となり金ハ何のためなれとも茶ハめでたきしとなり
かくのごとく唐まても茶の風流大切なるなるい
としく其價直金をはるめでるへし縷金と異
名ス

鳳山

北苑といふ所の名茶なり北苑ハ富沙といふ所の山
中なり地をさること二十五里これ鳳凰山とも
いふ極品の茶ノいづる所なり本朝にて家ノ宇
治なといふ所もをなし名茶いづる所ゆへ其
地ノ名を異名ス

龍焙

龍焙泉とて名泉流ルル所の茶の芽よき所也
なりして針ノごとし名水をかけてこしらへ
こしら茶ゆへ其味ひよろしまたなり名水ノ中
にも水ノ色白くして乳のごとく重きを上水とな
いふまでも有山水ハ乳泉よろしとこ陸羽カ

茶経下にあり江水ハ人ノ汲むを用れ遠き所のハ
よしとぞ井水ハ汲むものおほき所をよしとぞ
此龍茶ハ山水ノよろしきを汲てこしらへたる茶ゆへよ
茶味すぐれたるなり龍焙泉にて製す茶ゆへ
よりて龍焙ト異名ス

長泉

顧況論茶ニ曰煎スルニ文火細烟ヲ以テなすべし流る川水
のよろしきをもつて煎すなるとあり川水なりて流ル
和らかなるハ茶にもちいて味ひすぐれてよろしとあり
宇治川の水をきものみ汲むすたるをいひなし流レ
きやうよくして和らかなるすぐれて清く味よし

かろきしはすても長泉を古の如くなるゆへ于茶をハ長
泉ト異名ス

細花

陸羽ヵ茶經ニ沫餑ハ湯ノ花ト云ふ花ノうすきを沫
トいひあつきを餑トいひ軽細ナルヲ花トいふ是れも
湯ノわきかへりノ事なり湯ヲ煮一ありて弐ハ一沸ヲハ
松风トいひはじめをハ蟹波といひはじめを魚目ト
いひてこれを熟湯トシテ點茶の形なり朝ニ唐も
きゞふすなし魚目をすぐるを老湯といひて
うしこれは細花アルハ湯の花といふものこれを湯
のわきもいふたとへは湯の中よりさはやかなる塩のごとく
よくわきいづるをこれを細花といふ熟してなを[illegible]
湯のこれなるなり細なる茶花ノごとくなるものにあらず
細花ト異名ス

甘露

陸羽ヵ顧渚山之記ニ茆ヲ曇濟道人ハ八公山道人ニ設ク
茶ヲ王子尚ニ味テ之曰ク是れ甘露ナリ何ッ茶トいひ茗
トイハン茶ニ五味ノ外ノ味ひなれはなぐくしてしかもよ
そのなかを製してなくしにあらし味ひ如あり
なきものいふれはなぐしくしよろしく物のかはりにかう
りしまい茶なり甘露ト異名ス

茗粥

茶録ニ曰いわくハ茶ともいはバ茗ト曰フ晋宋
より以テ呉人茶をとりて早きを煮て飲ム
茗ノ粥トテ茗粥ト号名ス

雷鳴

昔有僧病冷日久過一老父ニ云ク何ソ不茶ヲ飲僧
云ク茶ハ冷ナリト老父云ク仙家ニ雷鳴茶アリ常ニ春
分ノ前後雷ノ声ヲ聞ておのれをとりて三日めの
止ム也し茶ハ一両ヲ得テ飲バ病癒二両ハ眼前ノ
病なくなるへし僧これをきゝて仙家ノ中
頂ニ室ヲたてしらへて茶ヲたくハへ飲ム病もなでアリ
癒ダリ八十餘ニシテ氣力さかんなりて雷ノ
声ヲ聞てはやくゆへ雷鳴ト号ハ名ス

仙人掌

荊州ノ玉泉山洞ニ乳窟アリ窟中ニ玉水流ル、
コトかぎりなし其川ノほとりニ名茶アリ所ノ真公
常ニとりて飲ム年八十餘ニシテ顔色桃李ノ如し
ましいのちながくゆへ仙人掌ト号ハ名

烏嘴

蜀州ノ人ハ崔名烏嘴ノちゃを茶を好むて今
の朝ノ茶ニハそのおりかみをとりの仇なるのちとちや
なり味ひいそしろきものなりし茶譜アリ
又いり茶ハ味ひよきもしおくニ言ノはよろし

ノ遣ひアリテ茶の緒大キニちりふくされハ味ひくまび
しふ茶多り鳥ノ嘴ニあらぬ茶也アリ
鳥嘴ト異ハ名ス

雲脚

公淑ガ賦ニ雲垂ニ緑脚ヲアリ茶蓋ノ内ニ茶ノ札ゆく
コト雲ノ足ヲたゞよはしかことしさまさハ式ハ弼百式
雲脚ト曰フ一説ニ雲脚ハ湯桶ノコトナリトアリさ説信
用せられず雲脚トイフハ茶碗ノ内ニテノ茶から湯ニ
ゆられて雲ノ足ニ分タルゝさまぐ尺面也へて雲
脚ト異ハ名ス

七椀

盧仝ガ茶歌ニ一碗ニ喉吻うるほひ二碗ニ孤
悶ヲヤブリ三碗ニ枯腸ヲさぐり四碗ニ軽汗ヲ
發シテ平生不平ノ事毛孔ニ向ひてさんずるとし
五碗ニ肌骨清し六碗ニ仙霊ニ通じ七碗ニ喫
スルコトヲ得ずたゞおぼふ両腋より清風ヲ生ス
ルカトナリ

註略異ハ名

白芽　金沙泉　落次煎　黄金碾
一搗春　琉璃眼　軽身　露芽
月團　上品　白雪　石泉
道院　雲腴　新芽　圓壁

僧窓　掃雪　解渇　湯前火
睡眠　煮橙　清神　龍芽
清風　雪乳　泉聲　對雪
雪花　珀石流　月中　雲外
香塵　夜眠　飛雪　醉中樽
第二泉　味偏長　欲眠時　玉青芽
花外月　春味長　玉山　氷雪
扶公翁　異名略

茶磨之品

一磨ハ家々の形あり紹鴎ノ時代迄てハやもあり
唐磨ノ形あり今の截新厳形よおれし形あり

利休の時ニいたりて利休のこのみの形あり切目
とハ目や切さいひて常の切やうとハちかふあり
茶のもり口もり茶の出くちまて目極出来やう
前ハ上下ノすりあはひ上磨の芯木のさきまて
すうし茶とのりのすまはひありて下ハ一文字
すりてもりめを一筋ハ筋ハなくもなく
そのあり
小堀厳形ハ上磨ノサシ渡し八寸弐ハ七寸アリ
目極窠このみにてそのあり
右織トノ形ハ唐磨ニ不同形し上ノサシ渡し
弐寸ハ五寸五分渡りもなりハ其けをたかく

きゝ候ものなり
内匠殿形ハ上の方ハ少ニ分かりもノめんヲトル
深く大形有ホト
磨りする法ききを持り候ハ有へし
唐ノ説ニハ　麦ノ磨冬ノ磨トテ別ナリ　麦ノ磨ニテ
冬茶ヲヒケハそりすまて候し　又冬の磨ニテ
麦茶ヲヒケハそうなるへし　茶ノさゆ薄く濃き
その道にて磨のきりやうも　相違有ル事なり
も茶ヲ焙ホイロ或湯ホウもナドメかハくれハそれヘも　磨
の石ハ候由こハ　水氣自然の錆サビアリテ出来やすし
一茶ハ第一風濕ニ依て悪やう　焙碾ヒキ製ノ第一の

第一
一袋茶いつみていつかかり味ひへんじ候ハまいらす
焼物ノ鉢を釜ノ上より下ノ火をはらひして
鉢を久しくよくあたゝめて袋の茶を鉢の中へいれて
其上ニ紙ヲおほひ其の茶の香ニ補
るを一葉湿みてかろくさまし候へは新キ
袋ニいれて口をよくしめて　相葉茶とハ
詰付ありし候かよりて壱斤もり
壺底へいれ其上へ袋茶ヲ重て又一斤ほかりの
いり候茶を入袋の上へいれて壺の口をよくしめて
て高キ所へ三十日もかりそく相うまて碾候よう

湯桶ありしてもくへし大形なるをよしとあり
一 茶の湯ニハいたし道具ノ品
一 侍合ニ侍合ひ筥 一人数ホトうろみくへ
ありかりは
一 同 烟草盆 いたし 火入ナトハ物数寄あり
備へ烟盆ありとうろう江戸 灰吹よい青竹
といたし烟草入焼物にても又ハ上代中古或
新蒔絵ノものにても或紙ありいたしみても
きせるハかうりなるをいたし座鋪の烟草盆
あり 似ぬやうありすへし
一 同 枝を餝ル事アリ 菓ノかゝらいわり候之

かゝらいわり侍合ノ柱あり折釘をうちてかくは
一 侍合硯アリさいれ箱ありいれ候りよし 箱ハ
時代或ハ唐物ナトよし
一 侍合ヘ香炉いたし事いわりさもめて火をさしき
ていたし
一 侍合手水鉢アリ 内庭ト相わしりう蛇やうう
まへし 杉桶いたしても何もより蓋すへし
一 侍合 板敷ノ所ハ敷座いたし 人数ホト
一 夜会ノ時ハ塗暗燈 おく
一 釣燈籠アリ 釣暗燈もアリ

○亭主　茶をたてんはかまのふたの中にてすゝく
さゝと置てそ上に茶わんとのせていたゞくへし
けさは茶わんとふくさとを見きそいだ
事もありけり、客はなてゞふくさにのせて
いたゞくへし　やうしは別書に記ス
○客　上客左の手にて茶わんをいれた、返し
右の手にてふくさをとりて次客の中へ茶
わんとふくさと取らくていたゞく
○次客より茶のいろと見ゆる事有り上
客次客へ一礼ありてふくさとたのみへのせ
茶わんをふくさにのせていたゞくて云るか

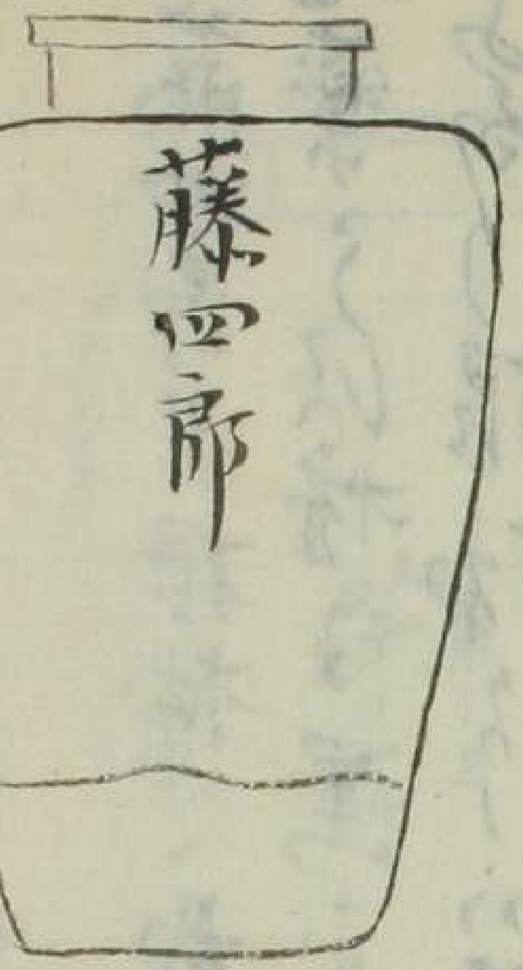
どのにてゆびにて茶わんのふちをぬぐひ
次の客へわたすべし

○次へ茶わんをわたす時右の方に客ある
時は右の手を添へはなて左にて渡すべし
さて左に客有る時は左をはなて右にて
渡すべし　うやまひのしるしなり

○三人めにて呑みさしを下に置て呑みさしに
のみて次の人へわたすべし　呑みさしを上客
の前へは上客よりもりよせのうへかく
わたし又はまた茶わんあとのにつぐ時も

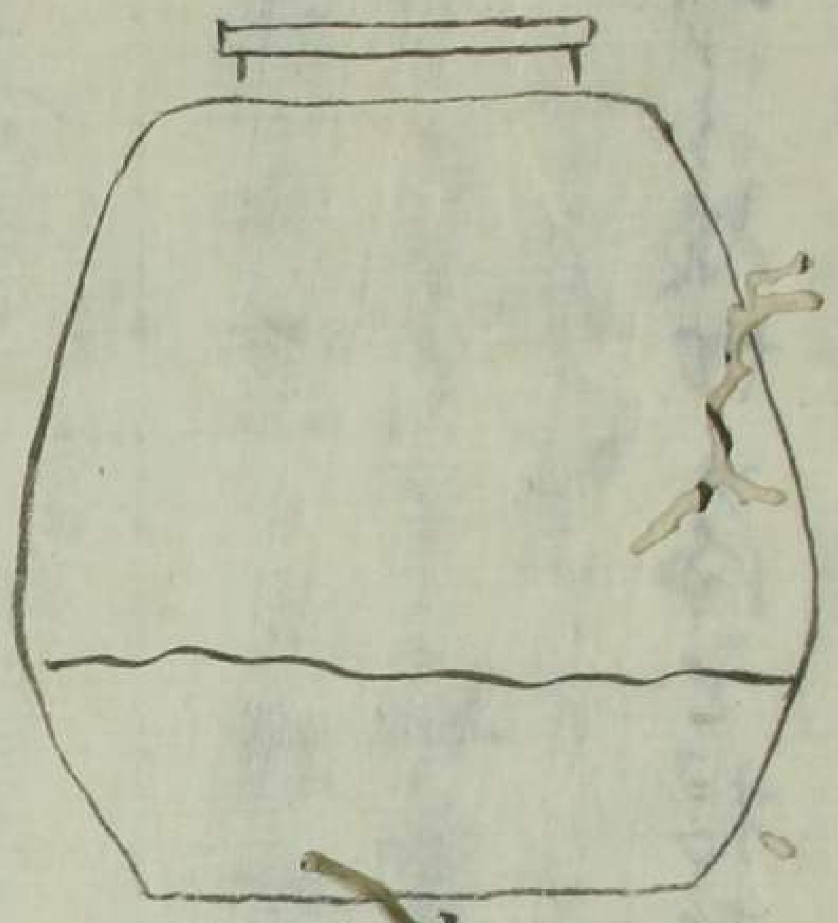
○四人めにても右同じかわらず　三度目呑みさしを

瀬戸茶入之大概



後鳥羽院　元暦　文治二
年数四百九年余
赤土　白土

右藤四郎焼ヨリ根枝トイフモ作者同人形葉茶
壺ノやうナリ　地薬はかき様なりさらにて黄薬
黒くすりかけりと後に藤四良焼といひならはし
うづくりき切あるを根枝といふなり



尻膨

時代前同

藤四郎之

後ニ至リ源十郎 利休

織部 万右衛門 鳴海

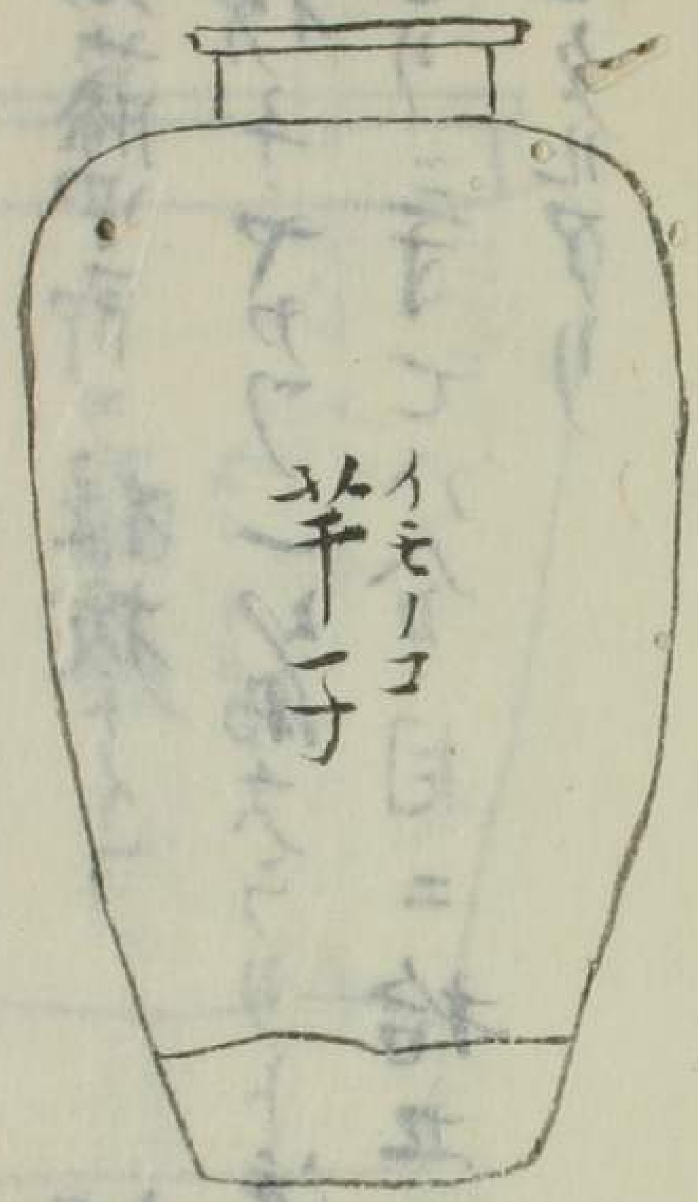
堀出 椿手

右藤四郎ヲ根抜ト云也 又有ハひさくりと云 尻膨ノ

地薬ニ此様ニ黒キあうはくすり切ヽ底を根抜する

いかにも根抜ハ肩ノ後ツクリ薬ハ南部也

久川也有をのあり



芋子

後鳥羽院

元暦 文治

四百八九載

藤四郎

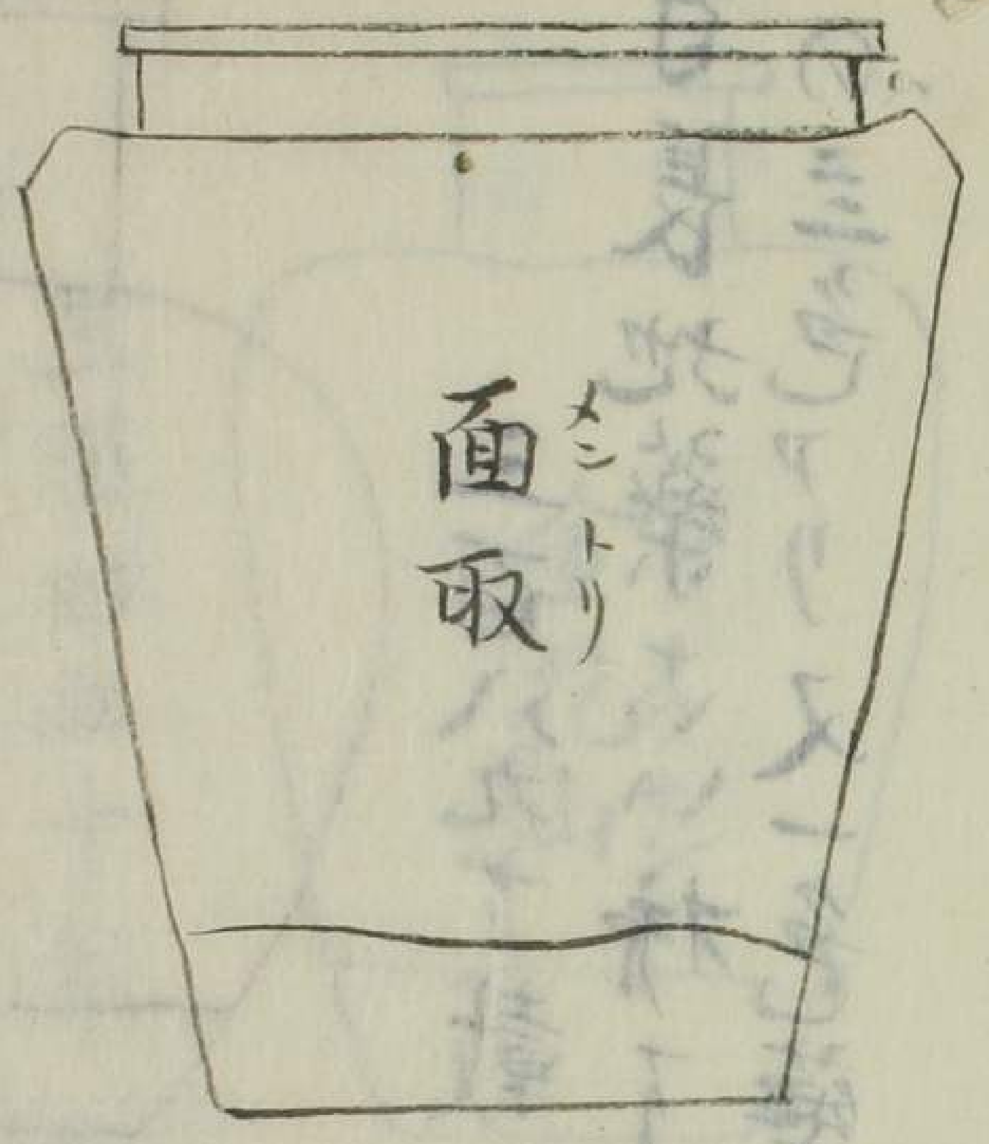
右ハ去元暦文治之茶入ト同時同作ナリ是ヲ

薬菜春慶のさるうちて地薬ホツい様なり

サツト薬黒キ薬かゝり口底を藤四郎トイヘどモ

ハス

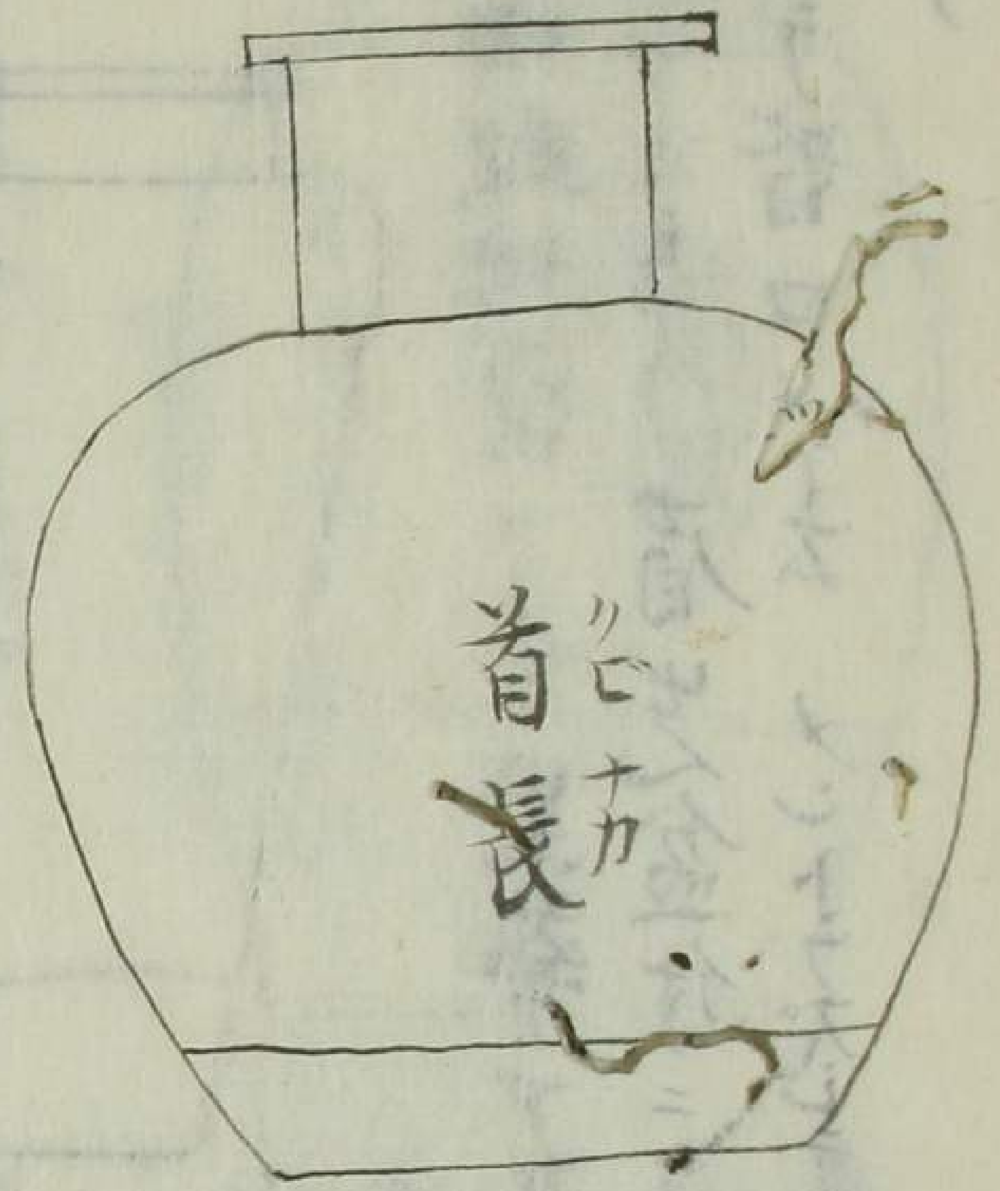
唐物　藤四郎
飛鳥川　苗代藥
落穂　小河
御堂　柳手
遠山　野田
名物之形中古當以之
地土ウス柿　地藥さい
右藤四郎ヲ根拔トイフ
柿ヂヤカツ一ぬスラリト流レヨツル　タケ二寸七八分
ヨリ三寸七八分目ニ拾五六目　中古コレヲ焼イタ
シタルアリ



亀山院
アサキ土
ウスキ土
文永　建治比
右面取地藥アメニ黒藥アリ　胴ノ称ちぬよ
節アルモアリ眉先盆付ニテ面ヲ取　又口廣キニ
ヨリテ皆コレヲ云
メントラズシテ眉衝ノタケ短キヲ手切ト
云フ

伏見院　永仁　正安比

赤土　本イトキリ



三百八九十載

右首長地薬古い柿了　黒薬黄ハ薬ほし
其の三色アリ又一色薬モアリ

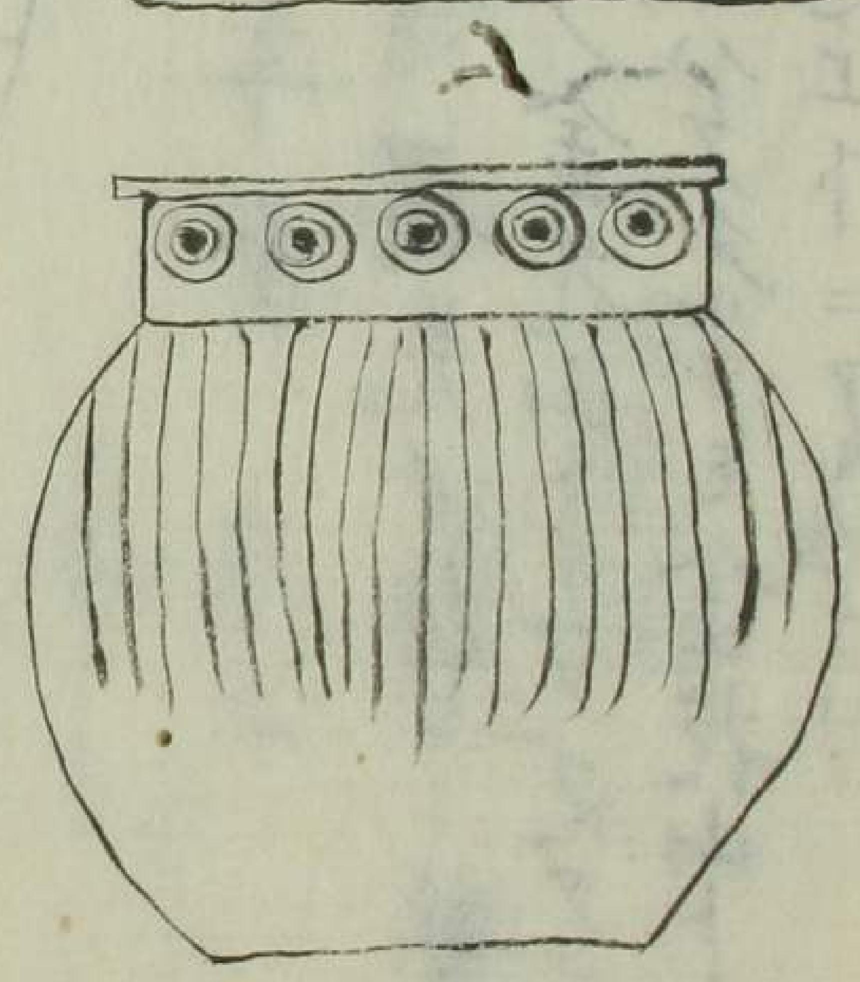
光明院　延元　暦應比

三百四五十年余

右金花山地薬古い柿　肩先か柿了　薬ハゲ
シテ柿クスリアルヲ本手ノ金花山トイフ又アメノ中ヨリ
薬キレシテ其ハ跡赤ク薬ハゲタルヲモ金花山トイフ首
ノマワリニ青キ　チヤ　カウ　必上下ニアル物ナリ

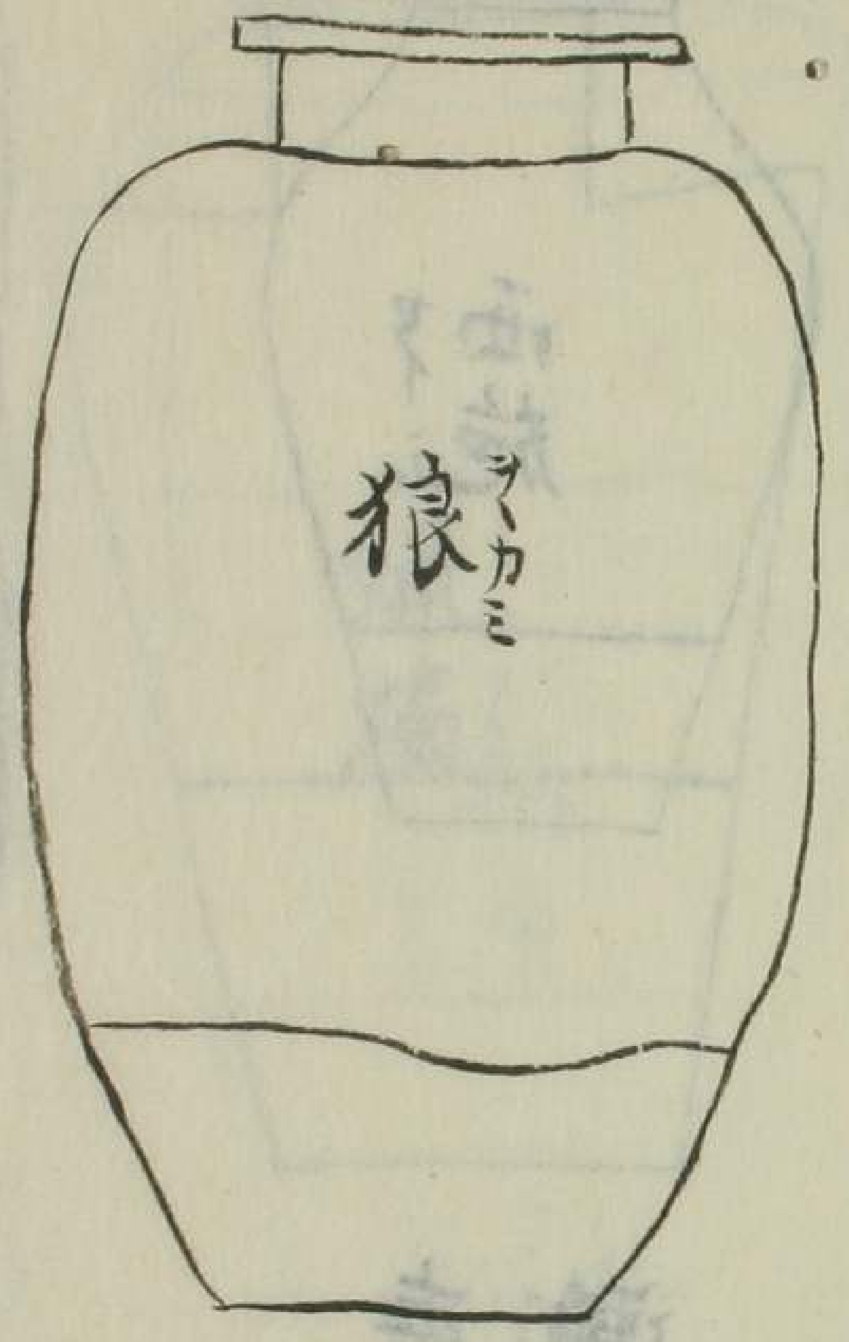
源十郎　加賀手

廣沢手　伊勢手



類座

瀬戸　真中古



光明院

延元　暦應比

フカキ釉イト
キリ

三百四五十年余

右地藥ノキメニシテ上藥ニ黄ハ藥ナトノナダレアリ又ア

サキ土ニテ岩ホトヲクリヌキタルヤウニ見エルモアリ

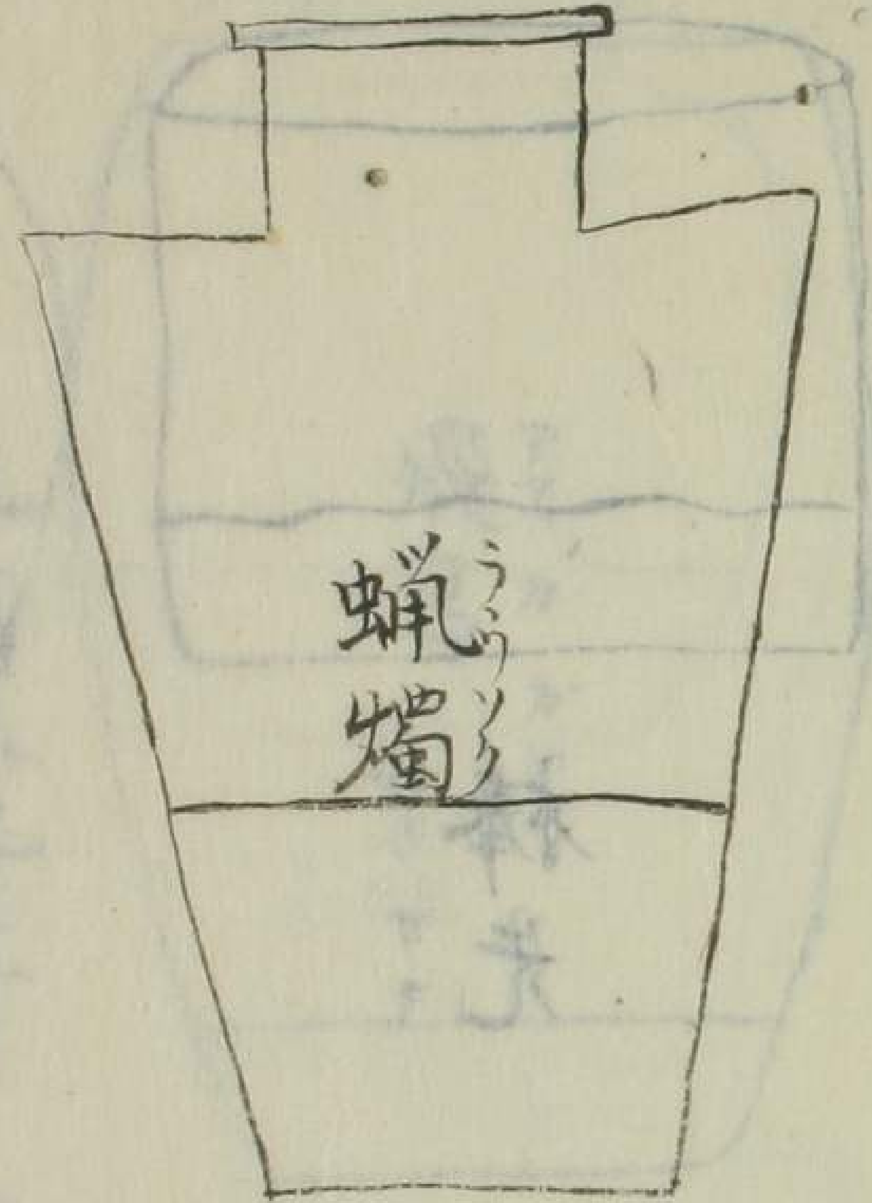
ロツキイヤミクテ藥狼ノ毛イロノゴトシ

正意
利休
新兵衛

九手
織部
吉兵衛

唐物
瀬戸

嶋物

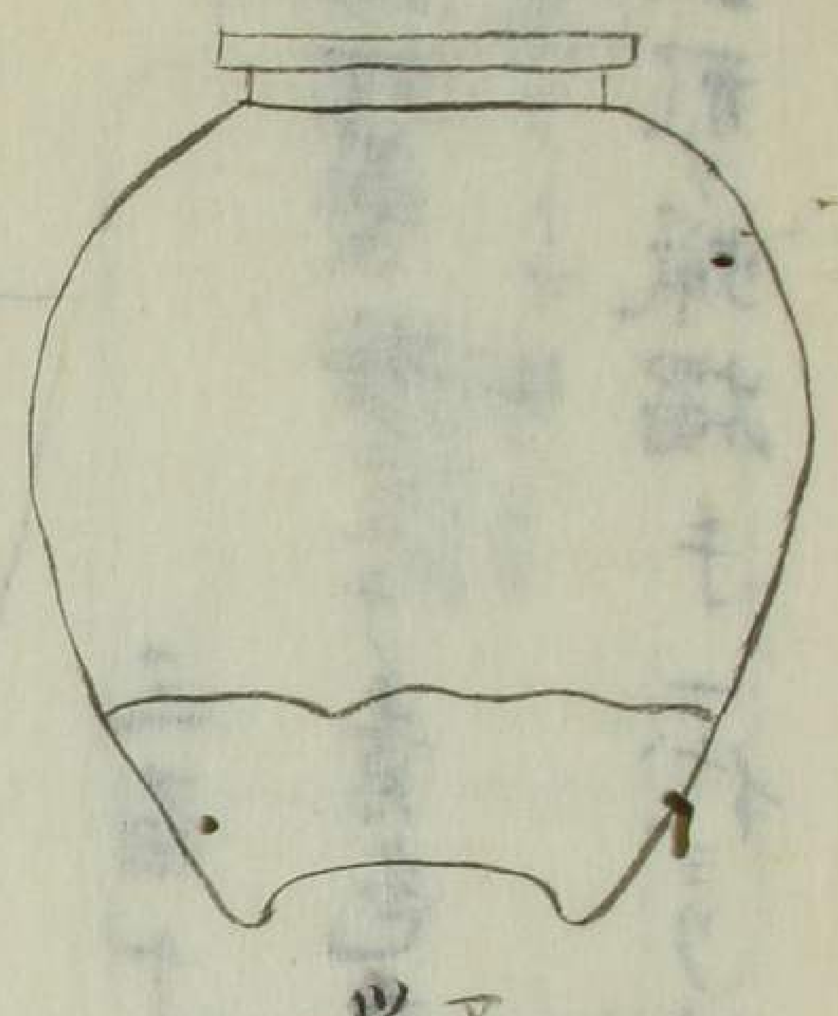


後円融院
貞治 應安比

細ナル
本イト
キリ

三百十年

右地薬掛ニシテ青色ナル黒薬多クアリ薬トマリ
高クトマル
此形ノ蝋燭手一作ヨリ後何ニテモ焼事ナシ

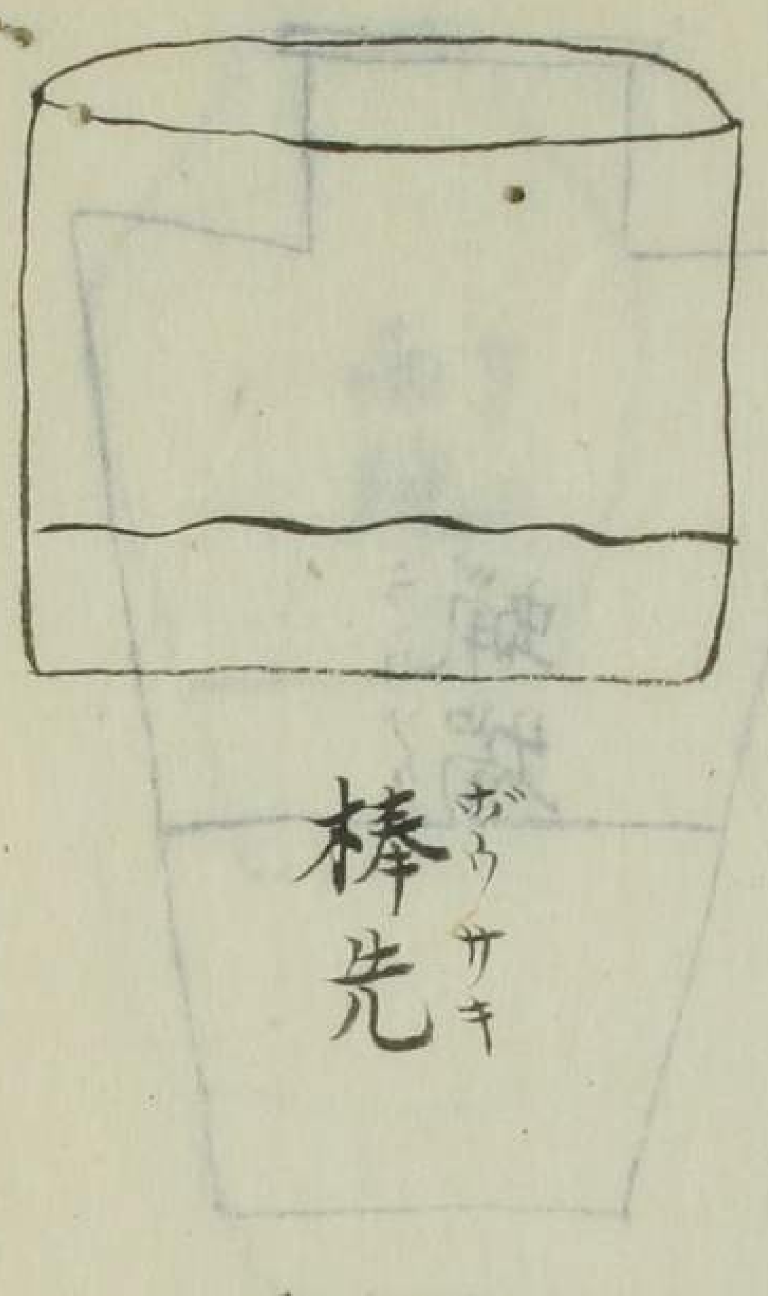


挙底（アゲソコ）

芋頭

芋子

嶋物



棒先（ボウサキ）

瀬戸嶋物

真中古

飛鳥川（アスカガハ）

後小松院

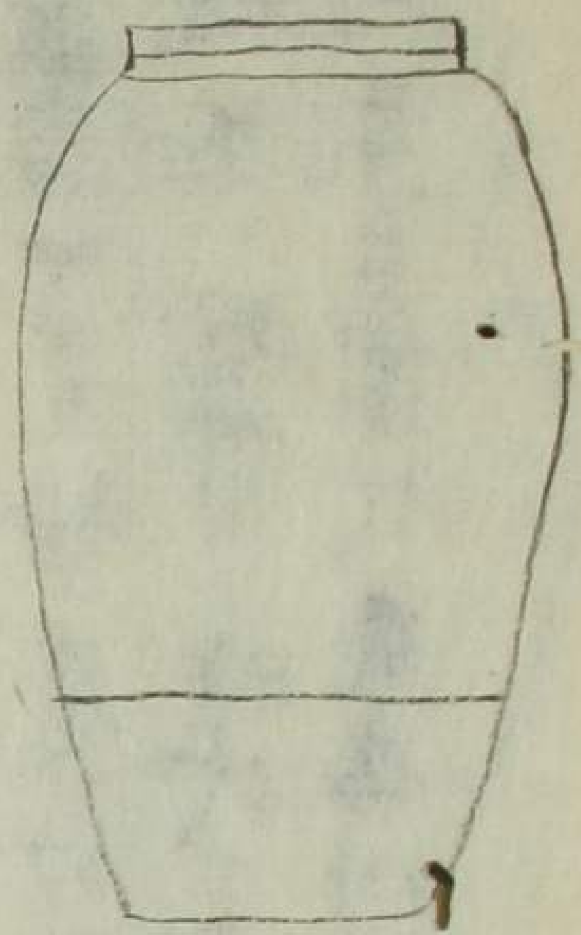
康明

應永比

二百八九年

此時代本飛鳥川ナリ

地薬ツヤヨキ様肩計首本マキテ黒薬アリ上手ハ根被下ハ捨貫ノ時代マテ地様ノ物ニ肩ハカリ黒薬アリ何ニテモ當田代飛鳥川ト云事ヒガコトナリ

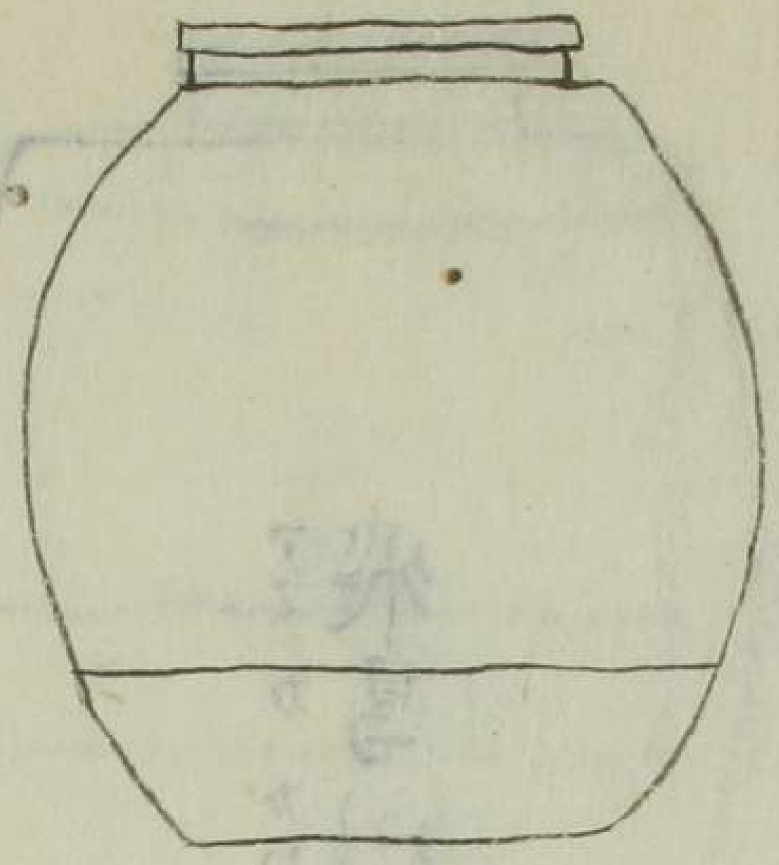


二

常陸帯（ヒタチヲビ）

唐物

万右衛門



茄子（ナスビ）

夏山　小河

黄クスリ　源十郎

椿手　伊勢手

葵（アフヒ）

後花園院

永享　嘉吉比

本イト切　或ハ細キ

輪イト切

土ウスカキ

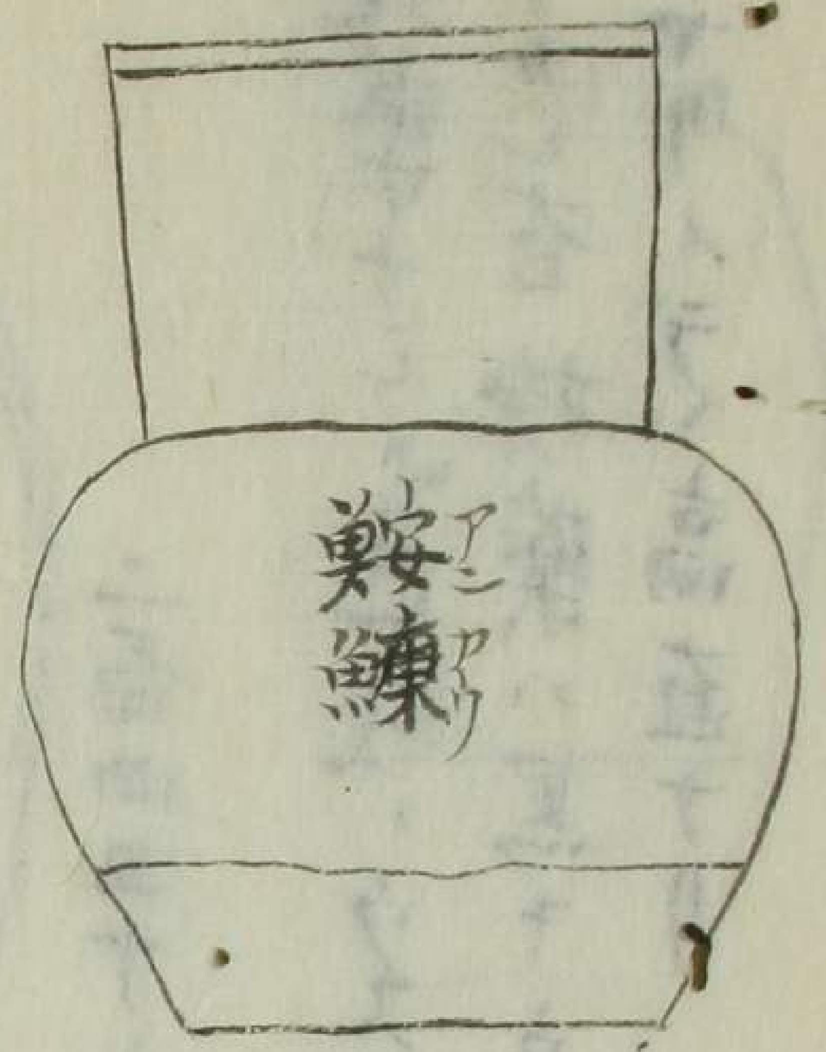
ウス赤土

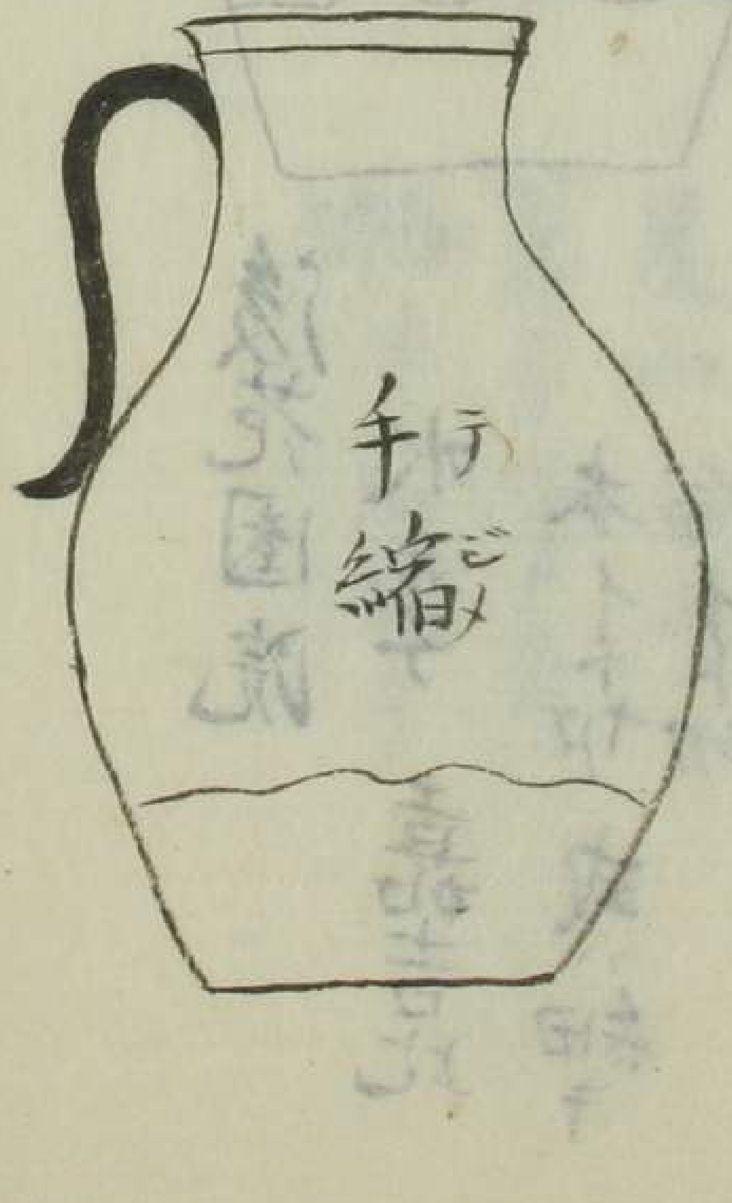
二百四五十年

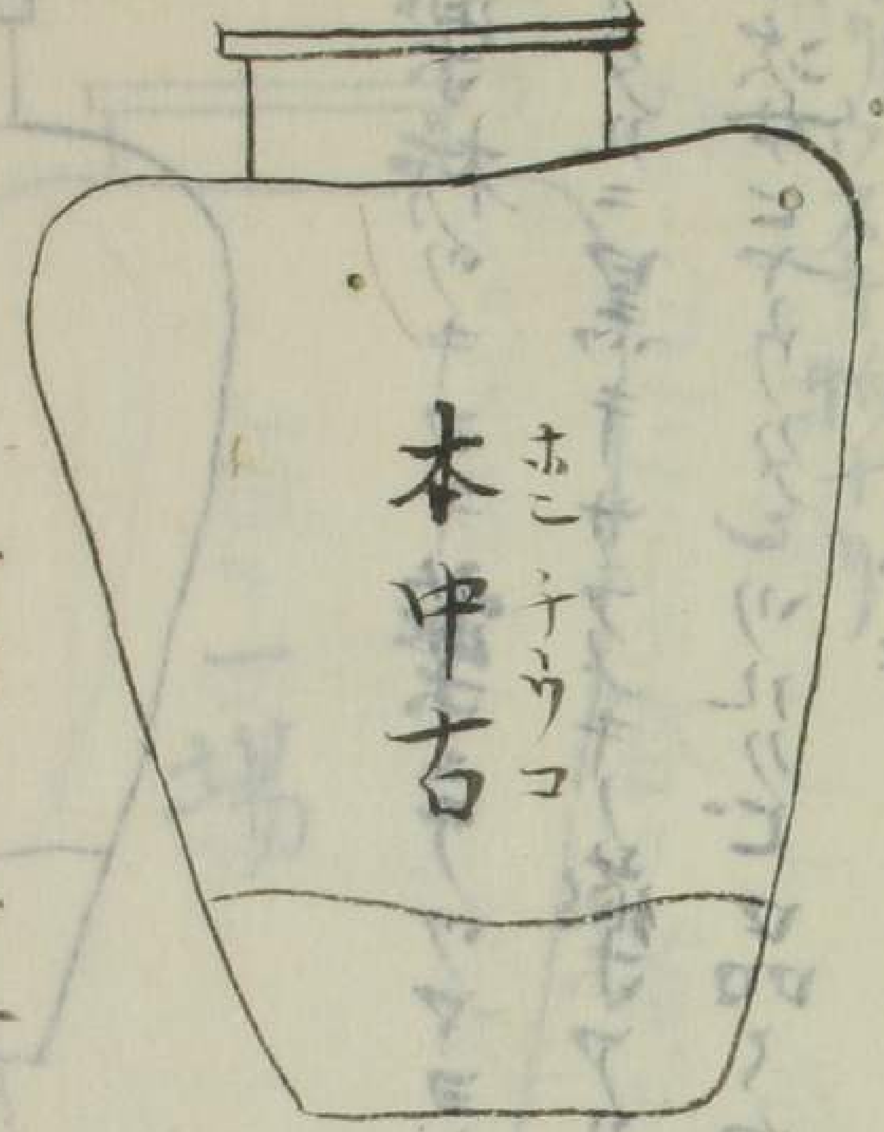
地薬ナシメ色或ハウスカキニシテコイ薬又ハトモコマ

ナガレ有　掛薬ハ黒キウツラフノ薬有リ

ハヤリイデヽ高直ナリ







後土御門院
寛正 文應比

アサキ白 火イロ
ウスカキノ土
糸切ヒキサコシ
輪イトキリ
ウツイトキリ

二百十年余

地薬 柿 黒薬 黄ハ薬 ゴマ薬 梨目薬 地アサキ
薬アリ薬ハ品ヽ
時代ハ二百年余ノ物ヲ本中古トイヘリ

一　後奈良院

亨禄比

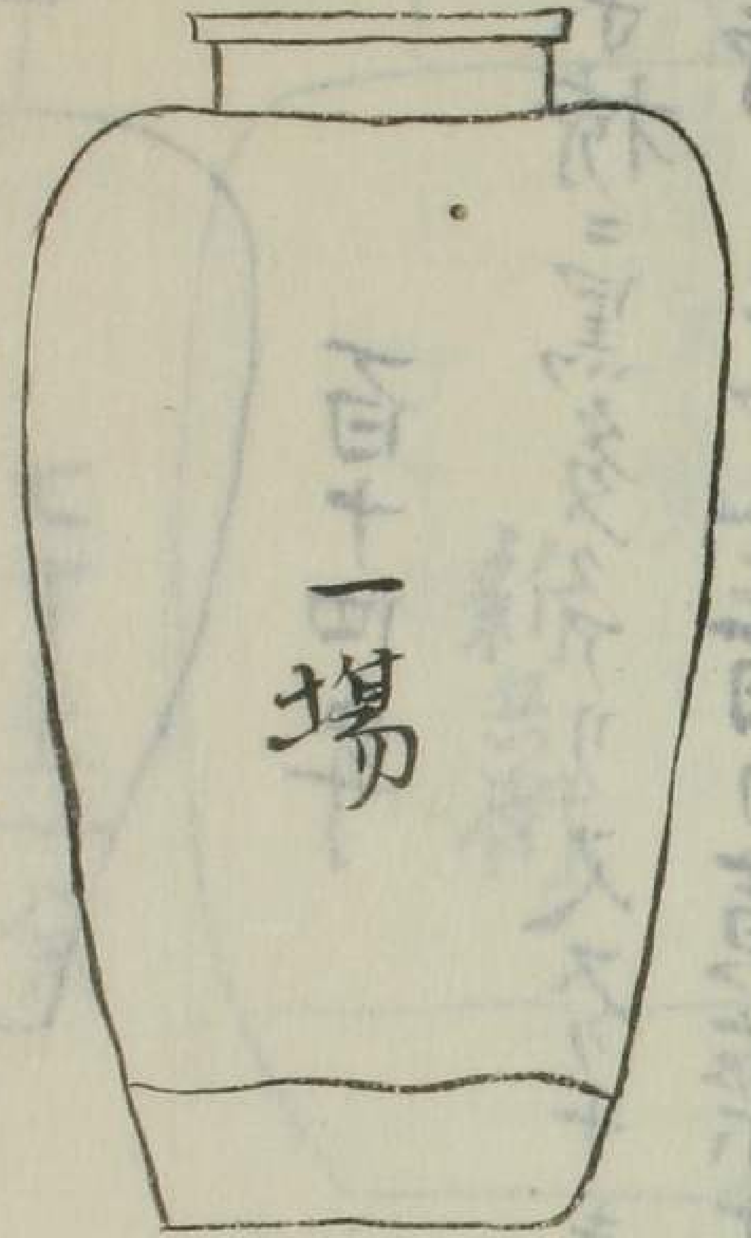
唐物土

𥿻イト切

ヒキシコシ

地薬柿ツキヨキ薬ニテツヤヨキ黒薬アリ又地柿ノサラ
メキタルニ黒キサラメキノ薬アリ大形一色ナル物ナリ風流
ナル姿ヒヤウタンツルクビ品々アリ柿ノ地薬ツヤヨキニ眉
又ハ胴ニウスキ黄ハ薬ノ有アリ朝日手春慶トイフナリ

作リウスキ物ナリ



同帝

天文比

アラキカベ土ノゴトシ

白土イカニモカタシ

本イトキリ

百四五十年　ニ

太地薬香イロ黒キノギメニシテ同シ瀬ナガレアリ
カワカウヨリ口廣クイカニモ茶入ノ姿ヲビニシヤウニ作
リの有リ

後陽成院
天正　文禄比

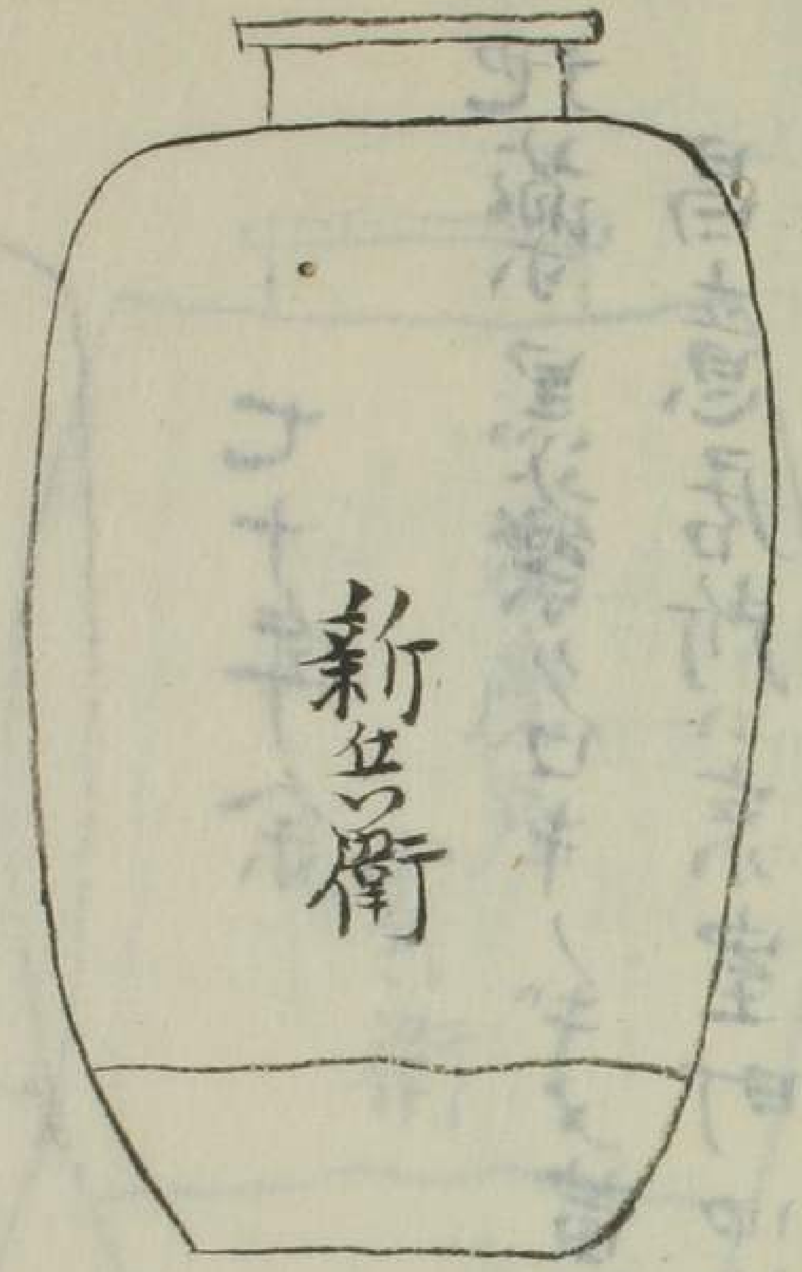
カタキヒイロ
二代目白土
ヒキヨコシ
ヒイロ八本イト切

百十四年

地薬柿ニ黒多クアリ又スクナキモアリ又アメ薬一色
ニテ柿ノヒマアルモ有リ黄薬ナトモ有リ坊主手二代
アリ二代目ハ胴ニスヂナシ肩ニ二スヂ有リ

同帝
文禄　慶長比

イトキリノ上イカニモ
チヒサシ
本イトキリ



七十年余

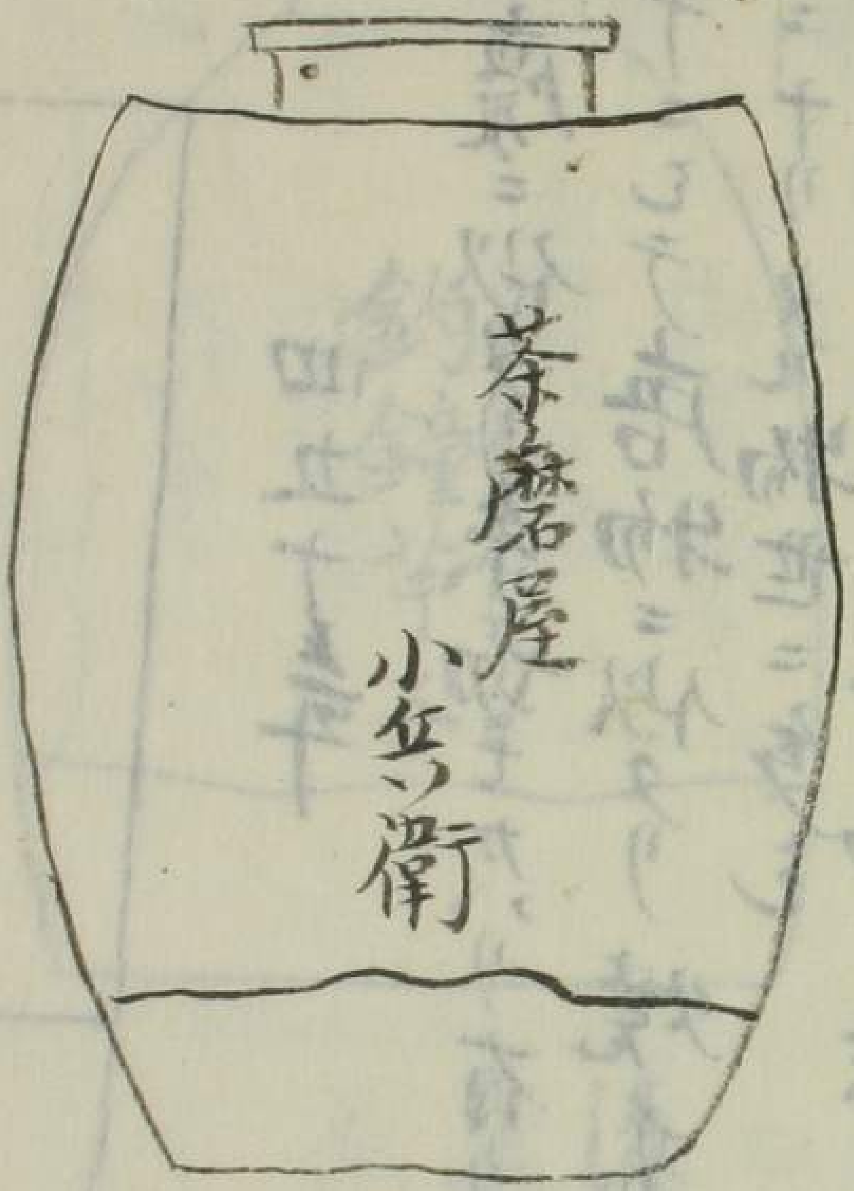
地薬ニブカニ薬ツヤヨクシテ上薬ニ黄薬ナト有リ
姿ジンジヤウナリ
新兵衛居所ハ京三条瀬戸物町ノ唐物屋ナリ

同帝
同時
ツクチ土
イトキリイカニモ千ヒ
サシイトキリノ目ア
サヒカケ計ナリ

七十年余

太地薬黒薬クロキノギメ黄ハナルじヤカツ有り

昌意居所ハ京室町四條下ル町ノ目医者ナリ



同帝
慶長元和
カタキ土
或和土ナルモ有

七十年

地薬コイアメ黒ノギメアリ

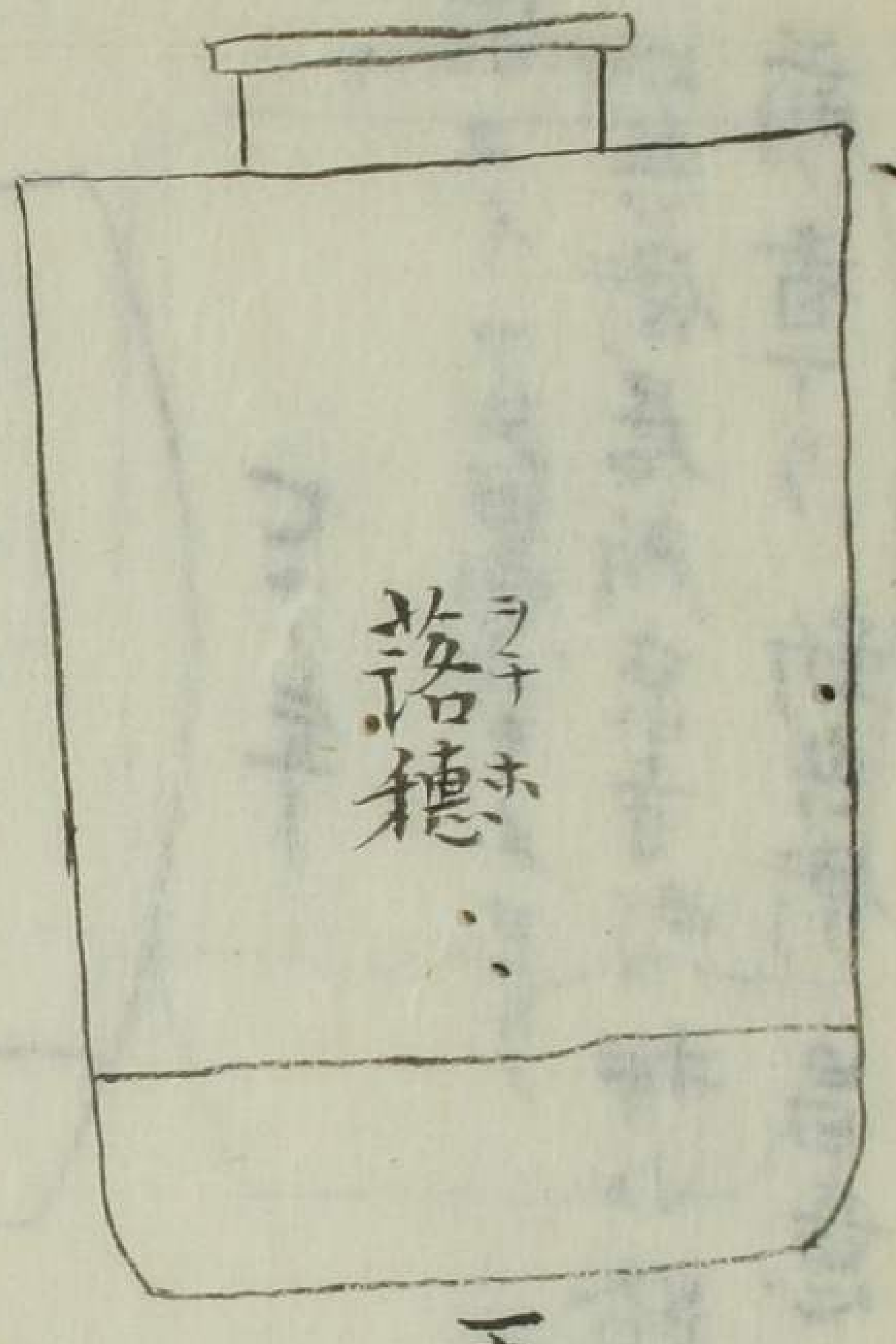
小兵衛居所京寺町押小路上ル町 本王寺

前ノ者ナリ 新兵衛 昌意

小兵衛ハ遠近

上春慶ニ似タリ

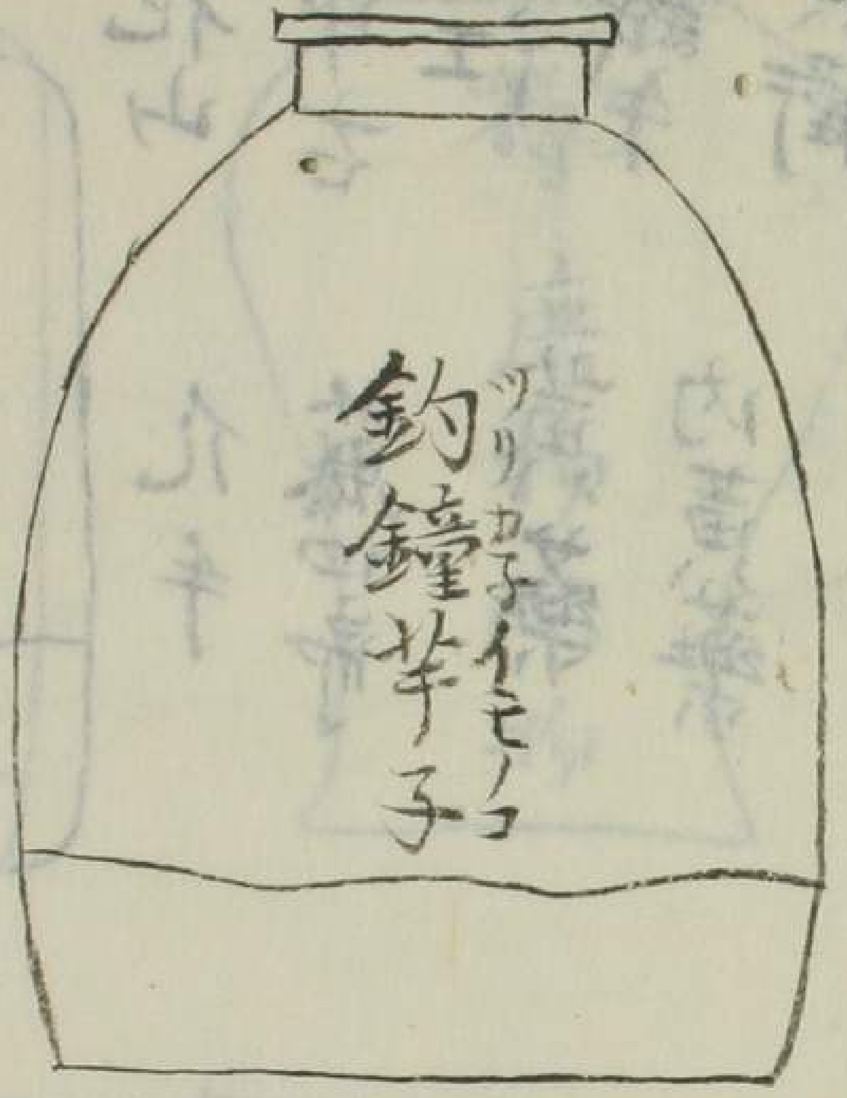
一万右衛門



四五十年

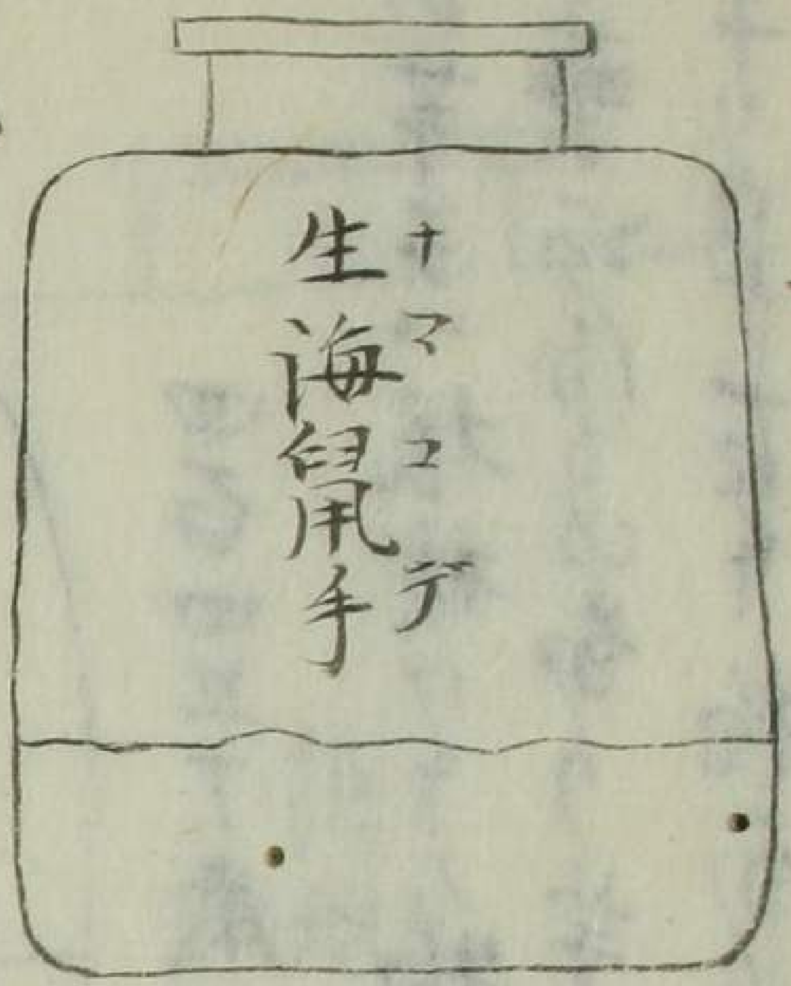
地土春慶ニ似タリ糸切モカハリ有リ本糸切ニテモ何ニテモ
名人手ニモテ唐物ニ似タリ焼イグモテ則唐物ニナルナリ
高直ニナリタル物世ニ多シ
一万右衛門居所ハ京柳場三條下ル町

後堀河院
安貞　寛喜比
赤土　アサキ土
本イト切



四百四五十歳余

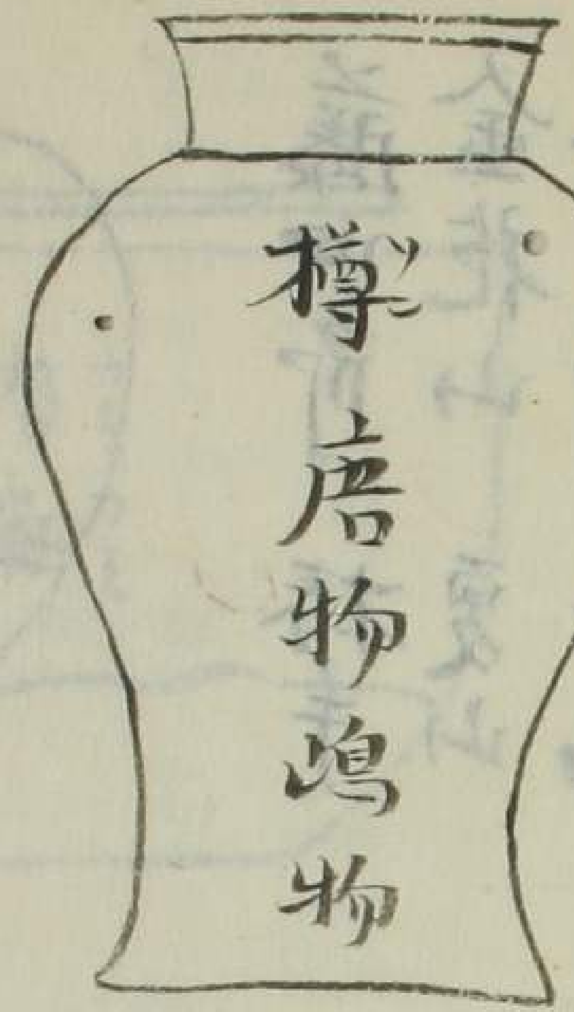
右の芋子ハ根抜ワキノ物あり此より榜ア黒薬
黄薬所々のあり芋子ノ中より出し流りかぶ孫芋
子ナリワケ古キ物あり



金花山
真中古
青江
渋紙手
吉兵衛

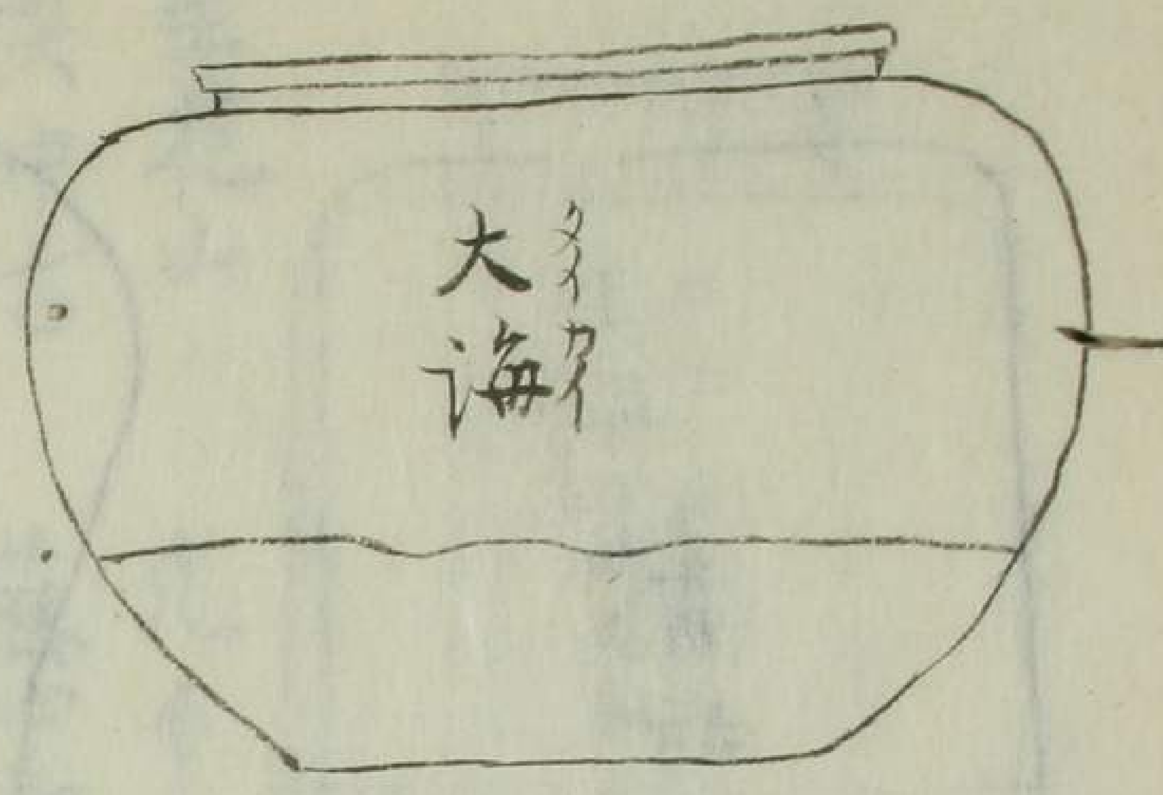
凡手
藤四郎
黄薬
内黄薬

唐物 瀬戸 拔
春慶
高直ナリ
口ノ高キヲ上トス



唐物
峯底
嶋物
真中古

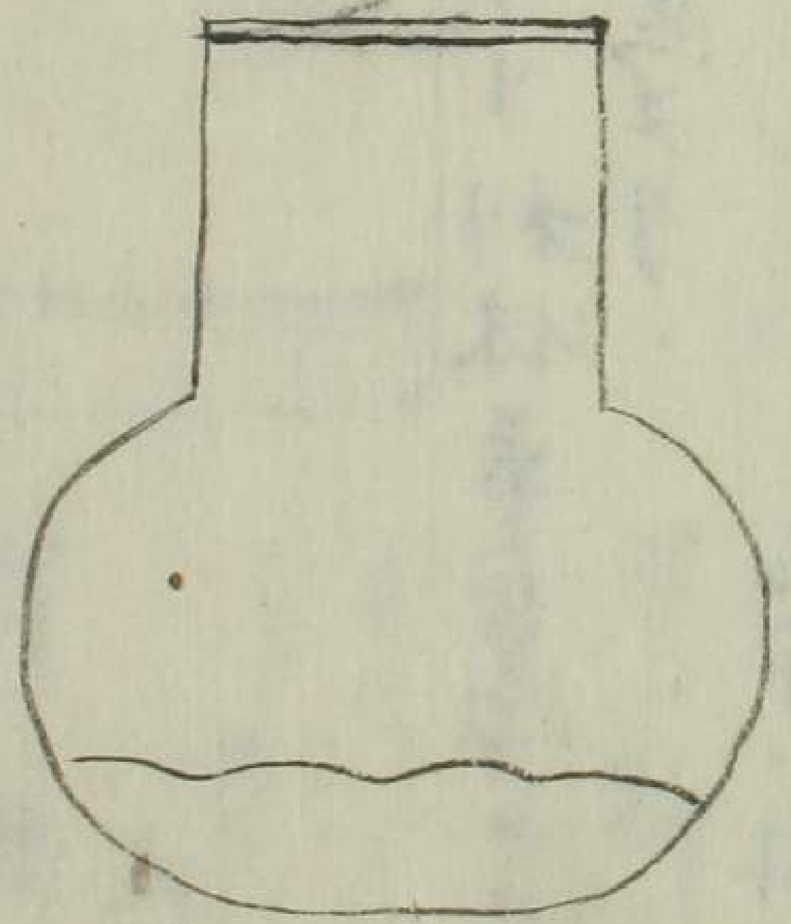
橋姫
玉柏
春慶
黄薬
天目手
姉手



藤四郎　椿手
金花山　夏山
春慶　唐物

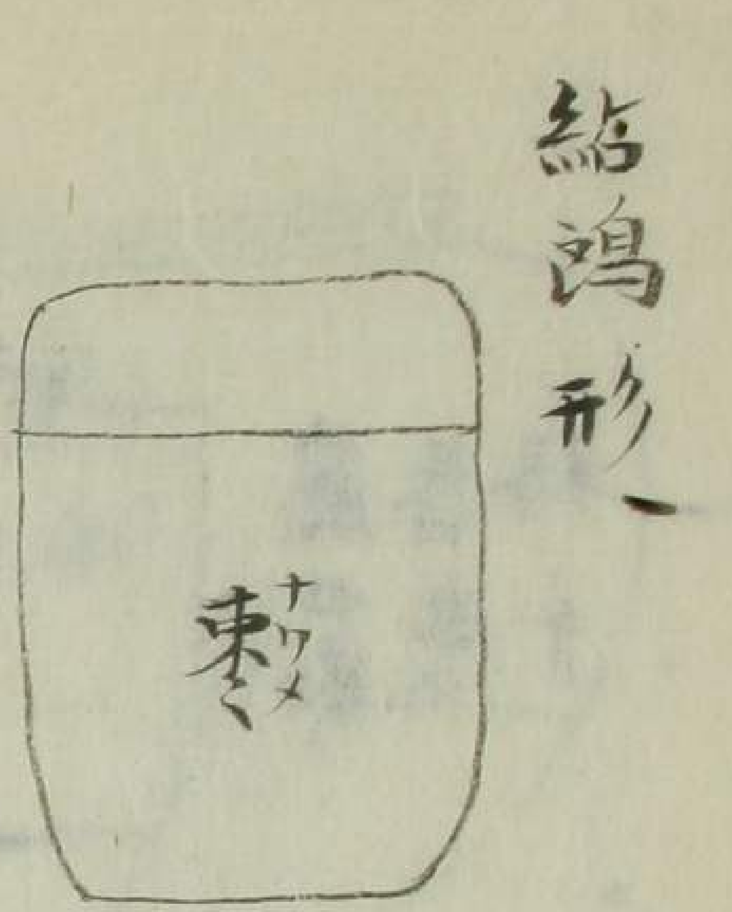
唐物　古瀬戸
古薩广

藤四郎
春慶
椿手



鳴海　利休　織部
藤四郎　源十郎
中古薩物茶入アリ

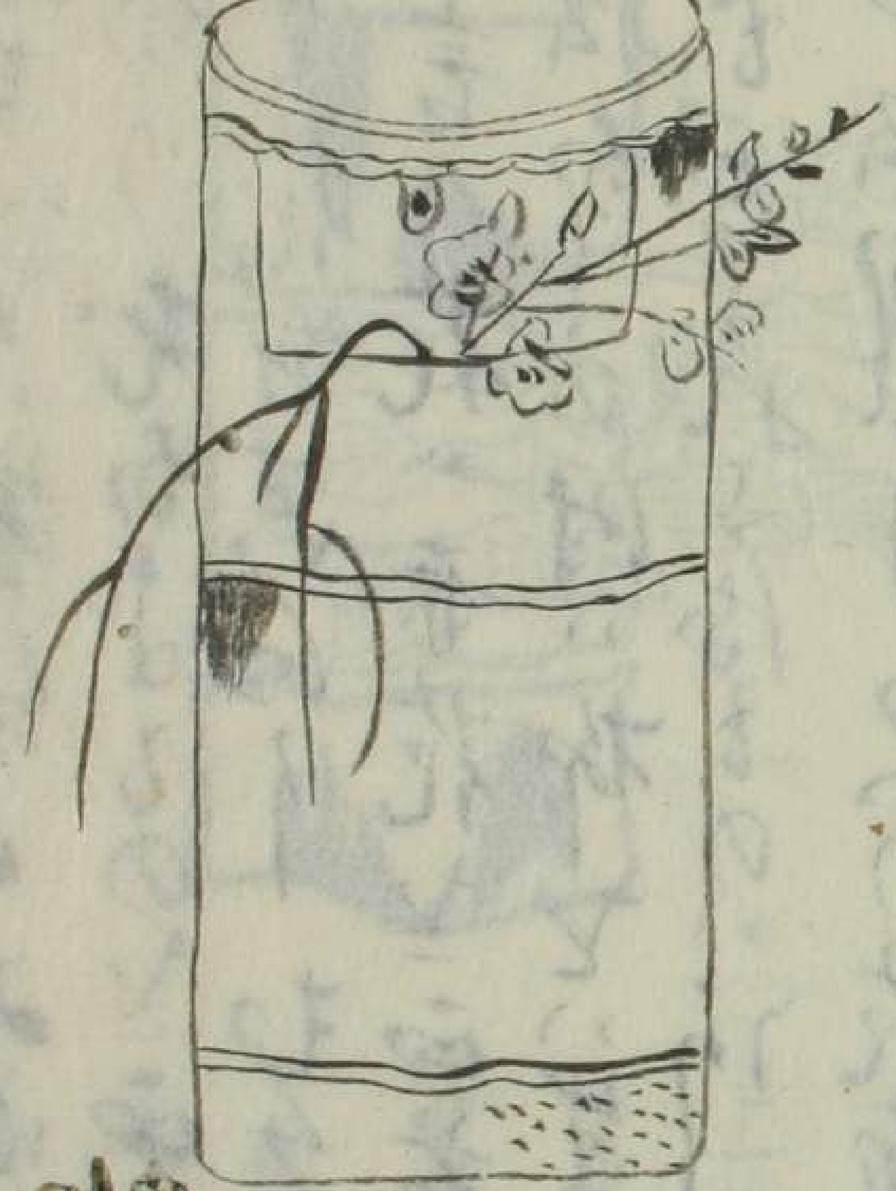
紹鴎形



利休形

時代ヨリ中ナロノ棗ニ蒔絵アリ利休棗ハ黒ヌリニテ
ソコニ朱ノ判アリ紹鴎形モ黒ヌリ

一童切竹花入



正花ハ椿なれ
ども柳ハ志
うれ添を
もち中添也
り其つ
かうて
生そ椿をハ
なひし推ひ
のやうにする
又柳を正花
右すなはち椿をなびしにひしかひ生
寄てさ有也

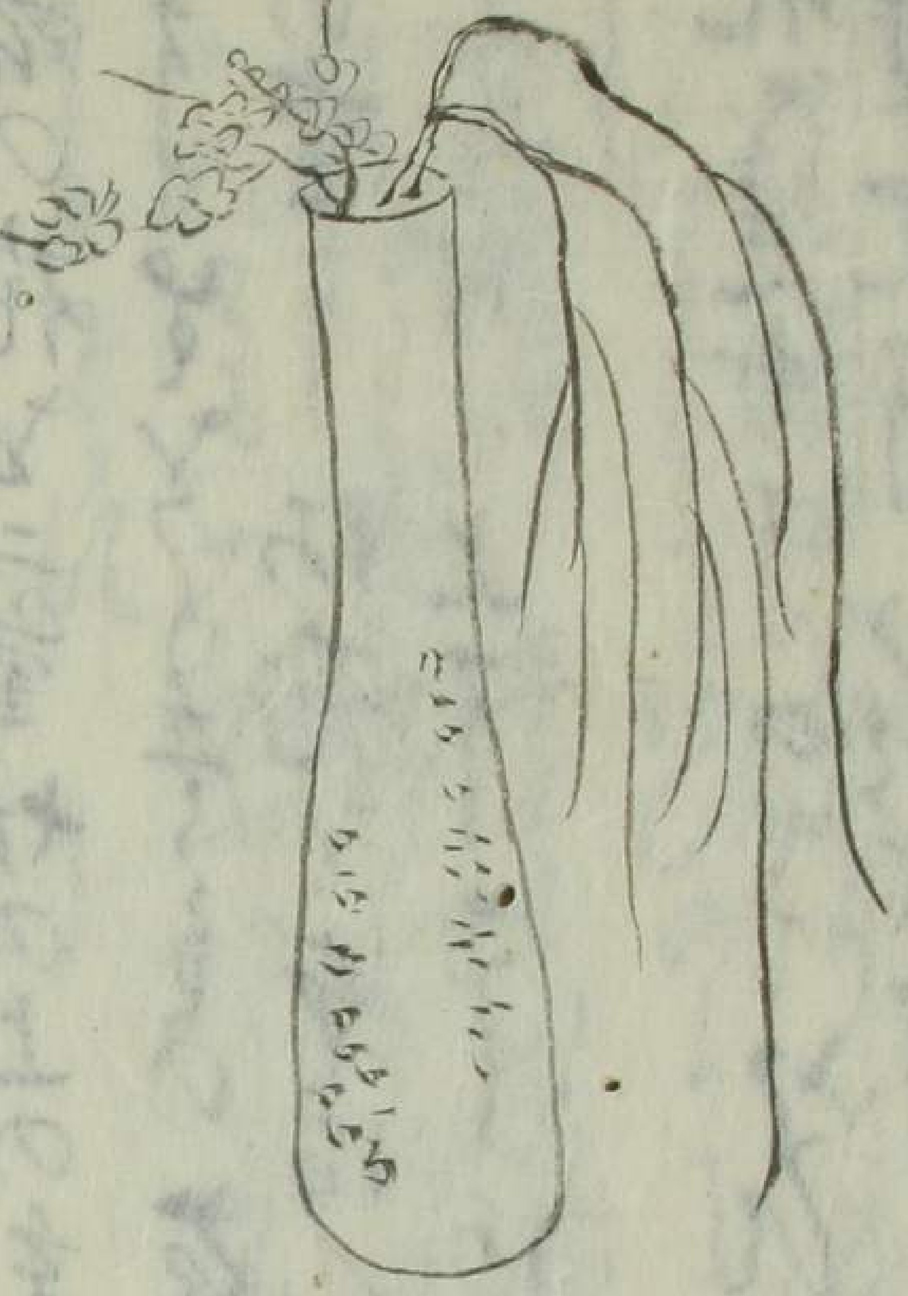
柳ハ花の一躰なれ椿ハ花なきによりて正花に
惣て正花とハ正なり生花にハ式ハ椿なれ
と椿のちやせんとハ客付なみ溜やなり
生花事なりなむなよものと客とハいふなれ
一向に花みて花をさ向りもなる筋なく
椿なし祝言の花ハ赤花を正花なり生花し
つ出式なる祝なとの時ハ柳をハ生花の時し
惣て何にても忌れ候ものハ何し
一つ出式ハ無祝なるなり かへり花なとをハ生花もよ
し又かへり枝を生ても嫌しかへし常の
むまハかへり枝かへりなをいたぬす時り

二重切花入

二重花入ハ下の一重ニ花を生て上の一重ハ明て置る常なり
上下とも水ハ入て置すなり
又上一重を生て下を明て置すも
有り下にも水ハいれて置こと有左方の一重
ハ花を生て一重を明て置客ハ花をのそのま

るよい、たとへ立るものを、いて上方に行ひさき
行ても客にハやうりをくせて其付ものゝ花
をうけて生行ひのよをやうすへし生付ある
下の二重に立るものゝ花行付てましい上の重
を生付てよいこれにはものを生付ハ行し
去られても花のよかりよりて下り加役は遊時ハ
なしかりる
下の重に草花付ても上の重に何花さい
生ても以うしかるにかる柿桜なとのさまに
高く花行付に上の重にもまさ草なと
生付にしたかへ行へし　或ハ若松桜立れ

桜立れは桃　杏なと　葉なといは下りても
上りてしかるへし　高く行てもてもこれは下り
付てよし　あれはかりかりかる
一客の花を二重切の上の重ものせておよし
下に生ても立るものゝ花にいろいろへ付よし
上の重に何花を直に挿んて切り落ひ下の花
よんと付て上にさしはさみやうにて生也
つし
一花を是非にのせていれもようし　又立れ付ハ
切り見にいれていろいろ行なし　花切
をそへていれます



瓢の花入

瓢の花入ハ利休の物数寄なり利休か持の
瓢田ト云花入細川家にあり

瓢ハその物也
釘掛ハ金物
式ハ法なくても
よしくり穴ハ
よろしかるへし

釣舩花いけ

釣舩の花入ハ海舩のかたを
うけて生るへし舩の
表さまを客居の方へ
むきて生るへし
つり式ハ釣舩の時ハ表さ
まの方へ舩の帆とはまを生る
かゝり花とよぶ
朝の花を日出
夜の花ハほれば生
舩の形をうけて帆もかぢも取なんとすへし

利休所持の釣船今ハ加列南部ニ有り
一中比ゟ釣船の花入出船入船と唱り船
とりハ云事并有りちかはし利休の時分ハ
しか云事ハなくて船の心をうけて生花と
なり船の心をうけて生候よハ木のつかへ
今の出船ハ入船ニ唱り船なり其ちきれ志
かれとも出船ハ入船ハ船先キハ向り上座ニ所
一釣船ハ花ハ四月中旬ゟ八月末まての物なり
船のくさりハ其節の鎖を客座の方江
船の座ハ上へ入まて形を出し
一船の大小ニよりて出しの枝をみしかくも長も

生へし
一總花入ニ多くを出す事ハなきやうニ出ても
少しかハりぬハ竹の花入ニかきりなり
一客の花ハ主居へ向ケ是ハ客居流ス
一花一葉を嫌ふ事有り茶道ニハ少し
かよれ一輪椿なと利休なと好ミの花なり
一此花ハ葉ハ嫌ふ也し　六花六葉も嫌ふ
一杜若あやめ蓮　河骨　さしまくひの水草ハ
花入の向ふを見通しやうニ生座の方ニ見
を奥迄通てハ
一其外の花ハ何にかはよ見通しハ何しハ根本

みえぬ事とも嫌ふ事なり

置籠花入

一 此置籠の花は上の手とかくさはりなきやうに生へし 又さゝする枝ならて枝をそへ籠の手をいさしたるさまをも何としてもなきなり

れ本をのす所に

又補入て何事も

落枝を補てもよし

かくれ

胴来花入

胴来なとに枯木なとを生る時よき也 道具にてなけれとも 多くは色の花を生る事なり

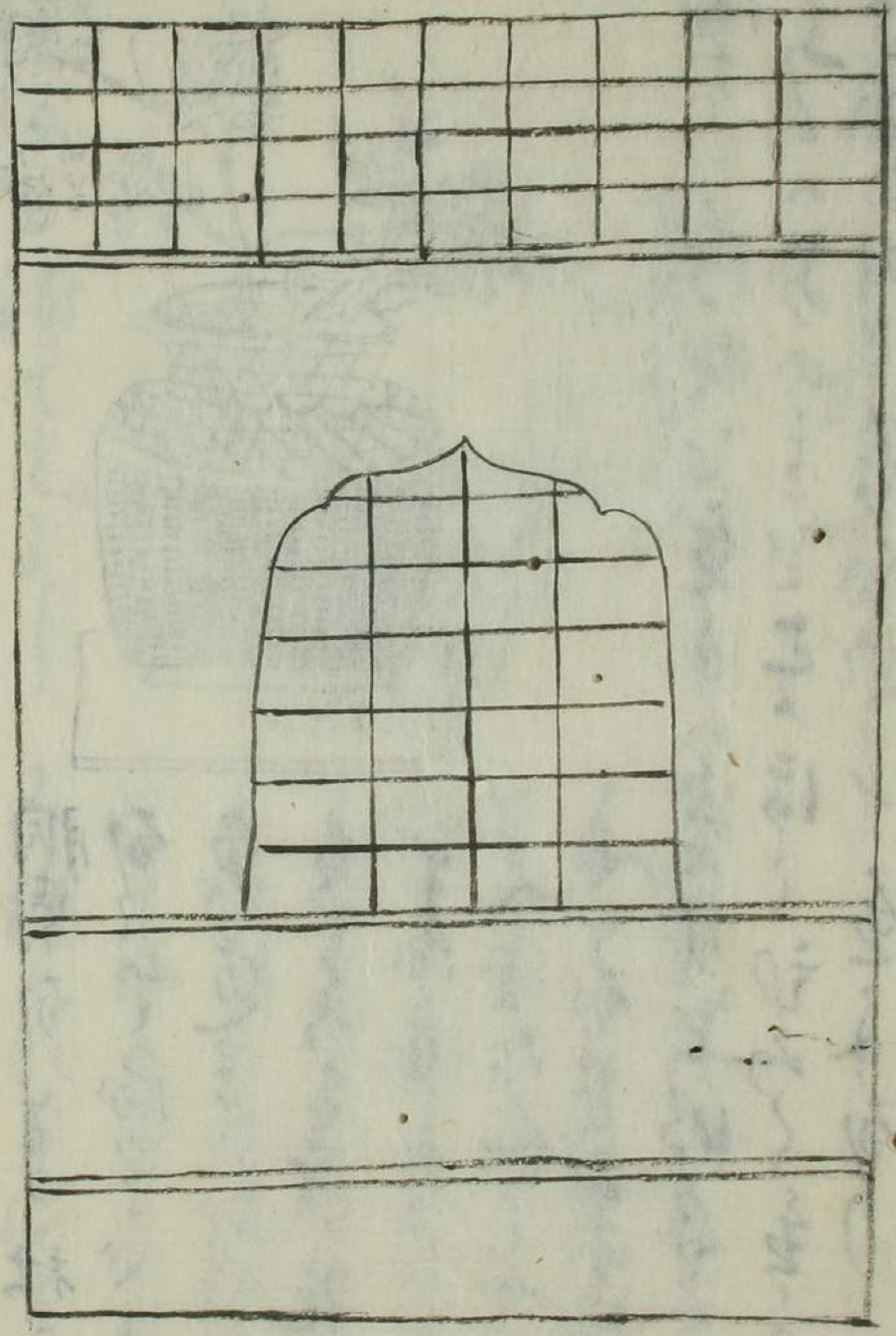
又ぼたんしゃくなとも生る物也

然り 落枝を垂すは客付を明るにて

向ふのかには前の方をとえほとに向て垂るゝ

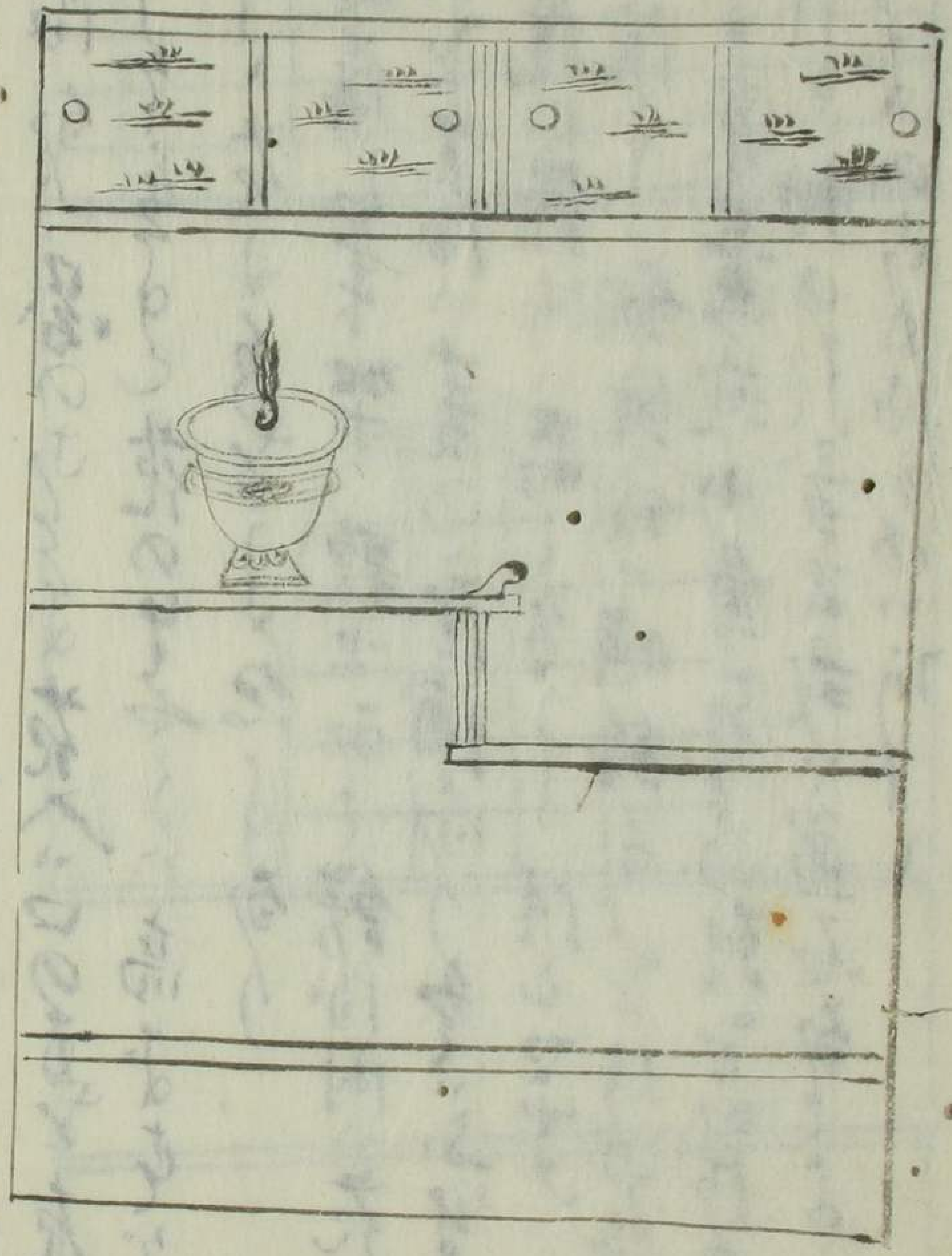
枝水の時も其心得にて垂る事なり

書院の上下花を生る事 付り床下錺物ヲ



りなど床の上下に壺をハ錺りて書院にハ花を
生る事なり器のさしやうハ花入ハ口の方を花の方へ
なして生るも花の生やうハ高さをさぐる
付り花よ形をとうと思ふ事なり
一硯屏 筆架 歌書なとを錺る附にハ花ハ生べ
花をと生るハ壺の座敷なりなどぶ生
一書院の錺物ハ品々多し 諸るて略す
一書院より銅鑼或ハ喚鐘なとを掛る時ハ
下に茶壺或小壺なとの類をかけるべし
付り 軸の前なと書或ハ盆石なとよし
到ずよの古の体をのハ付し
一

違棚ニ花を生る時ハ脇を打置かし

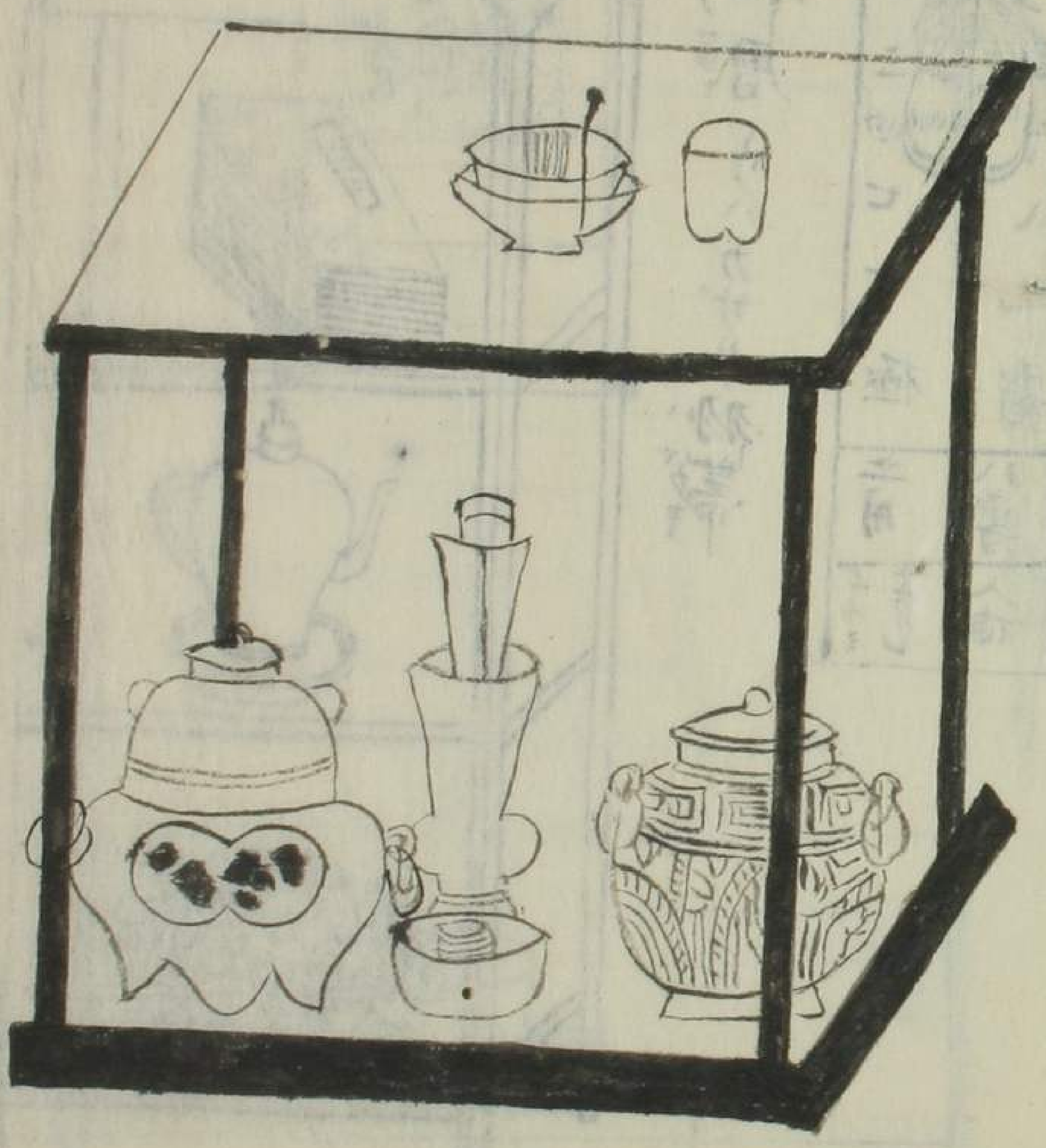


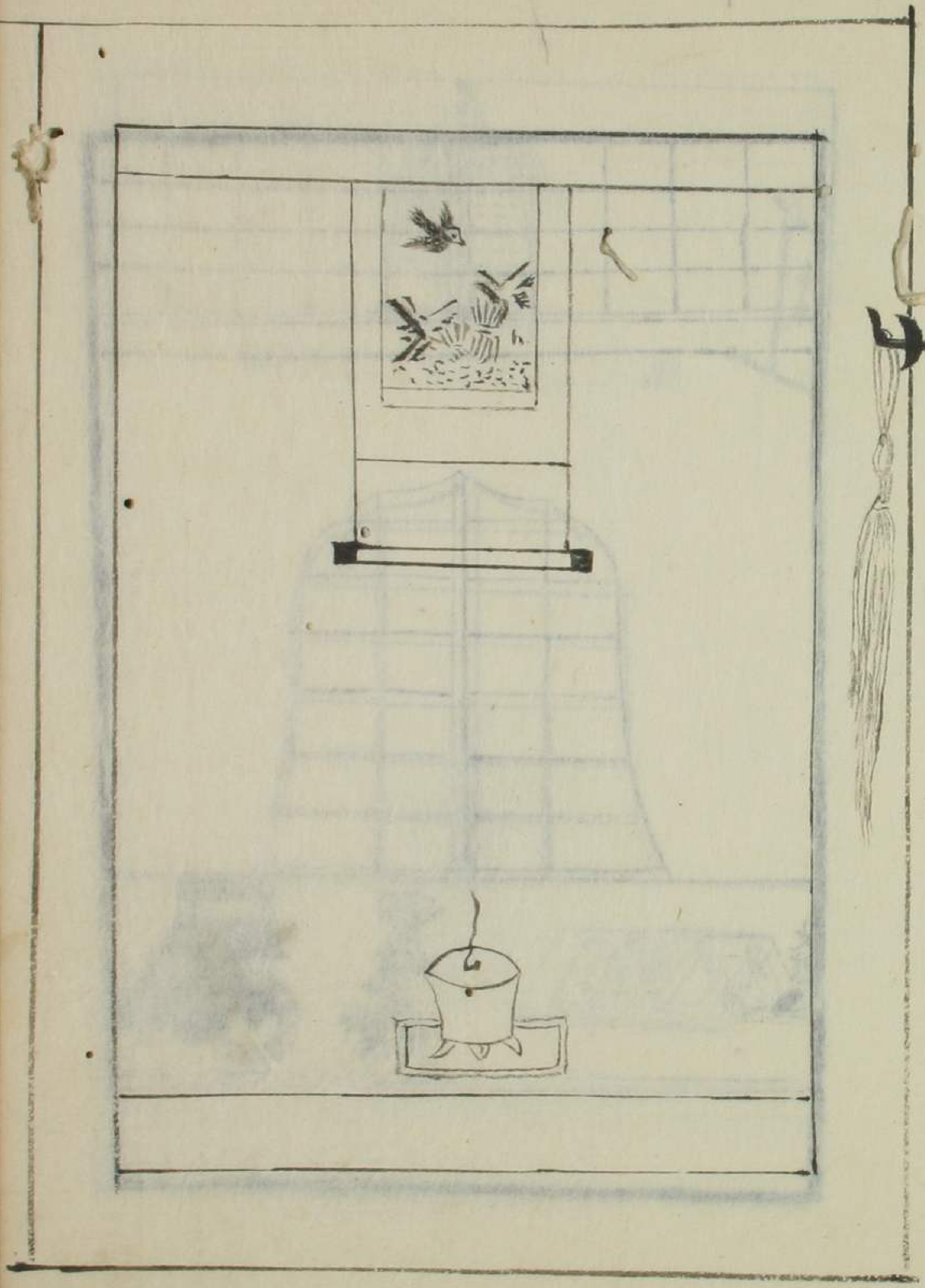
花の生やうハ草木の花ニ同前なり花生ハ
唐物の金物或唐糖物なりしてハ此棚へハ
ふりと床の内書院の上なれり 錺物多よ時ハ
棚の花をかざしらよ物ニ古き盛漱あ坊
物何のよし
一茶の湯ニ茶の花を嫌ふ 色んなる花モ
嫌ふ 香百合 けいとう 女郎花
からりや ほうせん 花はきくひをさのまれ
一きんせん花 こやなしおみ 鬼ゆりなどを
嫌ふすれりスふりうきにまや 利休の
出る書中のきんせんの御法なりわ台

何さんしおみの花を生られしも有
しるのよし　傳字

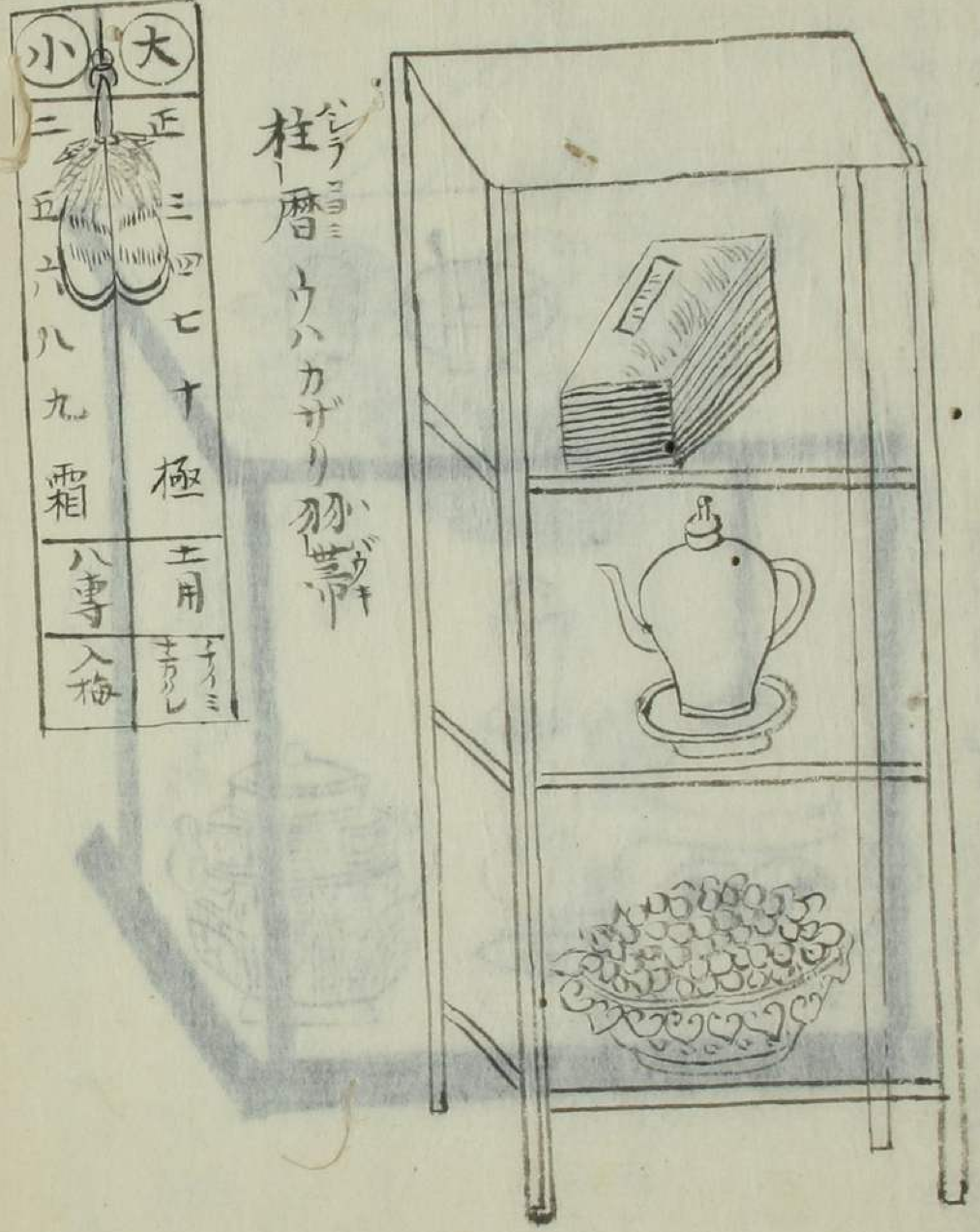
藤なと桐かゝり
習作り

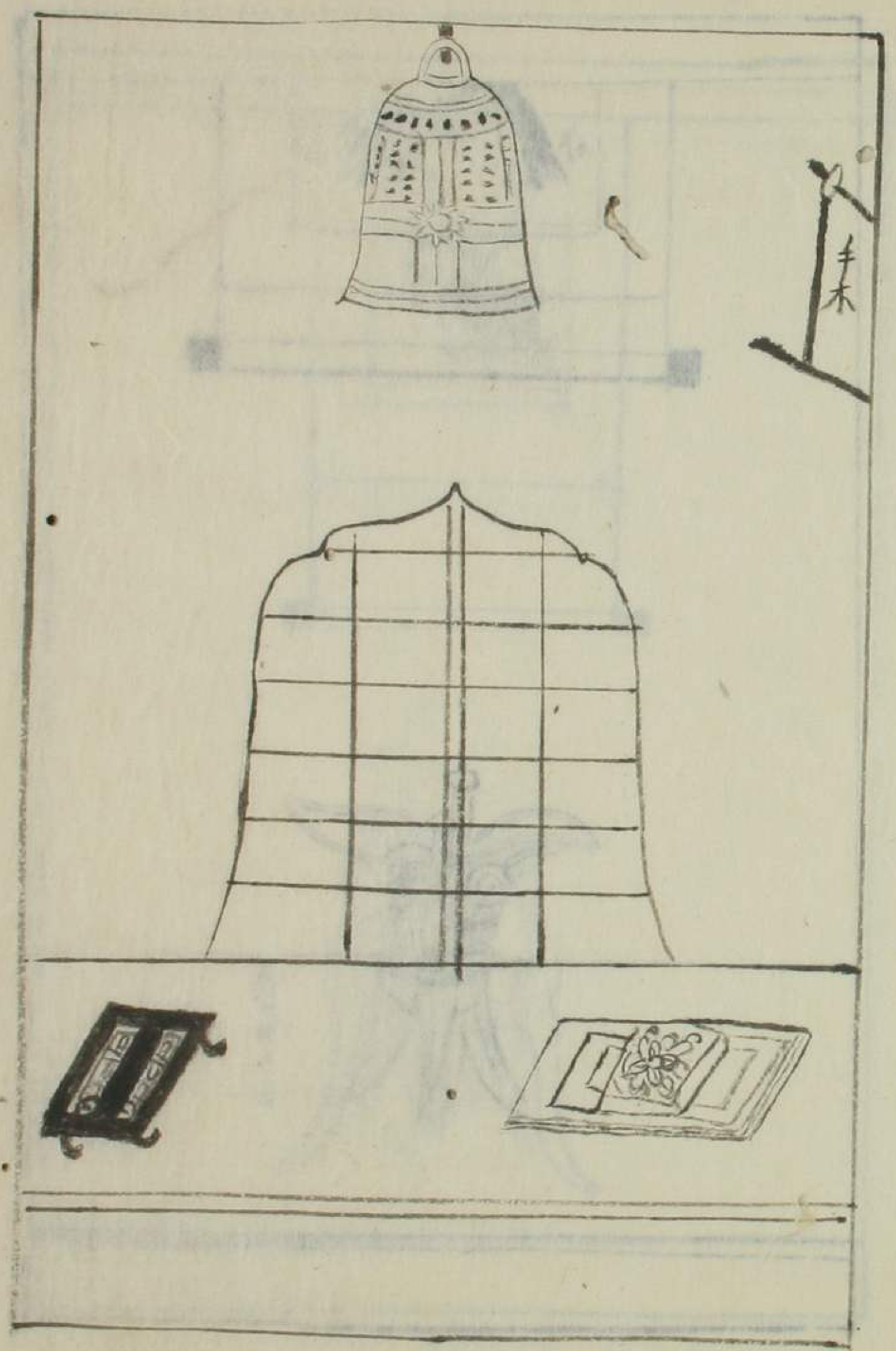
臺子荘

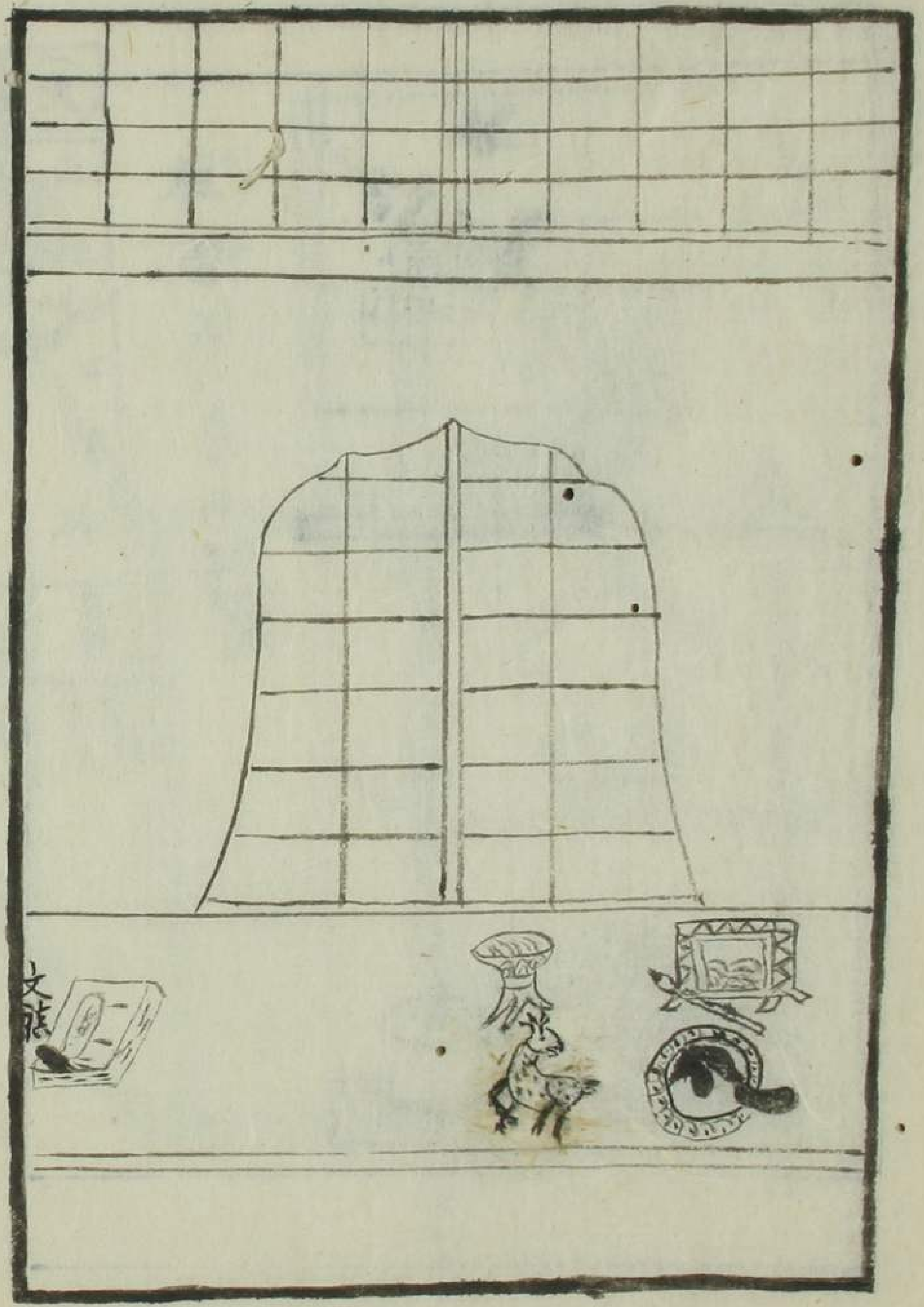


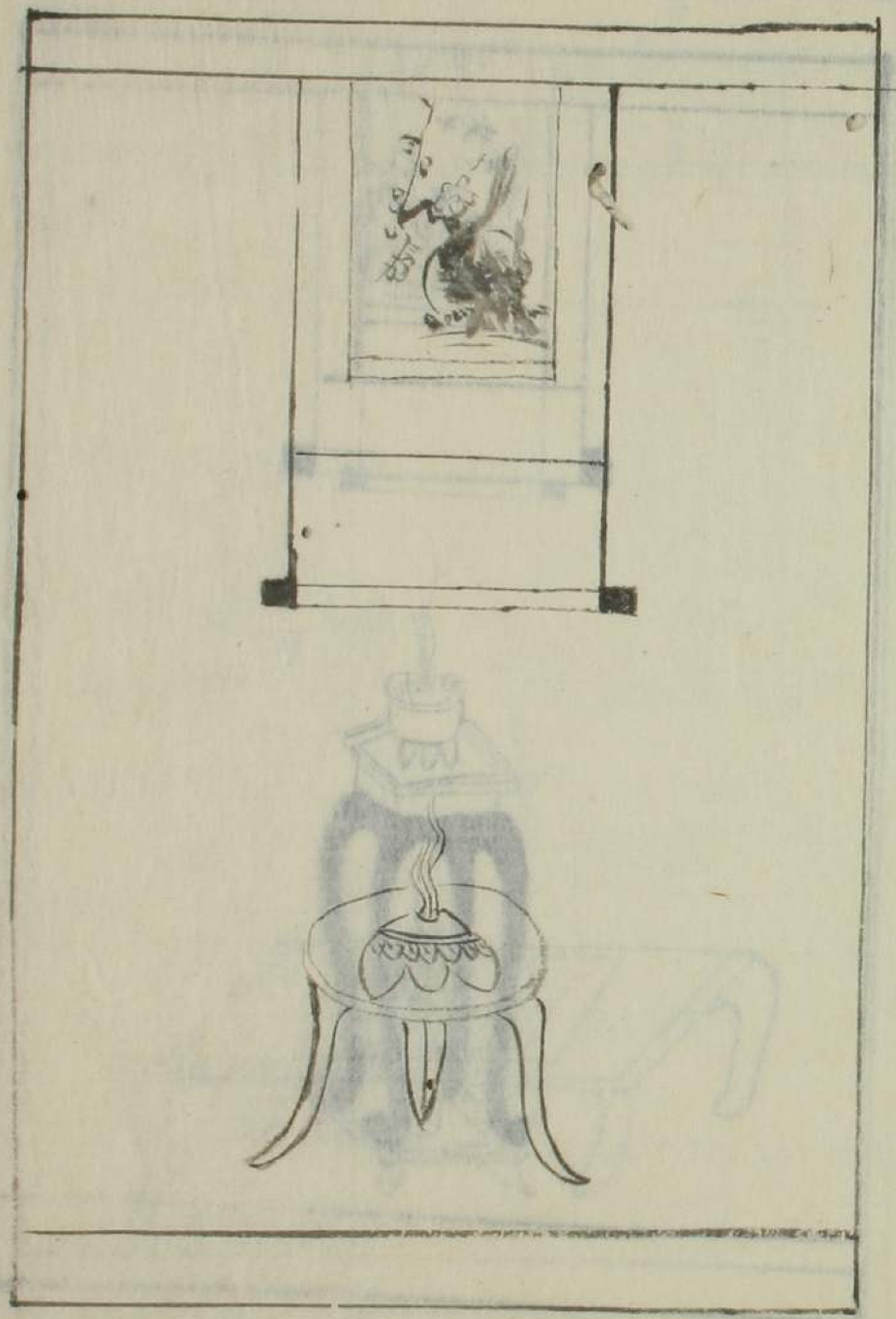


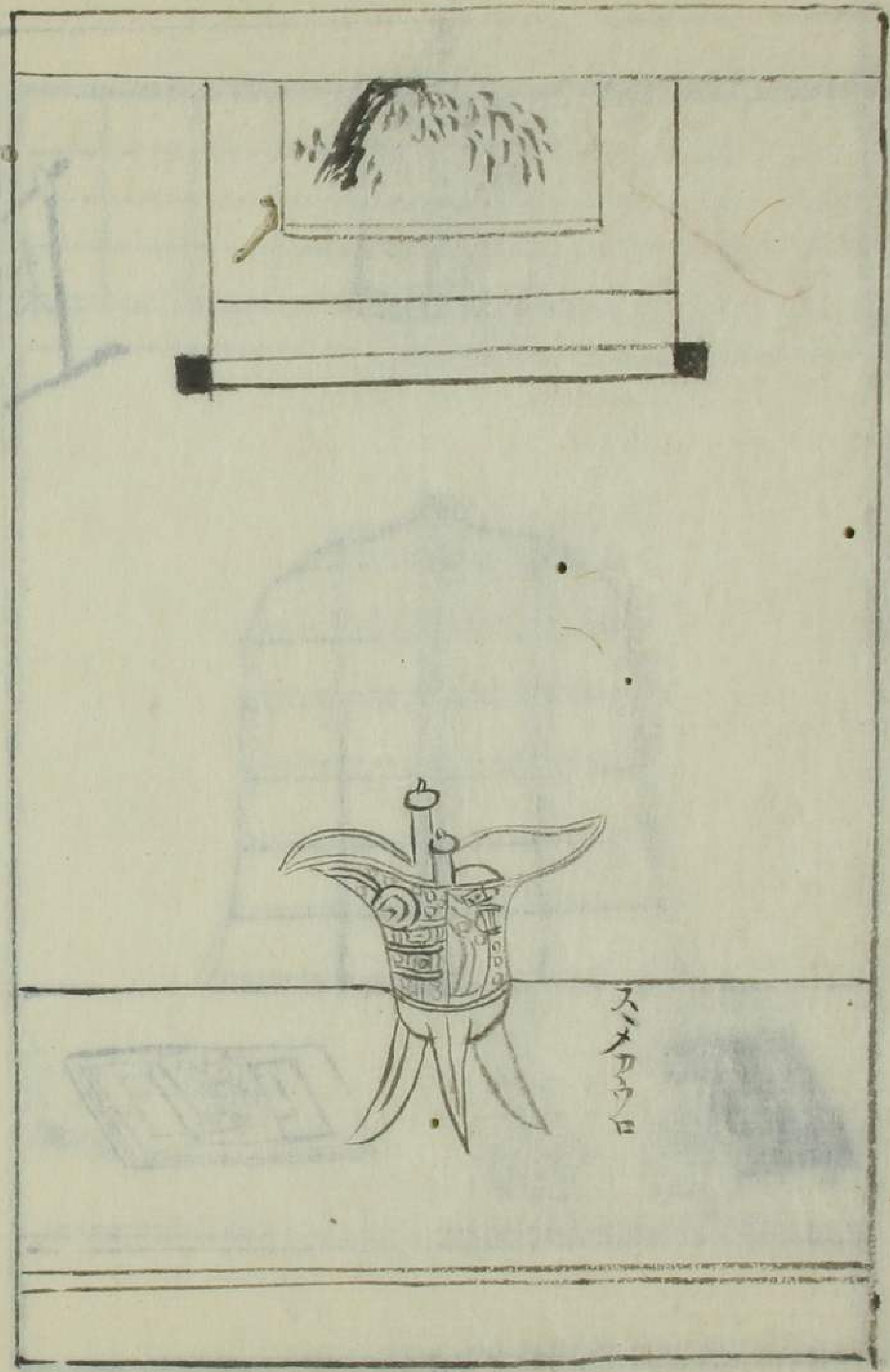
室置棚

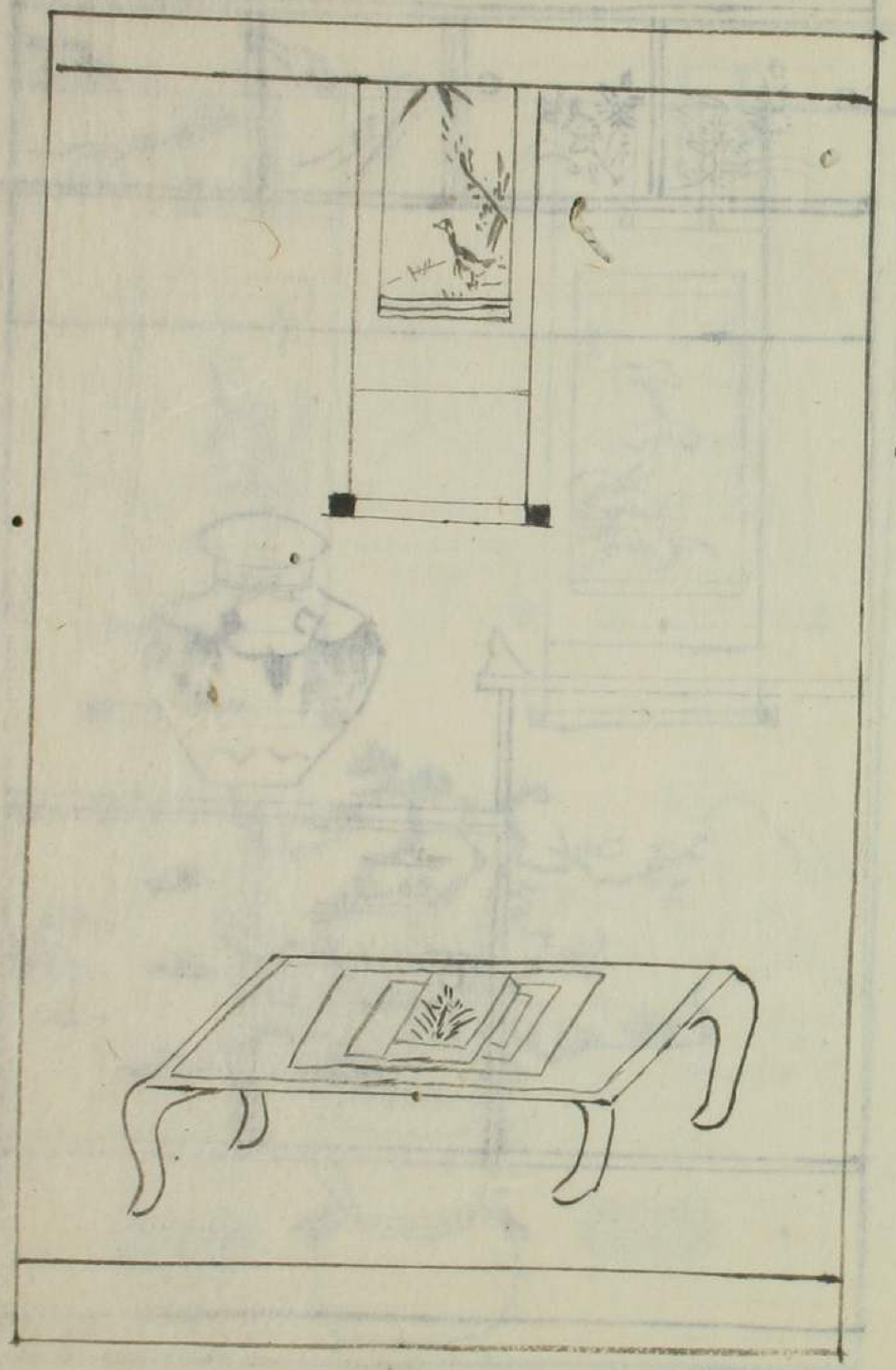


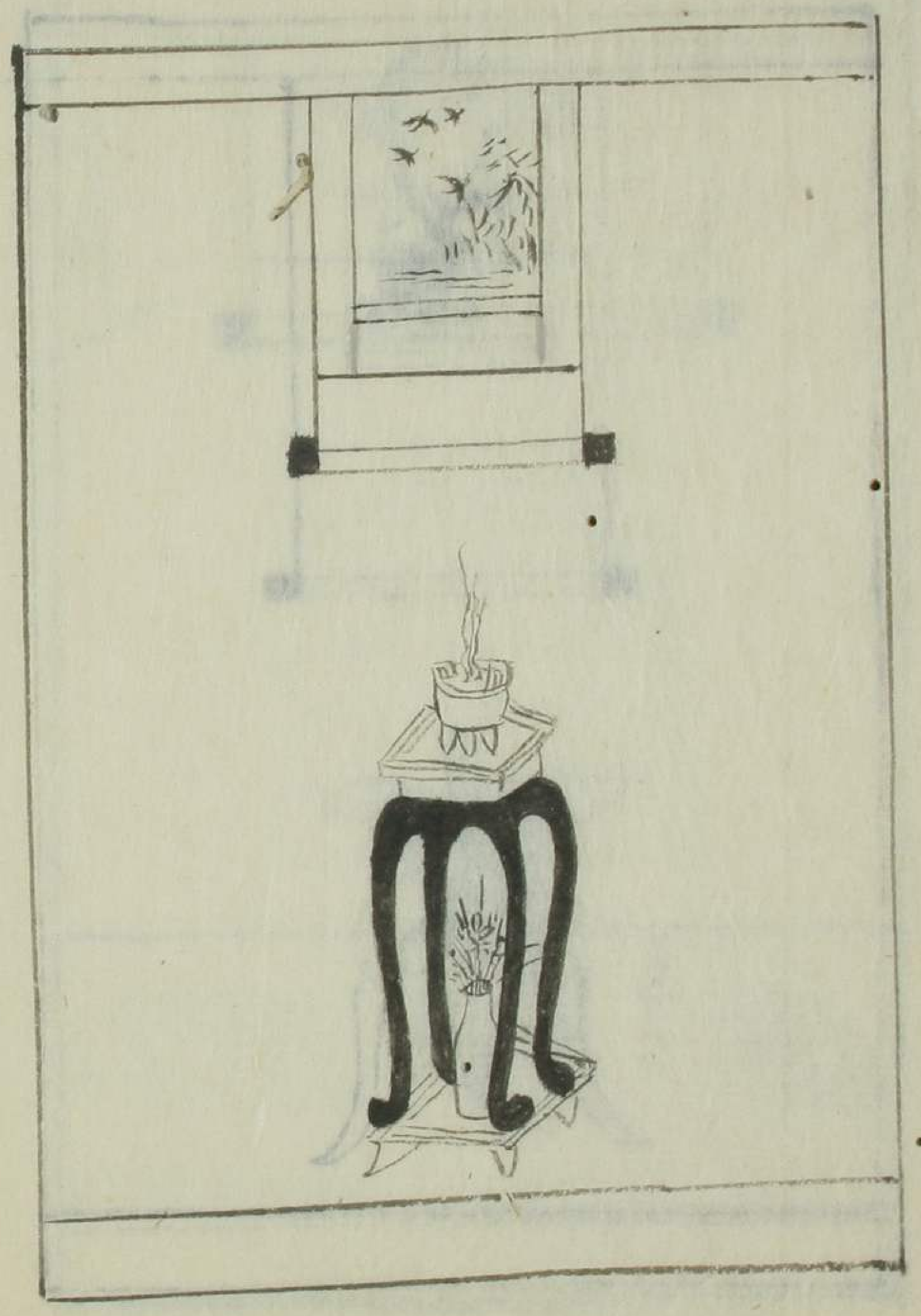

手本

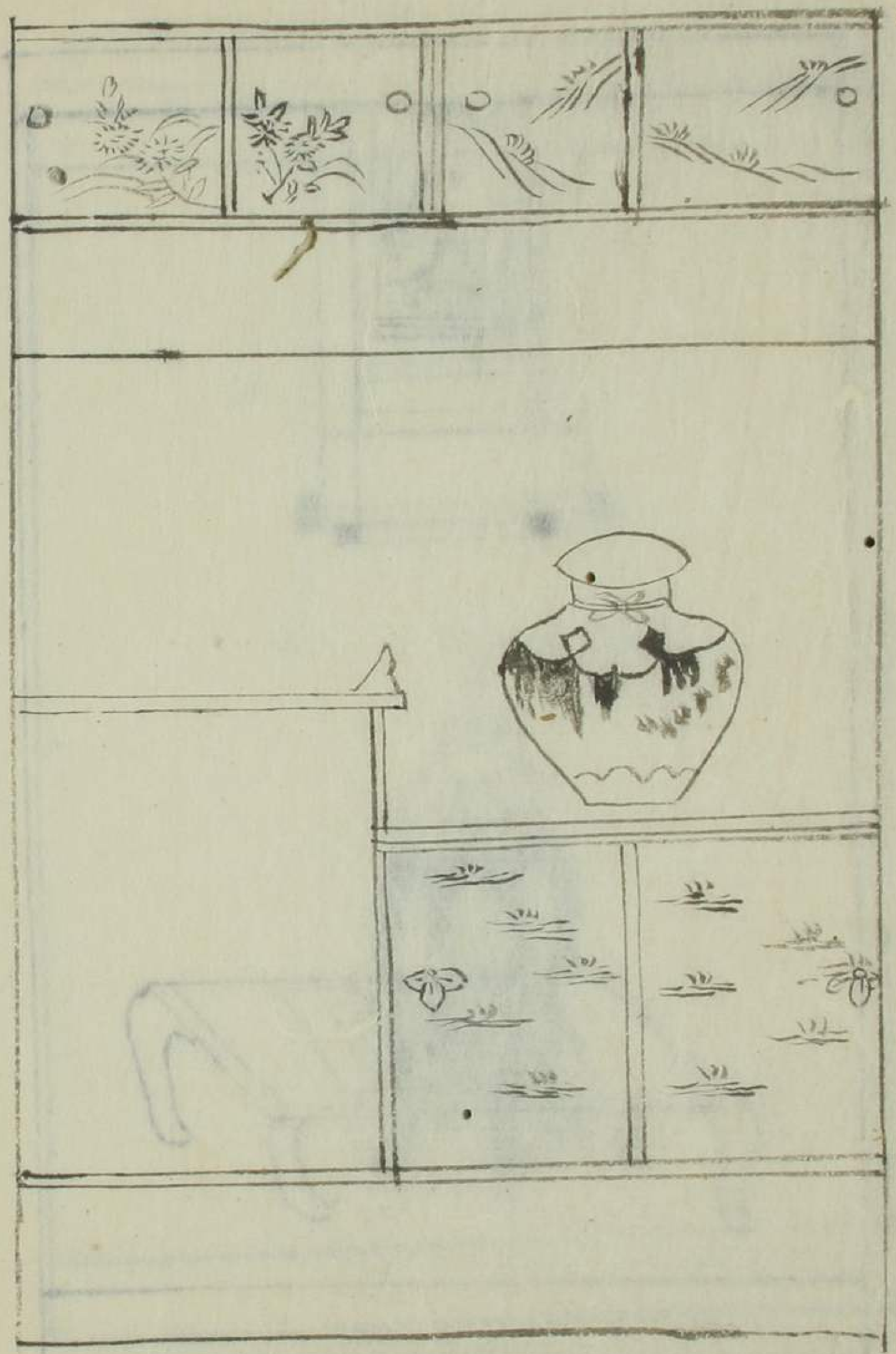


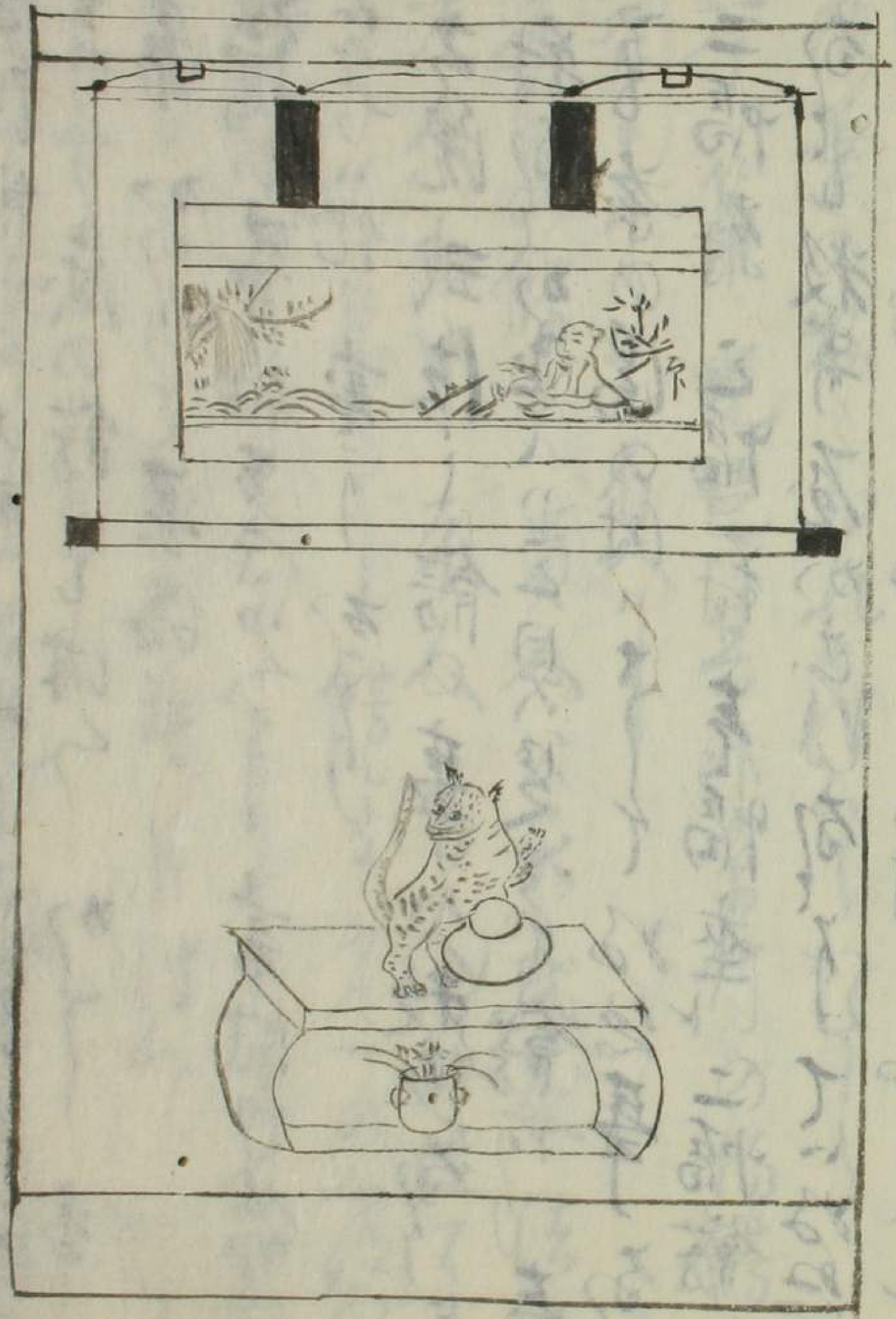



スヽメカウロ









一 書院餝りの大形をうつしいたし其外品々
多し床の餝りもはら〳〵かつし事よ
事かわりし其品多し
縁側の事品多さゆへ有 書はら〳〵かつし
多くハ他ノ書ニ有り
一 書院式法之餝の事ハ数多有り三幅
對るしかもてハ三具足そて餝有り其れ
も茶の湯の時ハさして好怨事有り
二幅對 三幅對 壱幅座 二幅餝り
何も数寄屋かまひ有りてハ好然まし
草庵 書院 有との時ハまいりまし

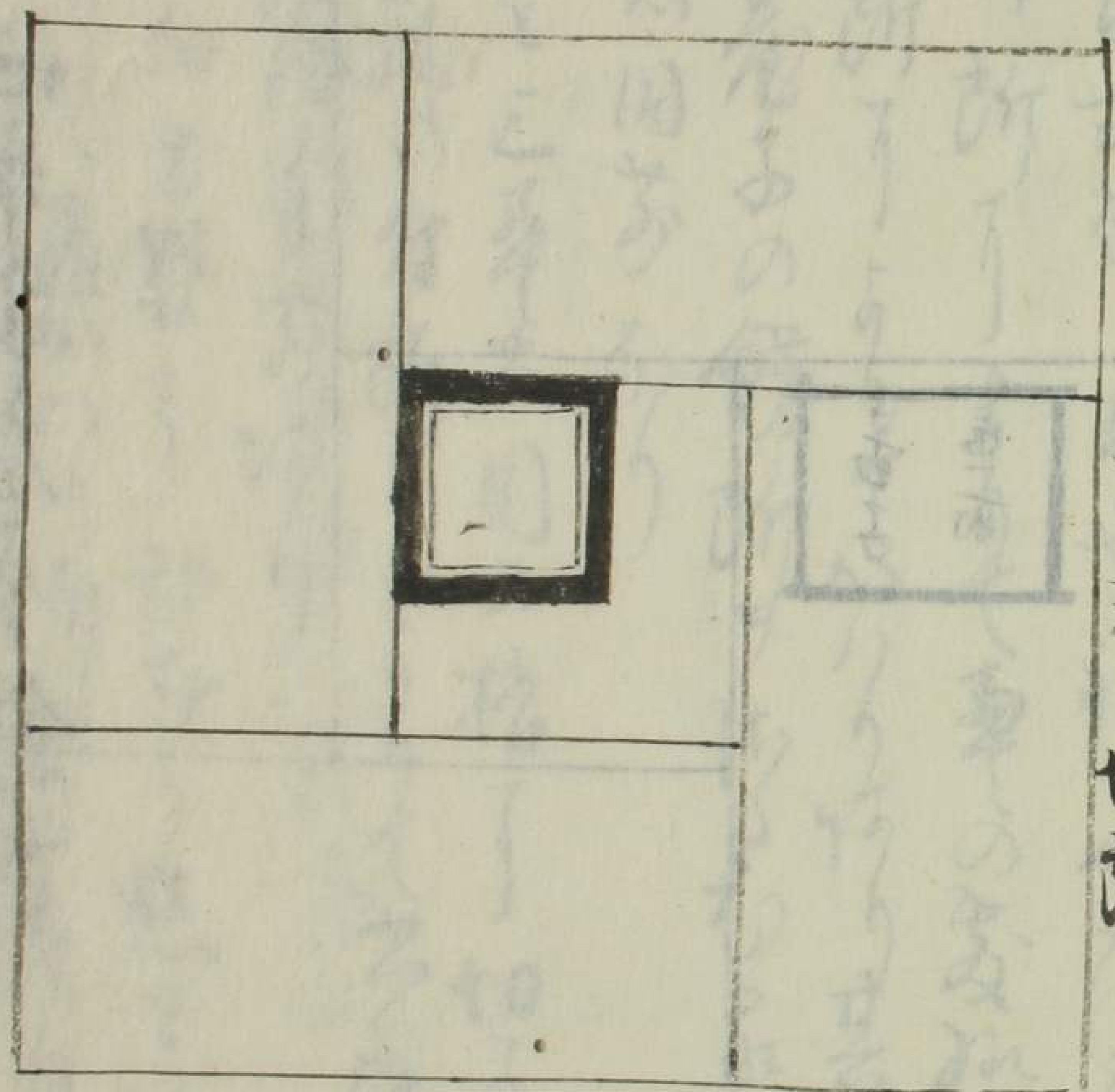
一 棚餝の事品々道具よなりて餝りも
花葉の数々あれバはら〳〵かつし
一 琴 箏 琵琶 其外色々の物餝りも
客よよりて有へし
一 道具の餝りハ貴人 公家 武家 法師
老人 女中 平人 芸人 の位有
なりて品々有 餝りよ第一の心得有り
一 縁側をかく所も人有よりてころ〳〵有へし
其時のまさどあれハ甚し はら〳〵 かつく
そらせよし かつし
一 床有 広道具 書院よ広道具 棚有

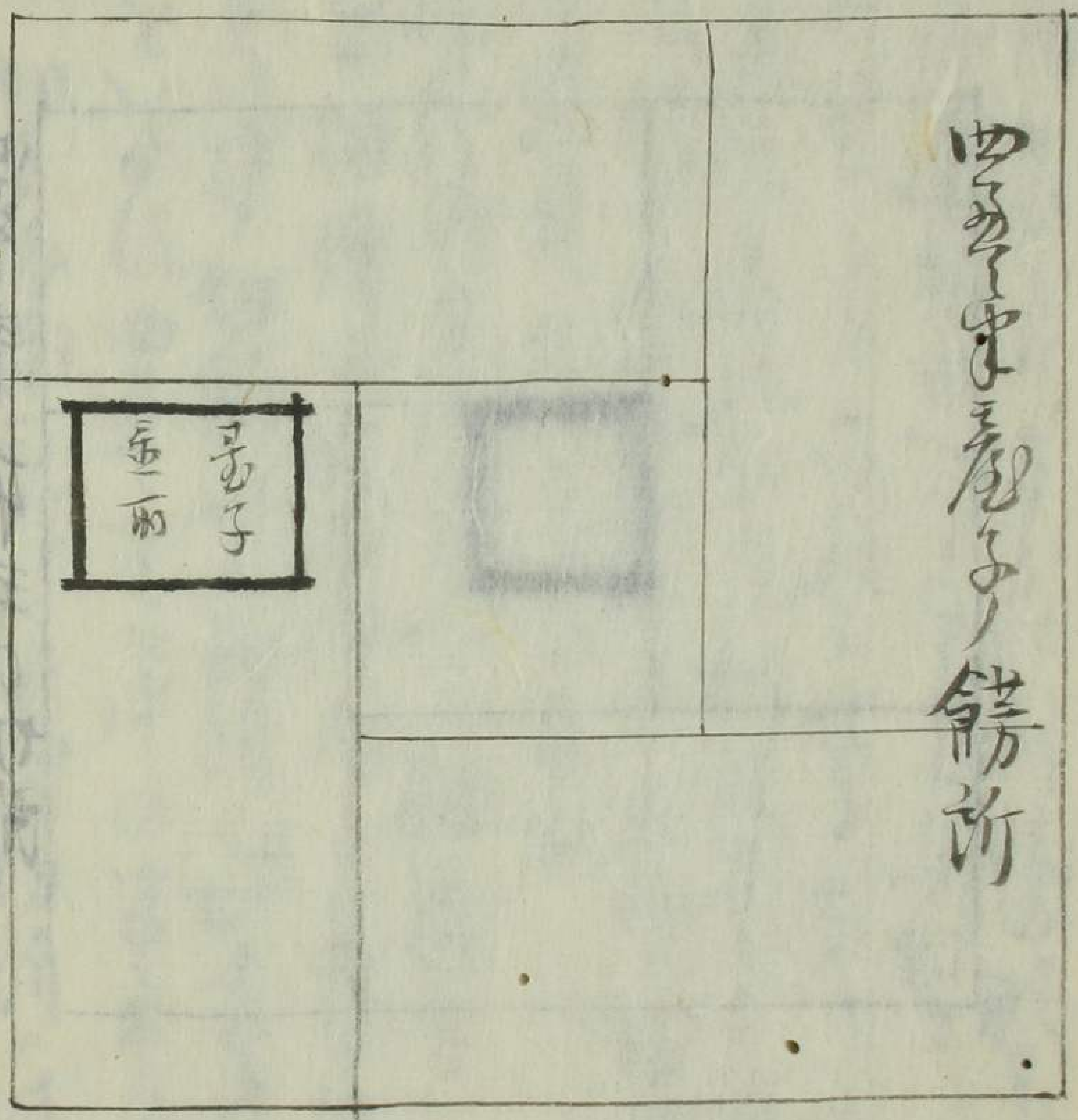
飾道具異形ヲ甚用ゆるところへ去らし
一生花の事も草木野にあれば其姿のまゝを
おもひ合て花生を求め生るを生花
とハ申也し寺院は古事にはかなふ
異形をはなれ事も何れも茶道の
心にハかなひかたし
一炭は灰手前それを時は法を去へれ
しところの中にはあまりて茶も湯のまえ
やはらかとりて炭の用とはなれ
何も法からず炭として茶はしろはよ
何れも火のうへはりかなはず　はなれ

一利休釣瓶の水指世上に流行しは書の
字の道に当り寸法をいふもの大法世上に
流行るは利休根元の形にあらず
利休所持の釣瓶ハ有馬池ノ坊に傳りて
今同所持の霰釜黒茶碗茶杓も有り有
しかし此写有馬焼失の時太閤京都へ取
此ほか又釣瓶釜大部色西国ノ去ル大家へ
下ル釜ハ霰ノ平釜ニテ鐶付ハ鬼面之。釣瓶ハ
橋ノ釣瓶也此時秀義公ハ茶の上の
釜釣瓶は形ヲ利休の根元トス世上の形
とハ針の数も違ひ木の寸も違ひ板の所

大形似寄ものそれさへに利休の形なりけり
此秘事は道具の上へすこしも知らず
一 利休の茶杓これも世ニ多きことなく
根元の寸法は是なり利休茶杓の図は
これも九列ノ大宗匠ニ而も書付有なり
秘事は道具の上ニて云ふ事也
一 利休花入の寸法これも相違多し
右三色は相傳の形有候て図寸法略ス
一 四畳半の外 切所并ニ敷所とは書の外の
聖図とハ申 四畳半ハ半の半畳の外
角有り 切る所図有り 根元の切所とは図之

四畳半本式の切所



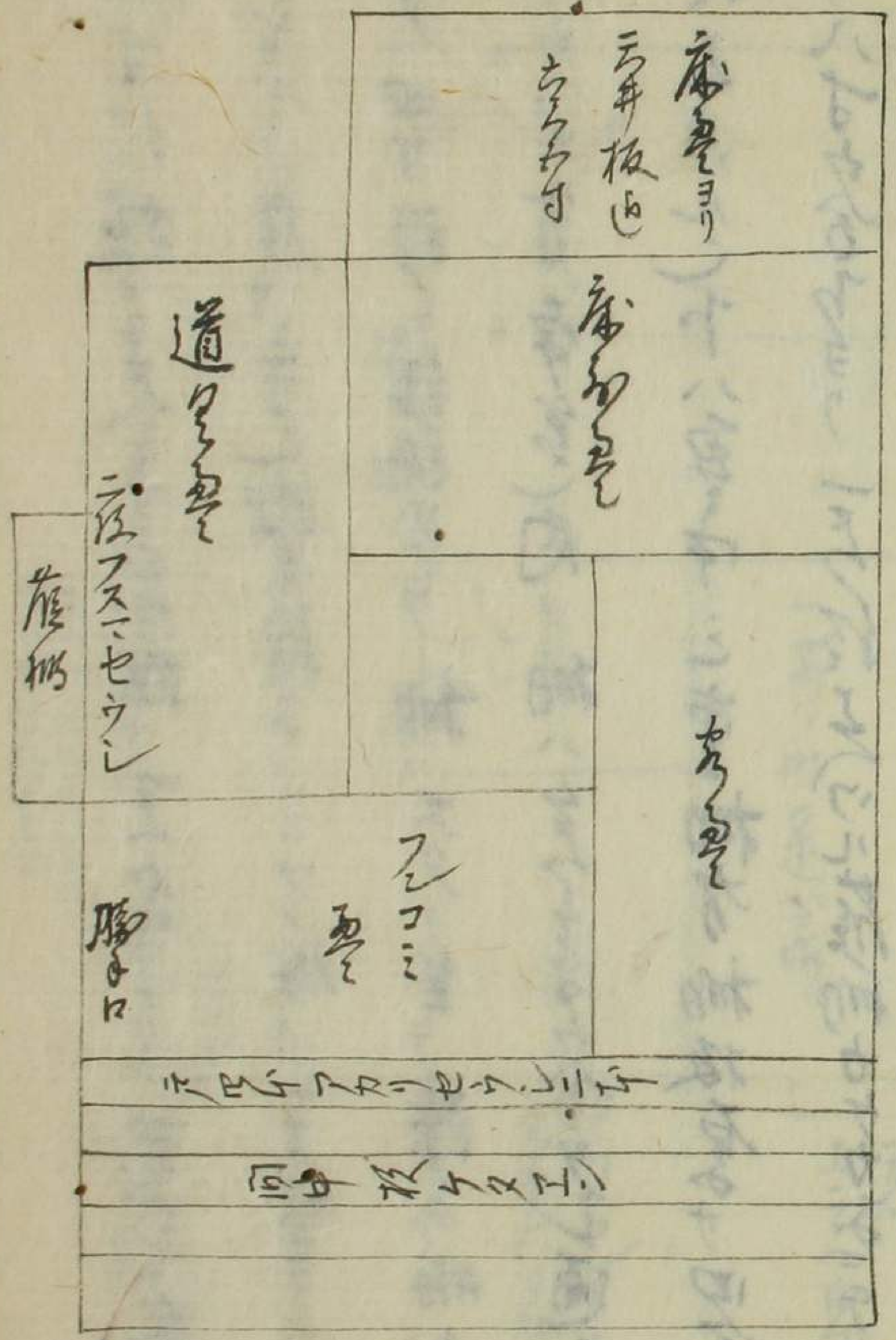


右の餝所なり式なり畳を補ふ人ハ床とのあり
又床の付所ありよりて畳の変れかたも有
又口の付所ありよりてかゝり候り其所あり
並して臺子の餝所サ候さむ置するなり
凡物も大國茶あり
一四畳半を三畳大目の格なり切ても候り
一四畳半床の付所ありよりて書院床の格
なり茶湯候も茶候り
一向角物向出物なり勝手ちがい點とい事有
所ありよりて乗かゝり有りし又座付茶湯所
候り一人二人の客の時ハやり向ふ點なり

之入候以上ハ初心り不可点席事く

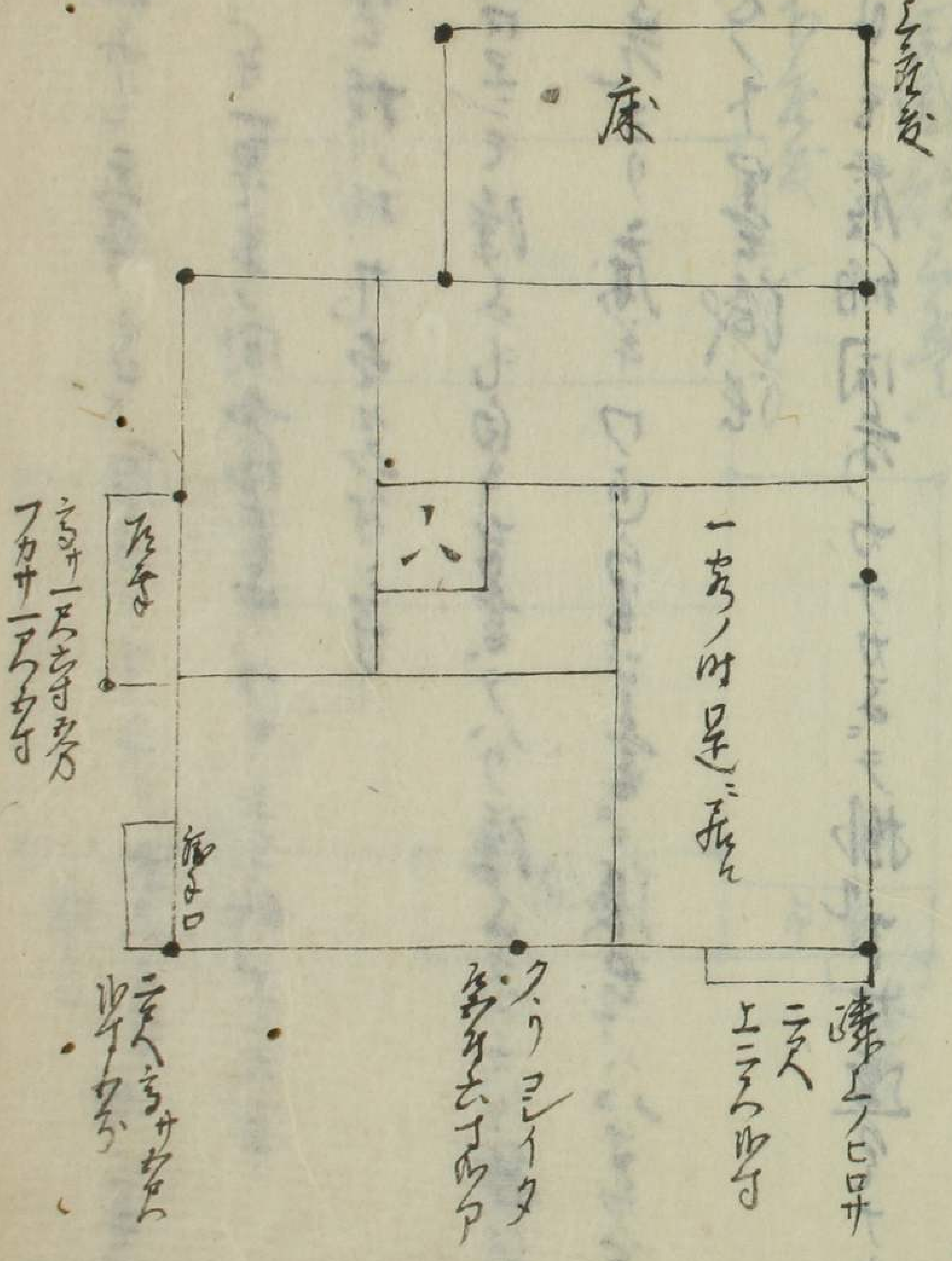
元禄拾弐龍集午年八月吉日

茶湯之座敷之図　紹鴎四畳半



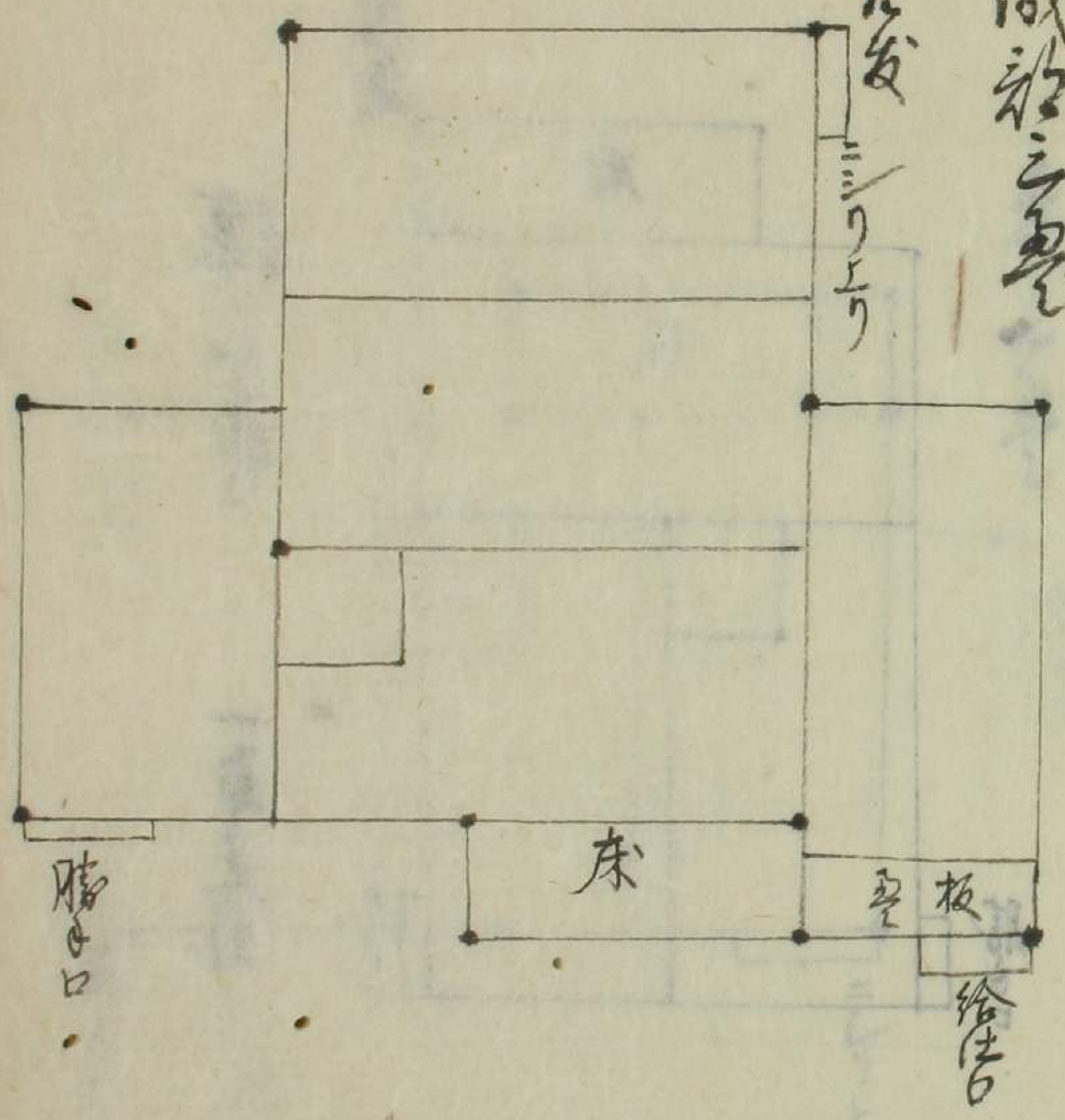
蓮棚寸法 横ハ二尺八寸五分 深サ一尺二寸 高サ一尺六寸 寄組ニ
深サハ上キイノ廣サ三寸之 縁ヨリ障子ノミゾノ際ヨリ一寸程ヅヽ内ニ
深サ一尺四寸程之 組柄ホゾニ 棚ニスクミ合テ 障子ノ明ガヘイ
ナキヤウニスル 天井組之内ノ棚ハ二尺八寸五分ニシテ通シテ
一尺程上ニツル之 下ハ戸袋中ニ重棚有 棚板厚サ四分半
廣サ八寸五分下ヨリ 一尺程上ヘツル 蓮棚カケカ子ニテカケ
無組ニ上下上ヨリチヤウツガヒニシテ無組 床数三本様
一サ枝ノ方ニ天井 縁裏ヨリ天井迄 六尺八寸

家高四尺五寸半



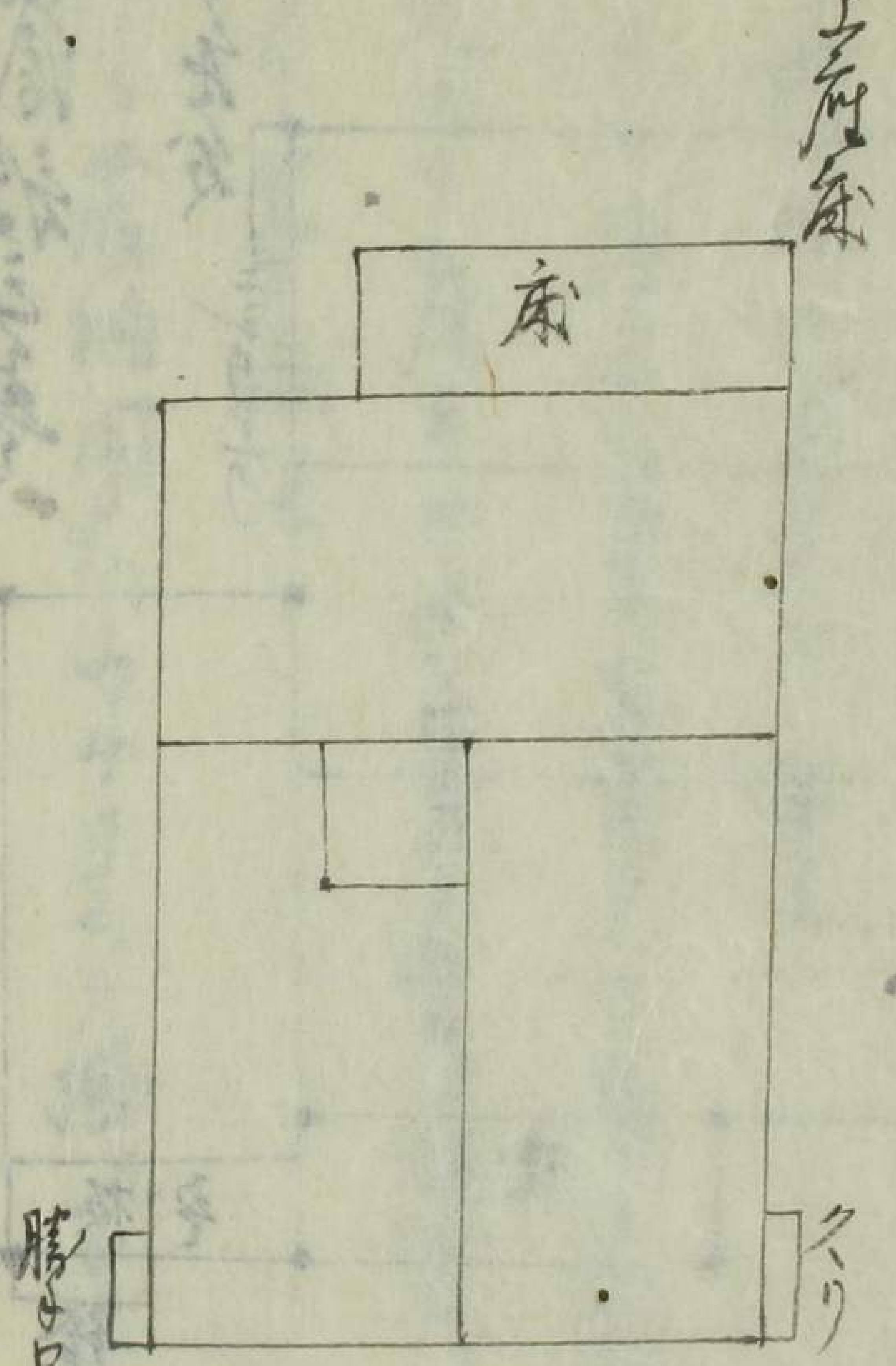
一床敷ハ三尺 高サ畳ヨリコモテ六七寸 但三畳分
一下座上ケ一畳半ノ間 中柱中ニワキ上ケ竹五六本
一色ハ墨 柱ハ杉丸太 竹打テ
一火燈口ニシモ障子ハ白キ紙ニテハリ 障子タイコハリ無用
風炉先ヨリ床ノワキ白キ紙ニテ張 長ケハ八寸五分
張窓ノ下墨蹟法
一道安ハ床脇ノ方カケカネニテ掛ル 下ナ道安ナト
床入リヲスル客ヨリ見ヘヌナリ ロツヤト言シ止之

古田織部三畳

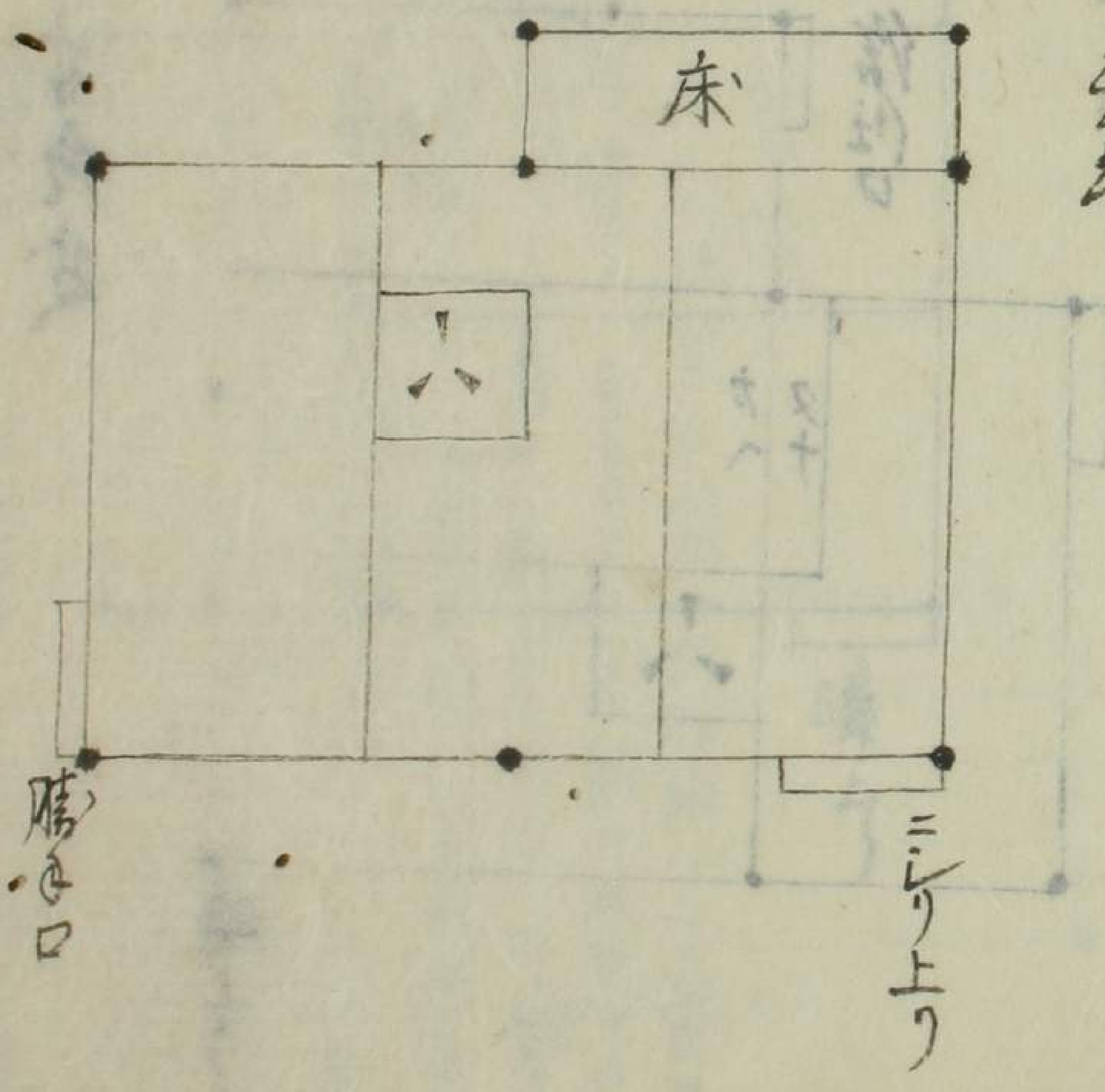


深三畳

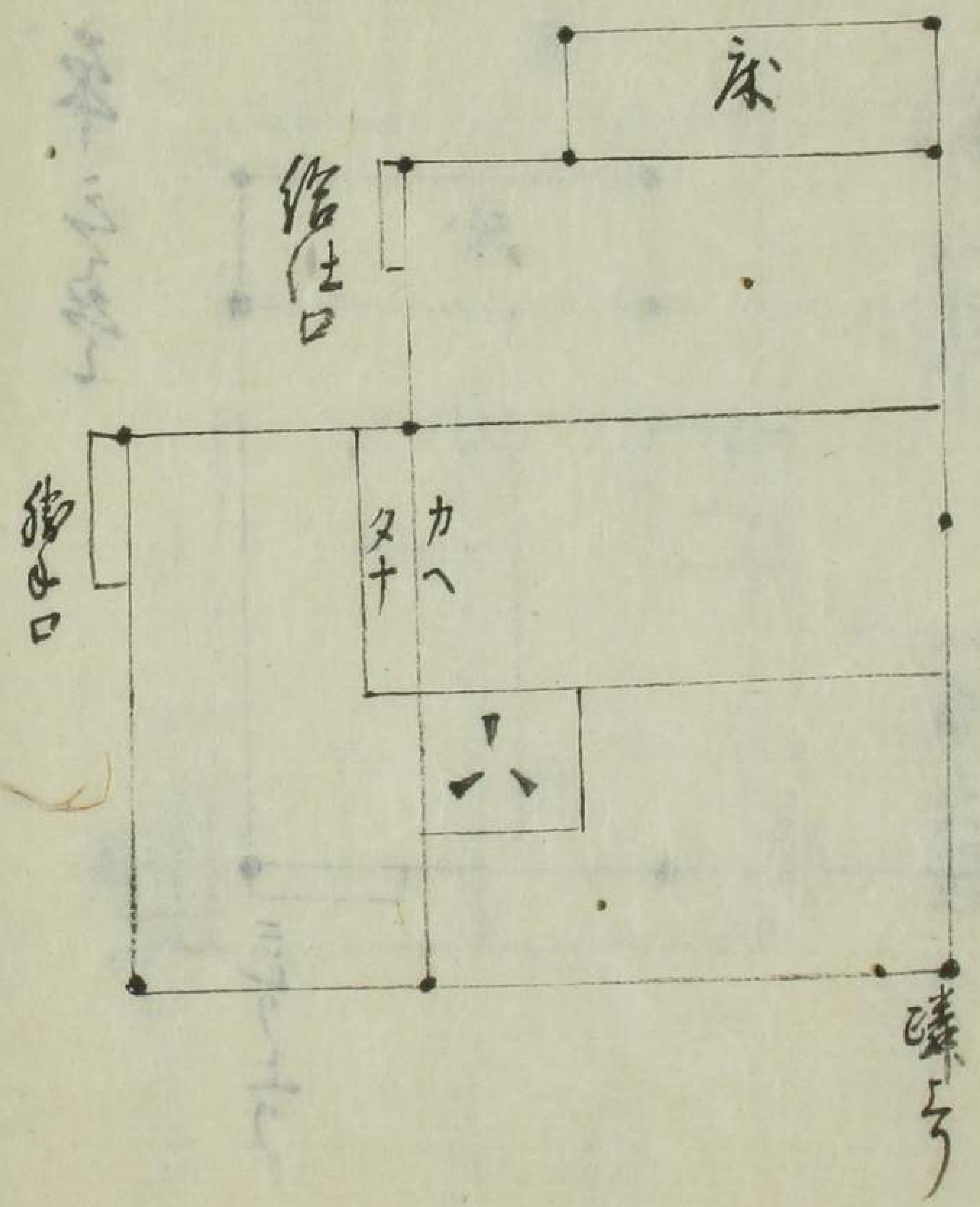
一畳大目



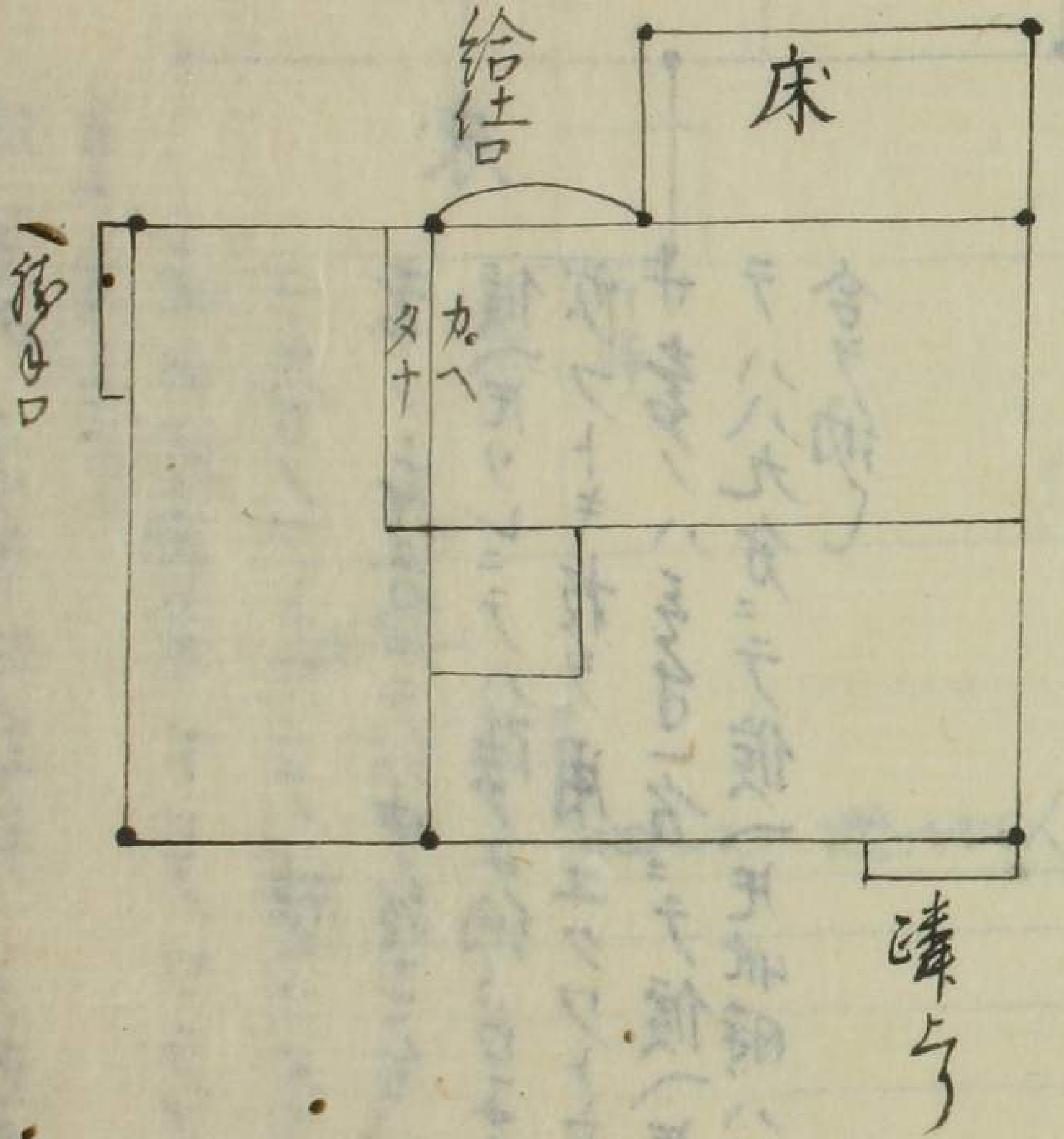
平三畳



草の三畳半座敷

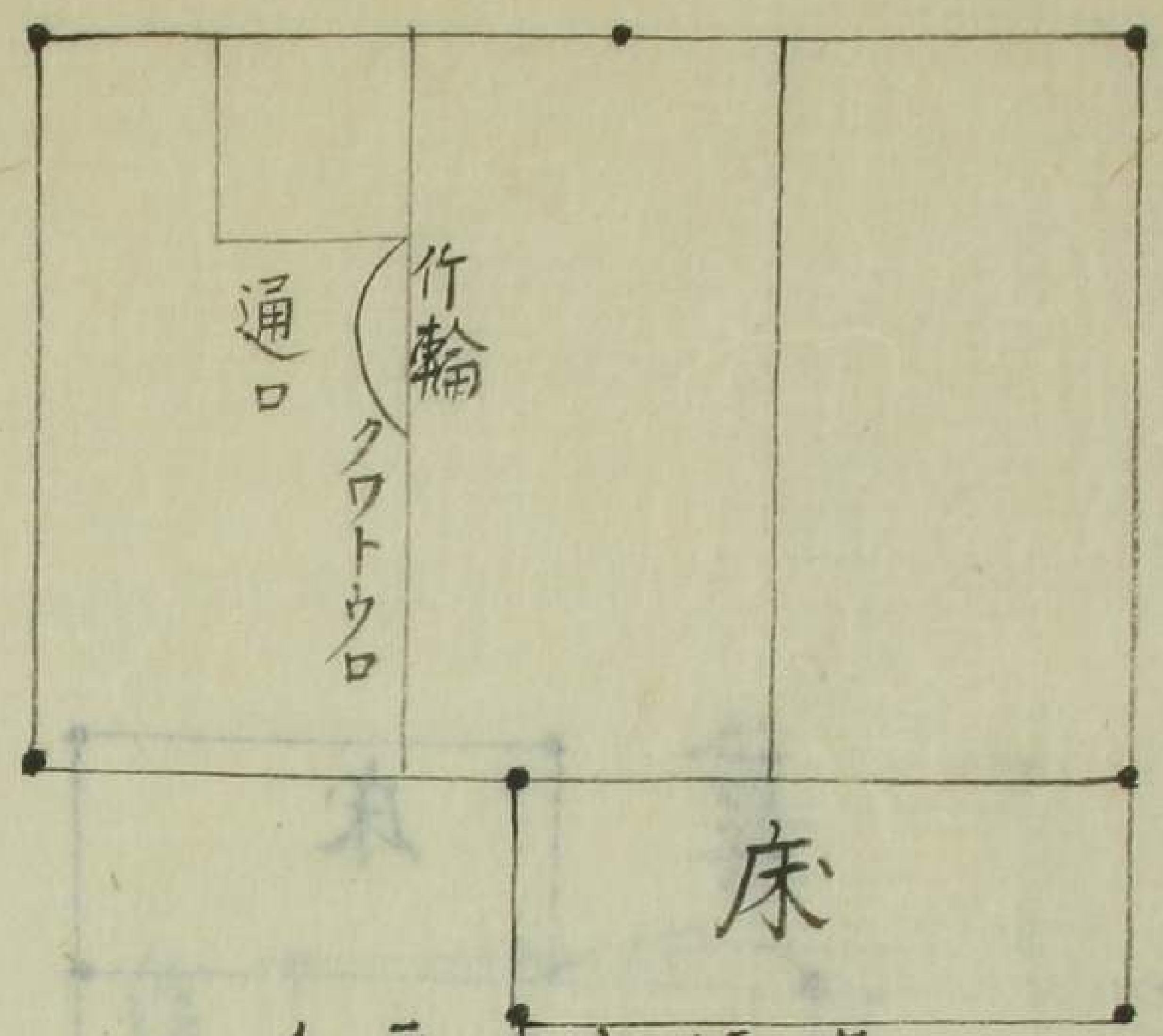


二畳半



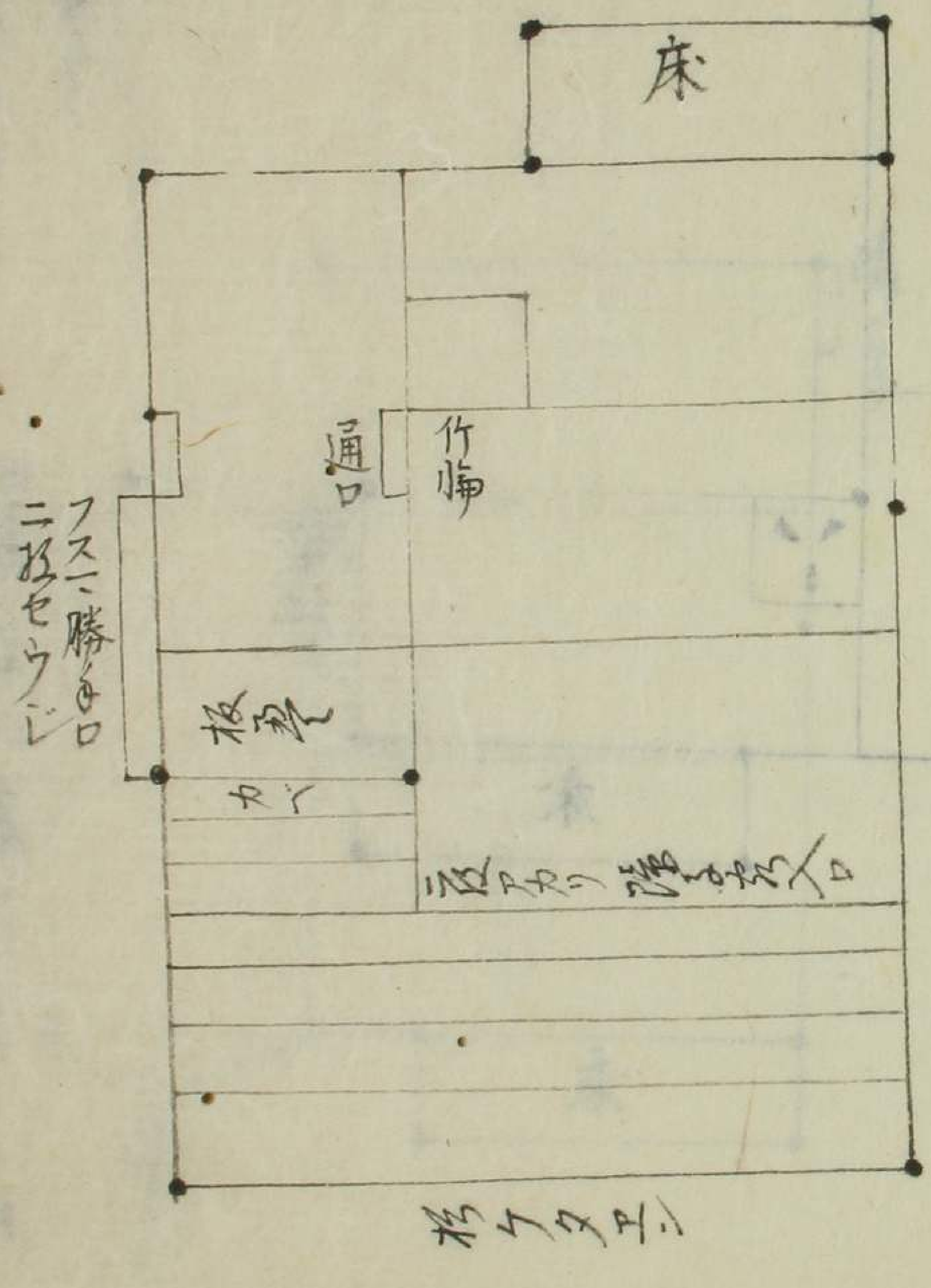
宗貞ハ庄蔵

堺屋町平野屋宗貞ト云者職ハ指物屋ニテ云ル者也



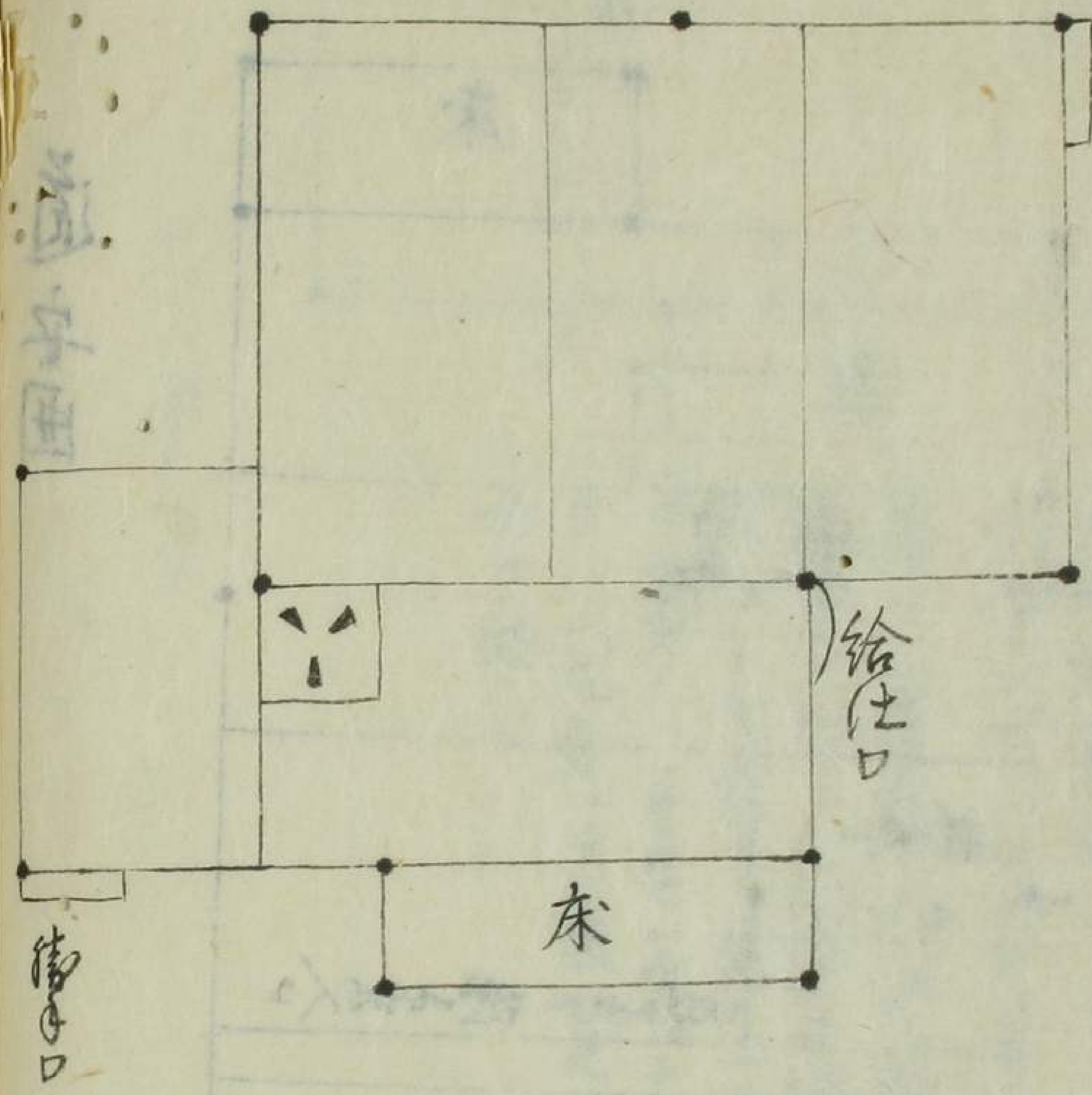
此中柱フトサ下ニテツラヲ付テ二寸二三分ノフトサニテ壁ヲヌリセウジ納ル常ノ庄蔵ニテハ中柱壱寸八分九分ニテ候ヘ共ソレニテハ陰ヲ細ク力ヲ作故右ノ通少フトキ柱ヲ用ユクワトウロノ壁モアツサ常ノハ壱寸一分ニテ候ヘ共カヤウノ所ニテハ八九分ニテ候ヘ共此時ハ二三分ヌスミ合ヲ納ル

道安囲

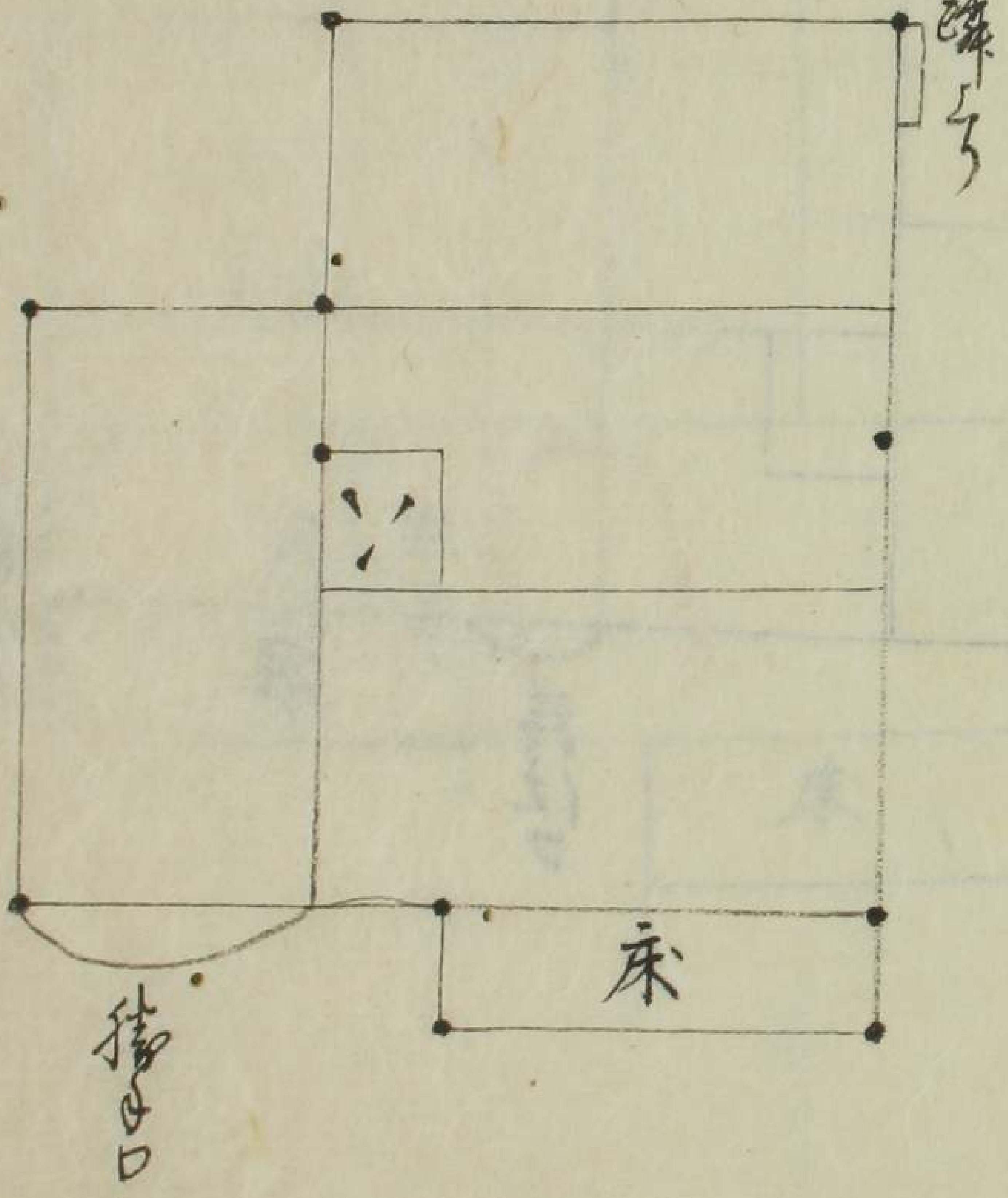


納屋宗薫好

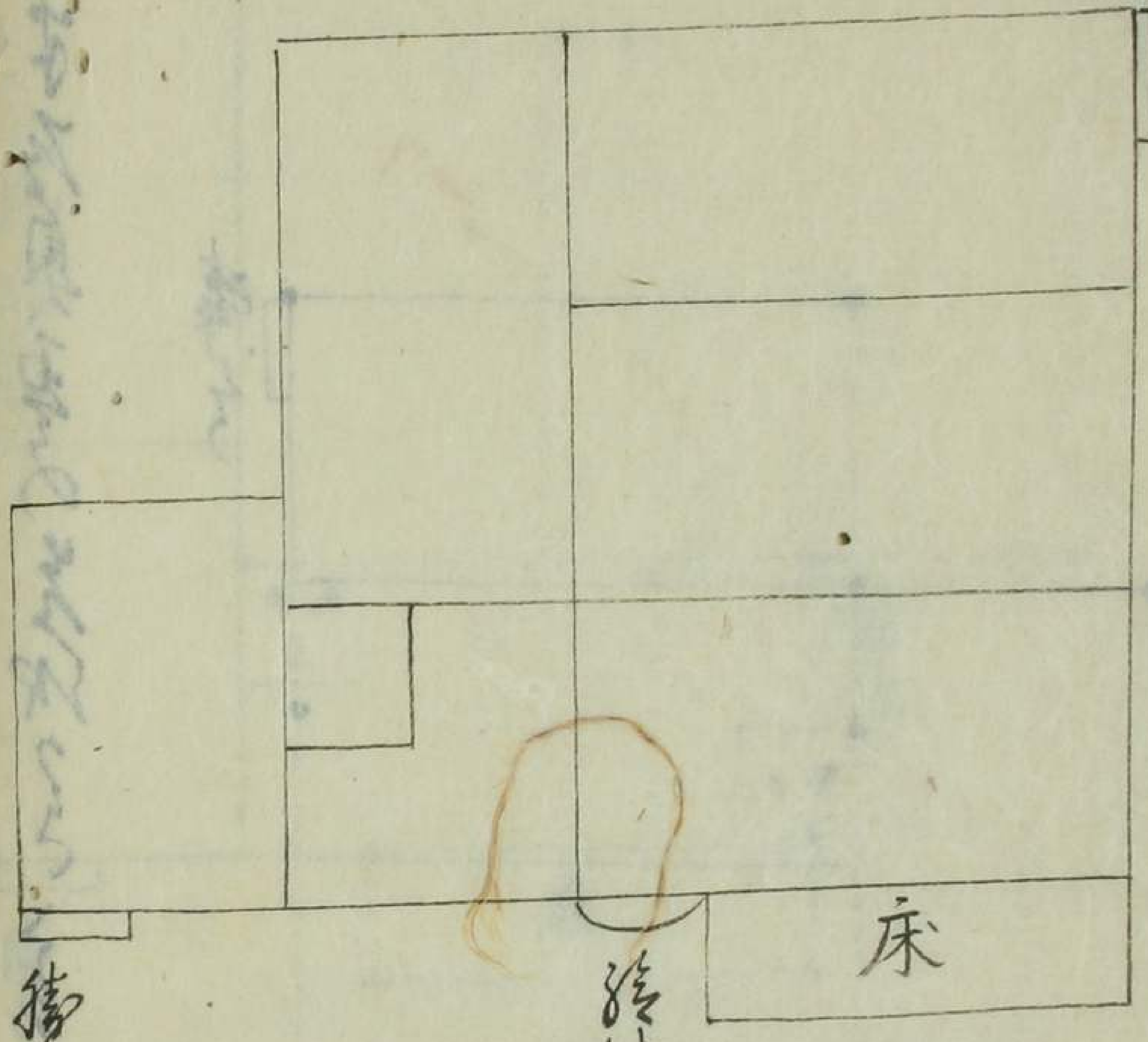
一 四畳半の角をくゝりふため



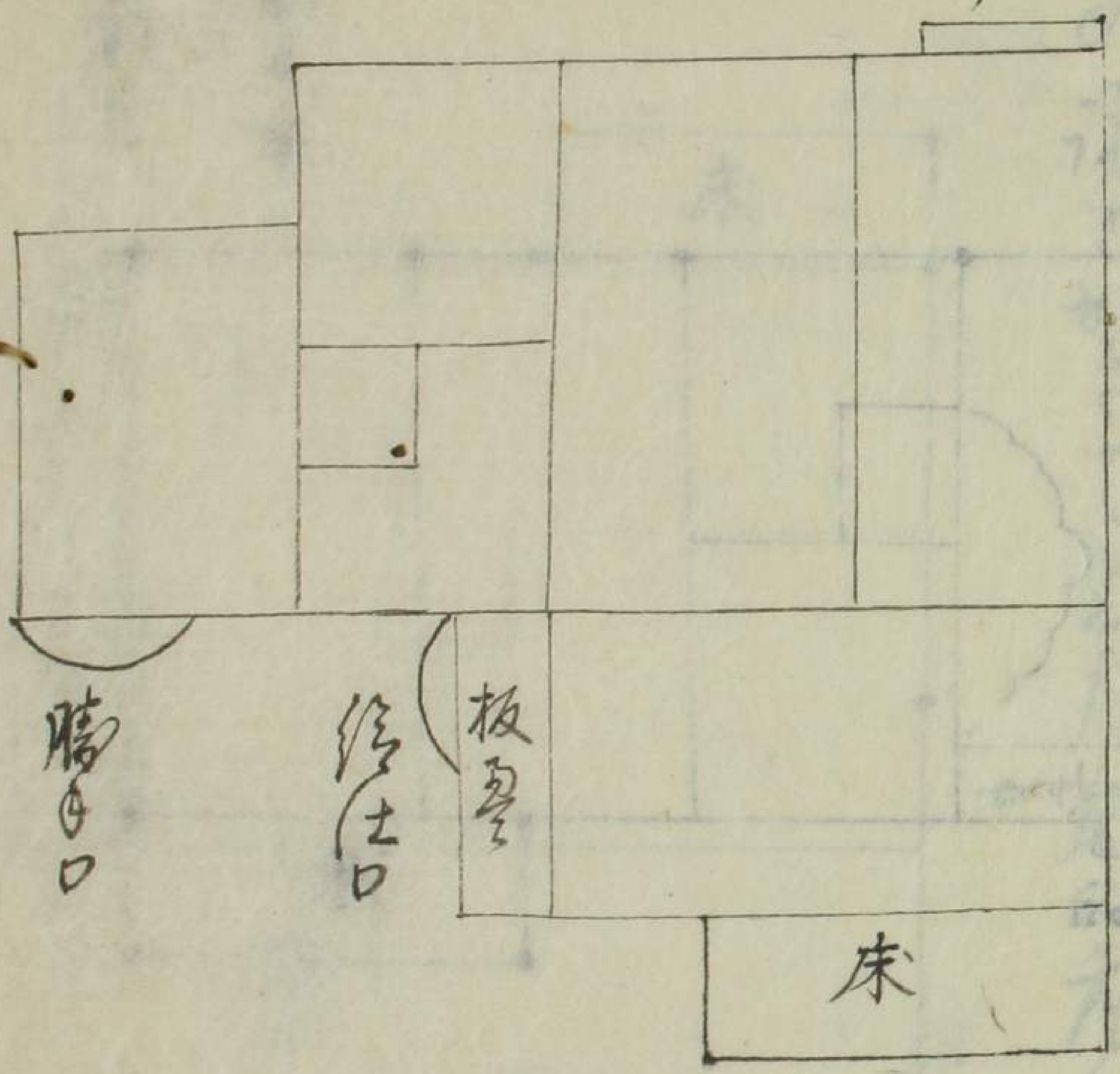
四畳半床奥畳の先納くゝりふため



四畳半

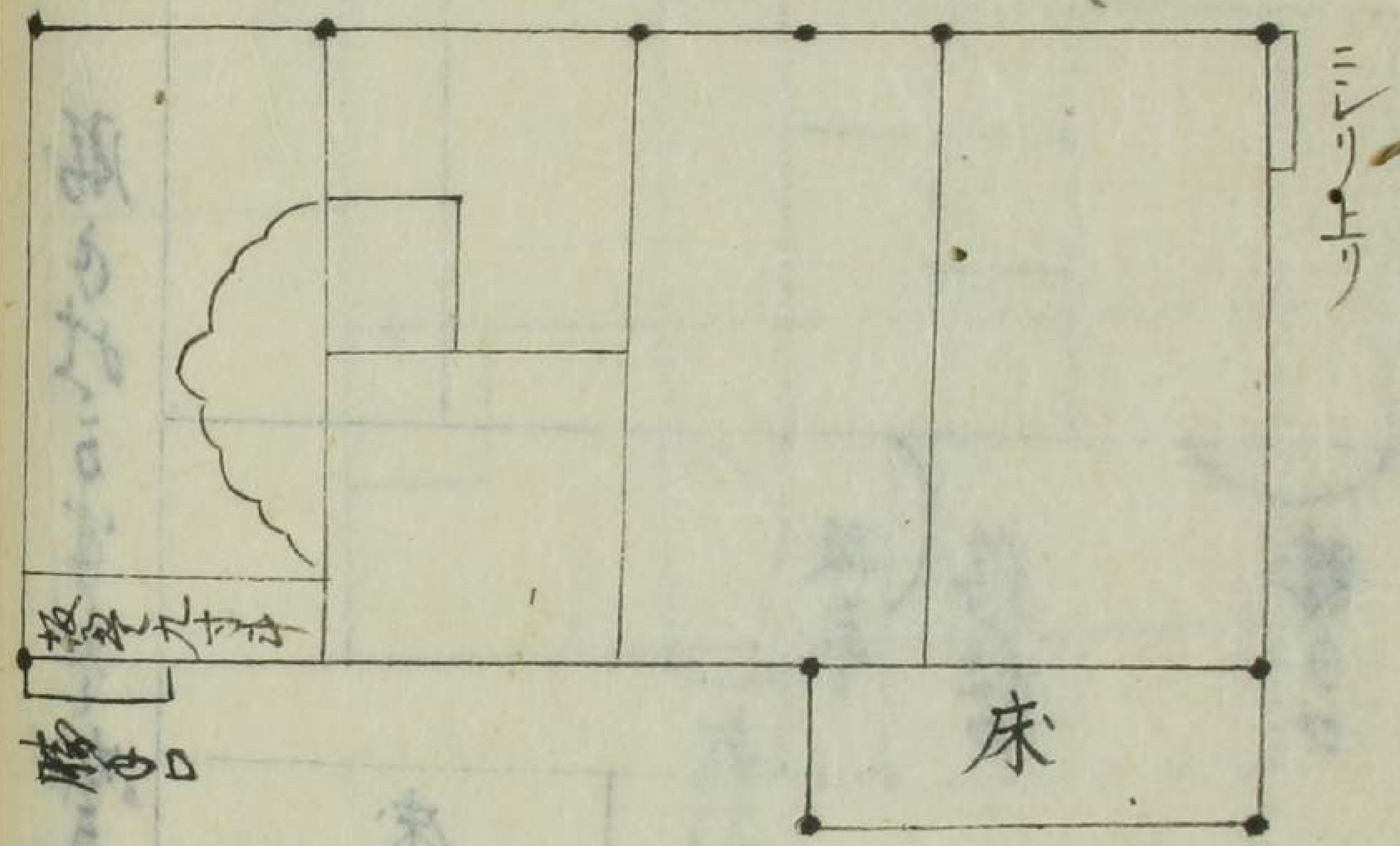


四畳

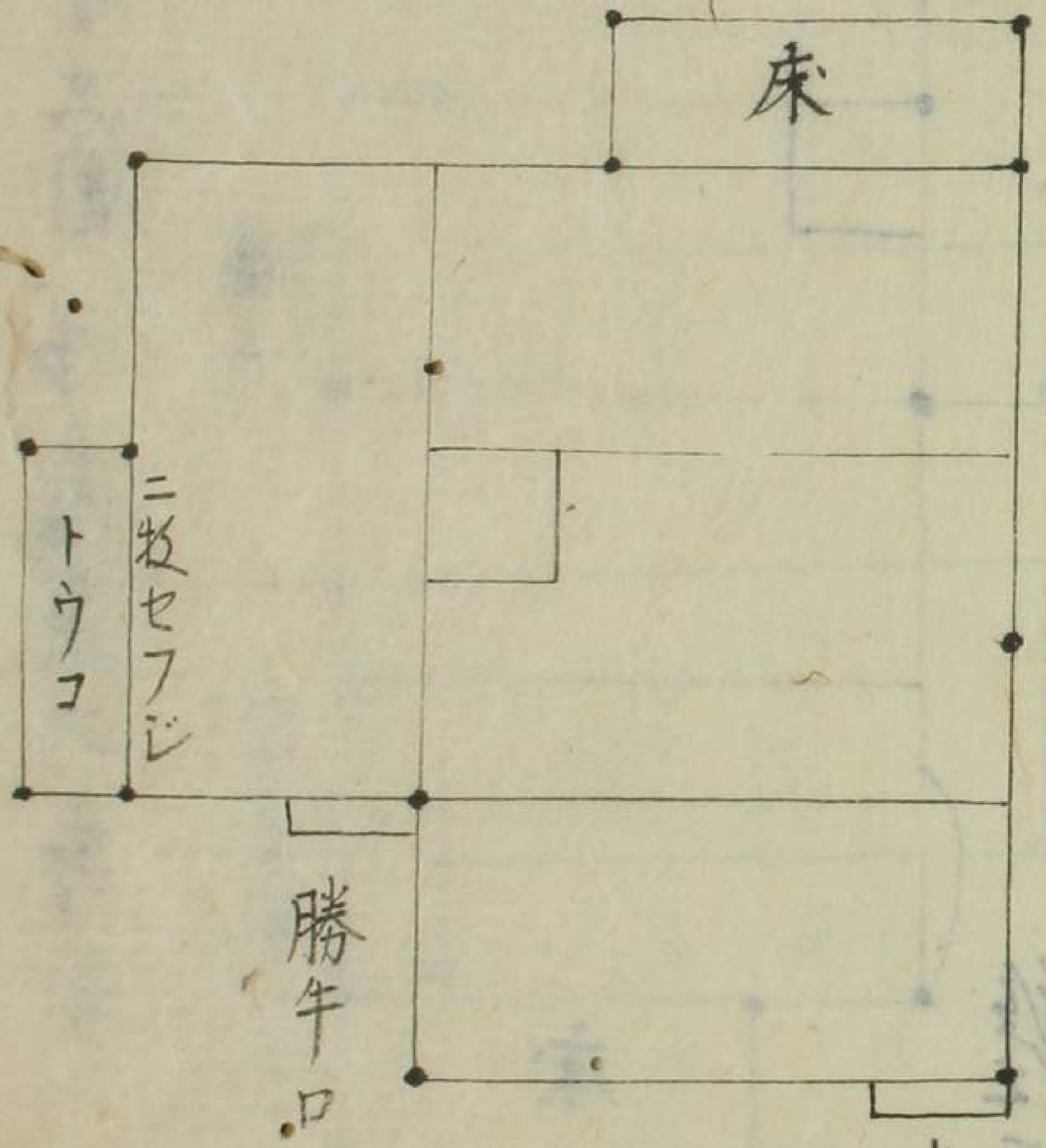


勝手の方半畳かきたる物

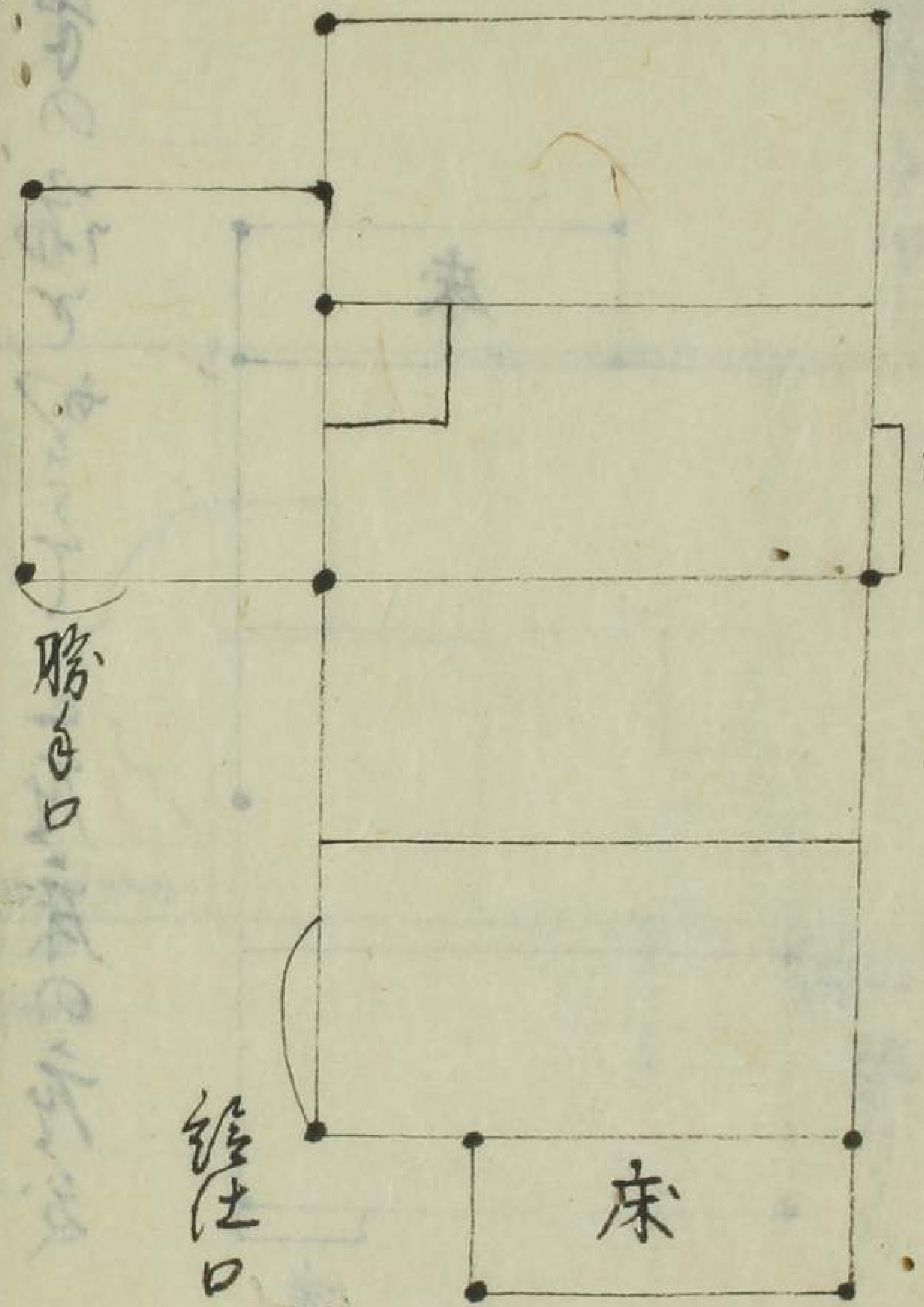
長四畳中板入
大目ヽヽ同し
但障子なし



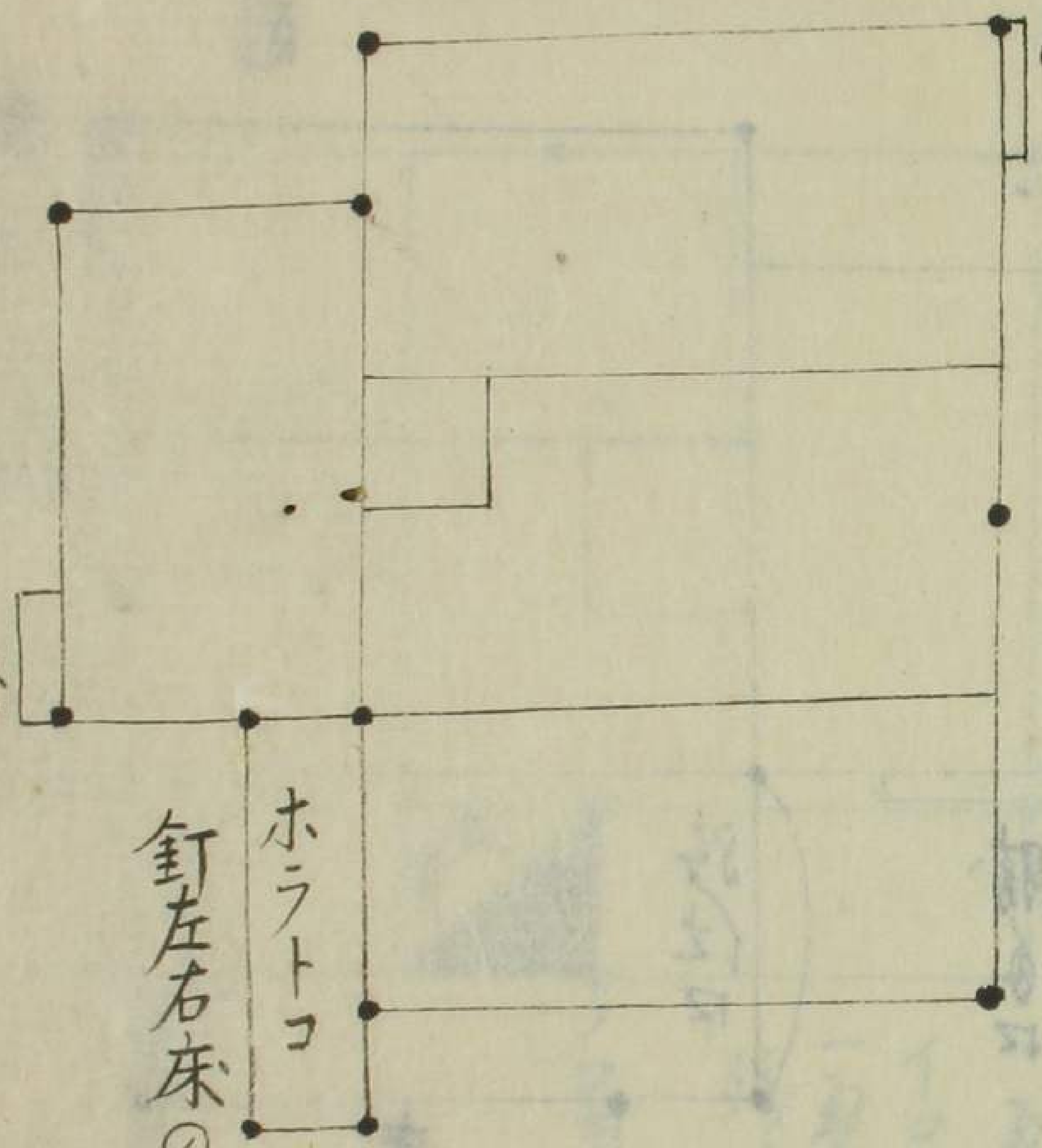
四畳半の端を切て上座床の座敷



長四畳大目下座床の座敷

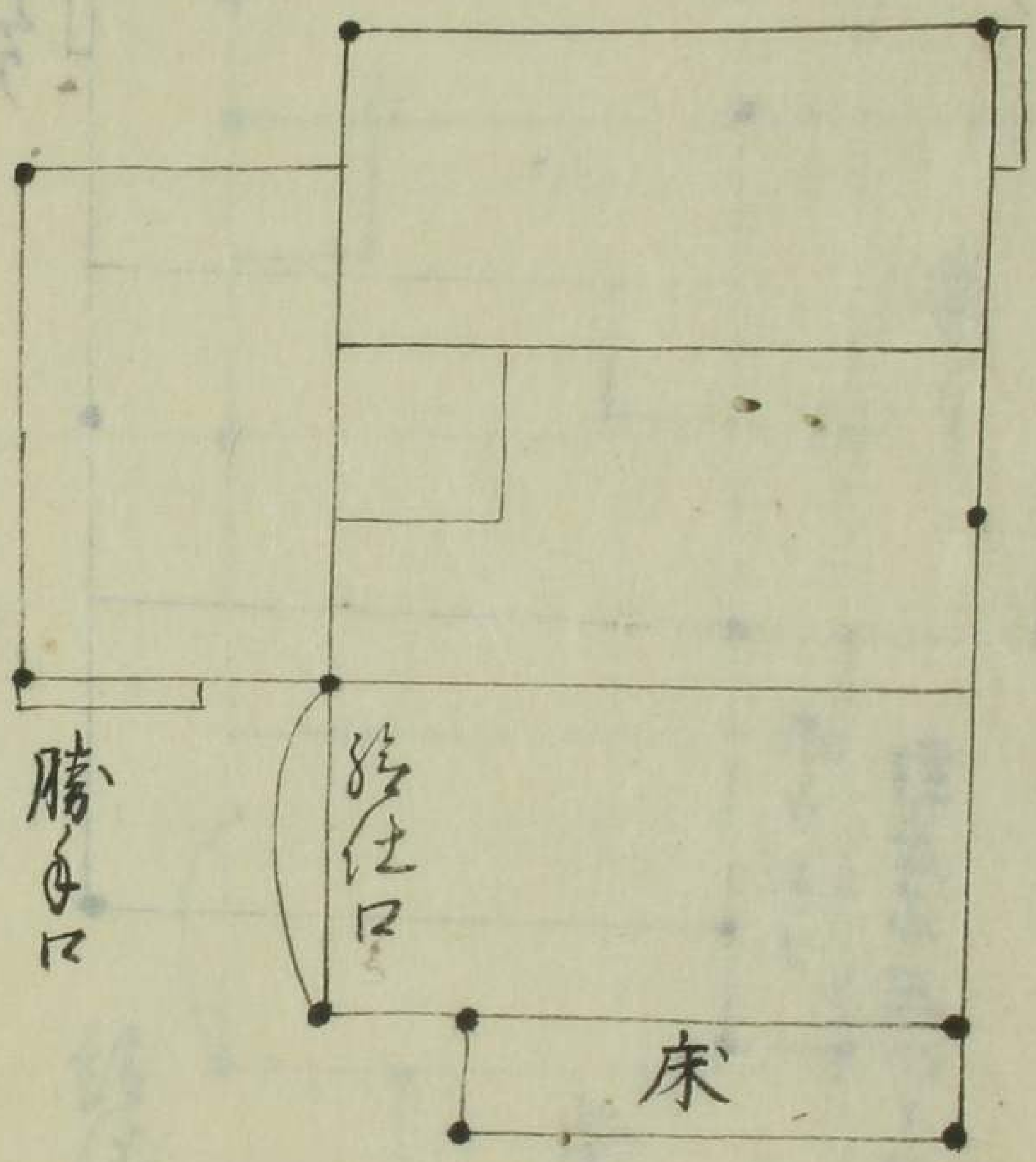


三畳大目向切床

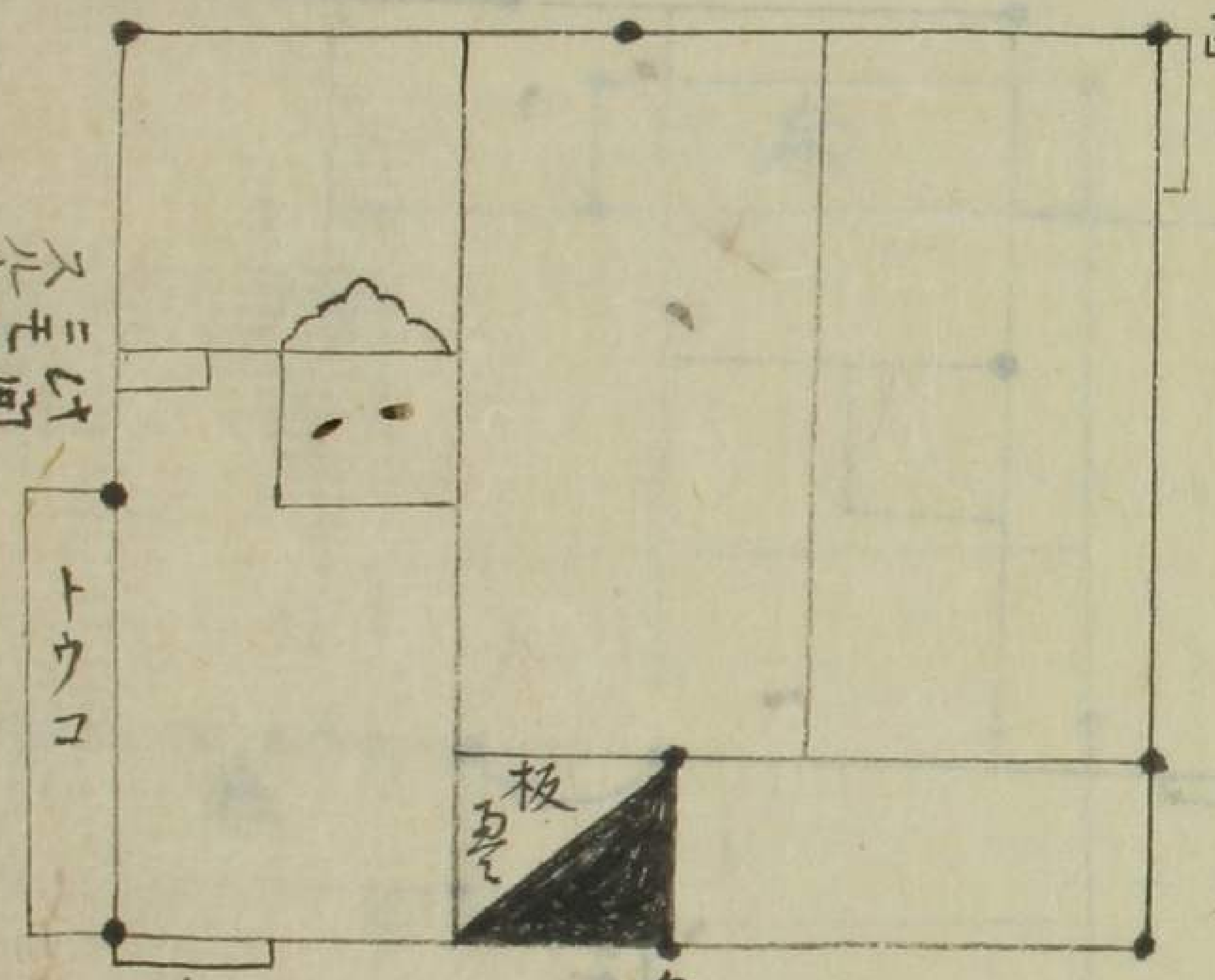


釘左右床の[illegible]

三畳大目

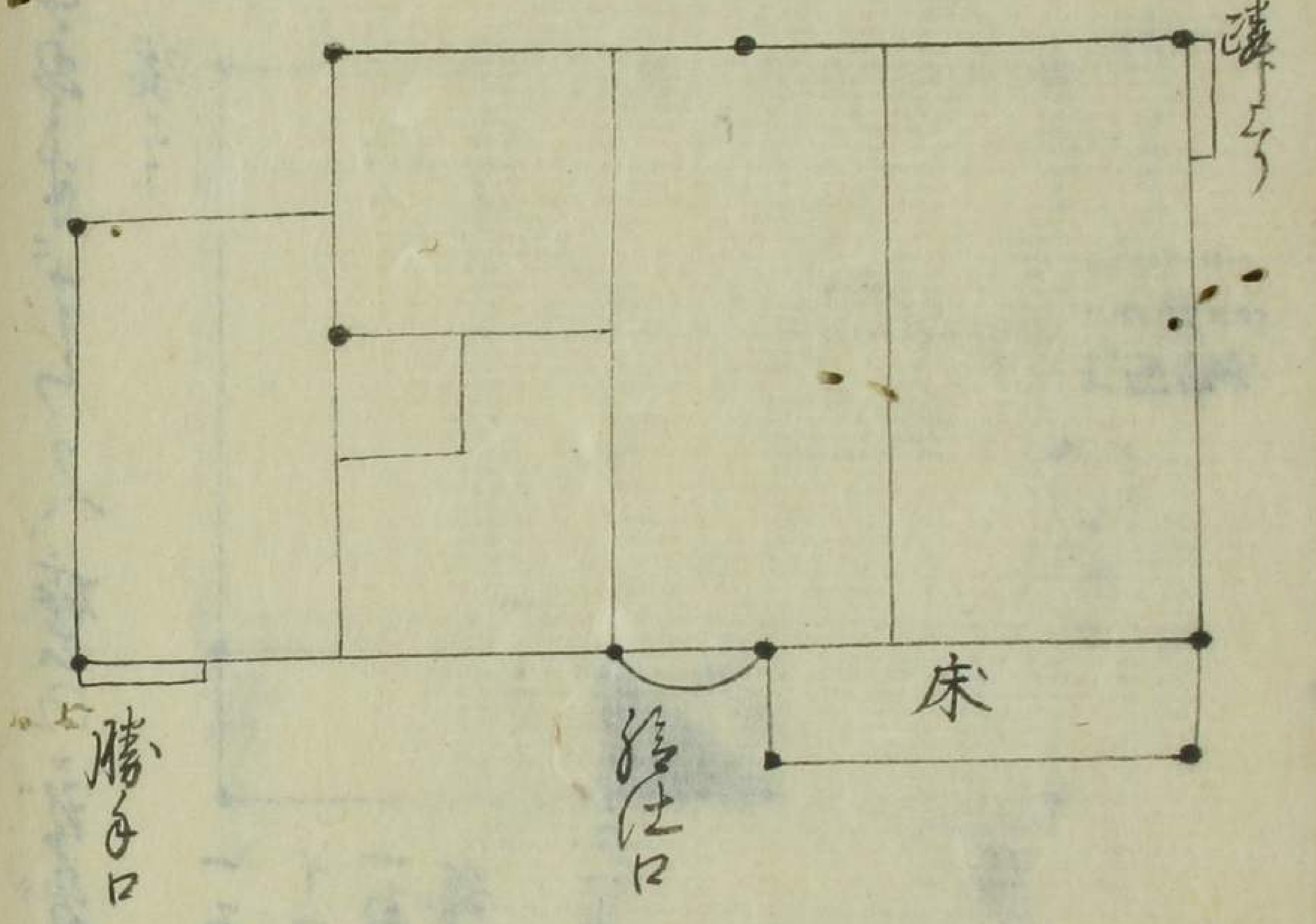


有楽囲三畳半ニすちかへ壁四ツ有之

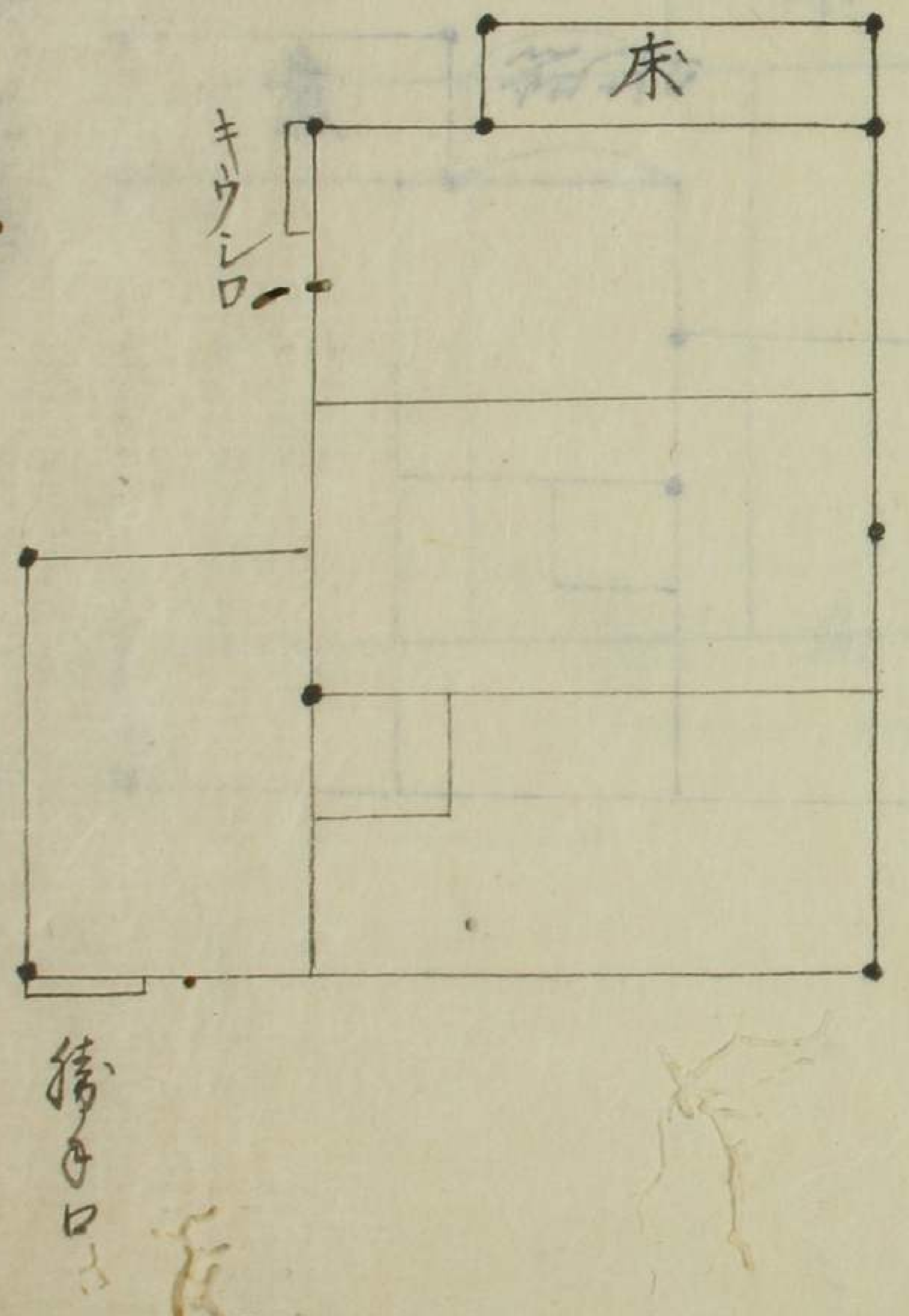


一畳半ノ方へ
イロリ先押通シ
一畳半ノ西添
張リハ天井

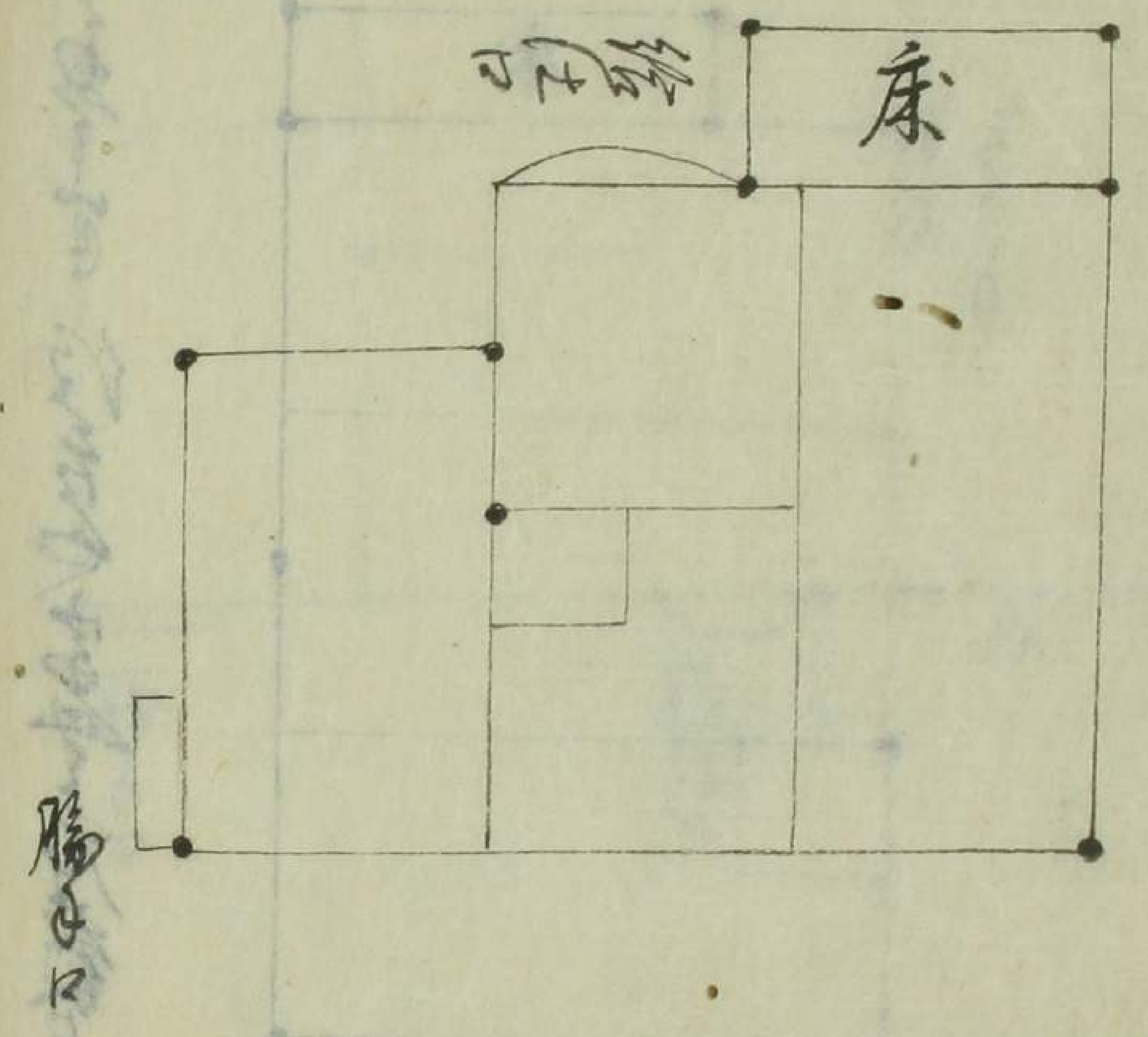
平三畳



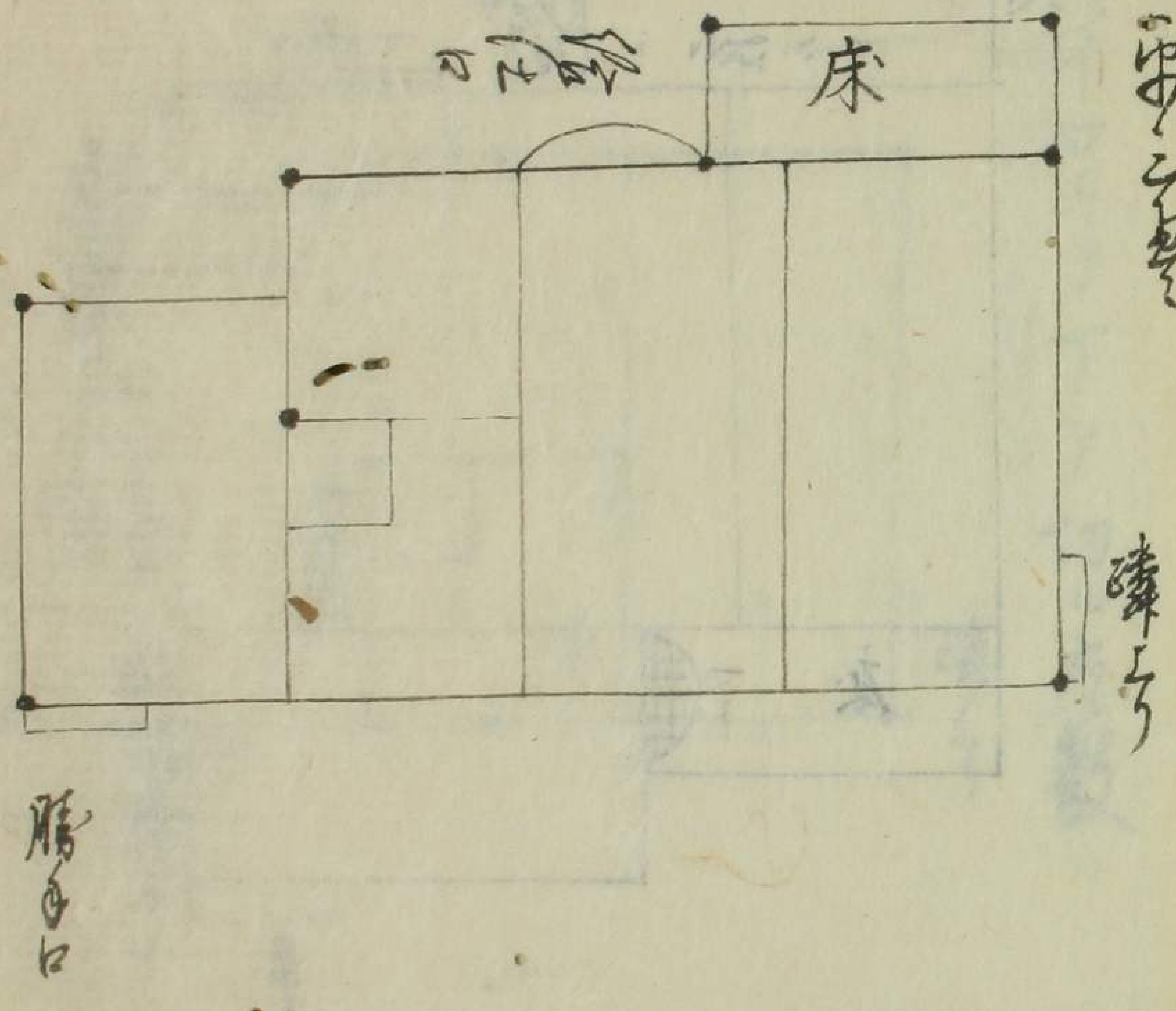
宗旦好深三畳半　給仕口も宗旦座敷是也

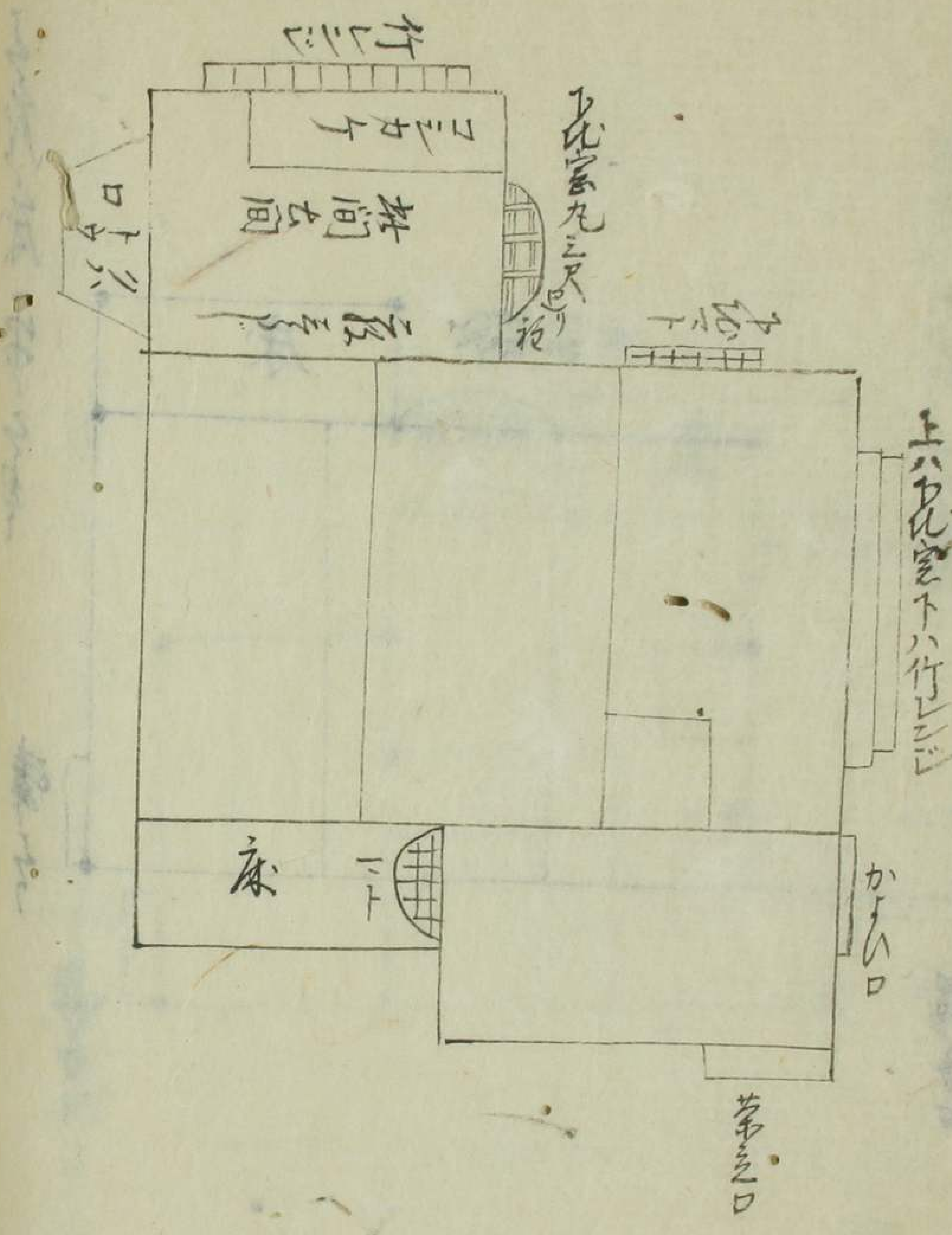


上座床二畳

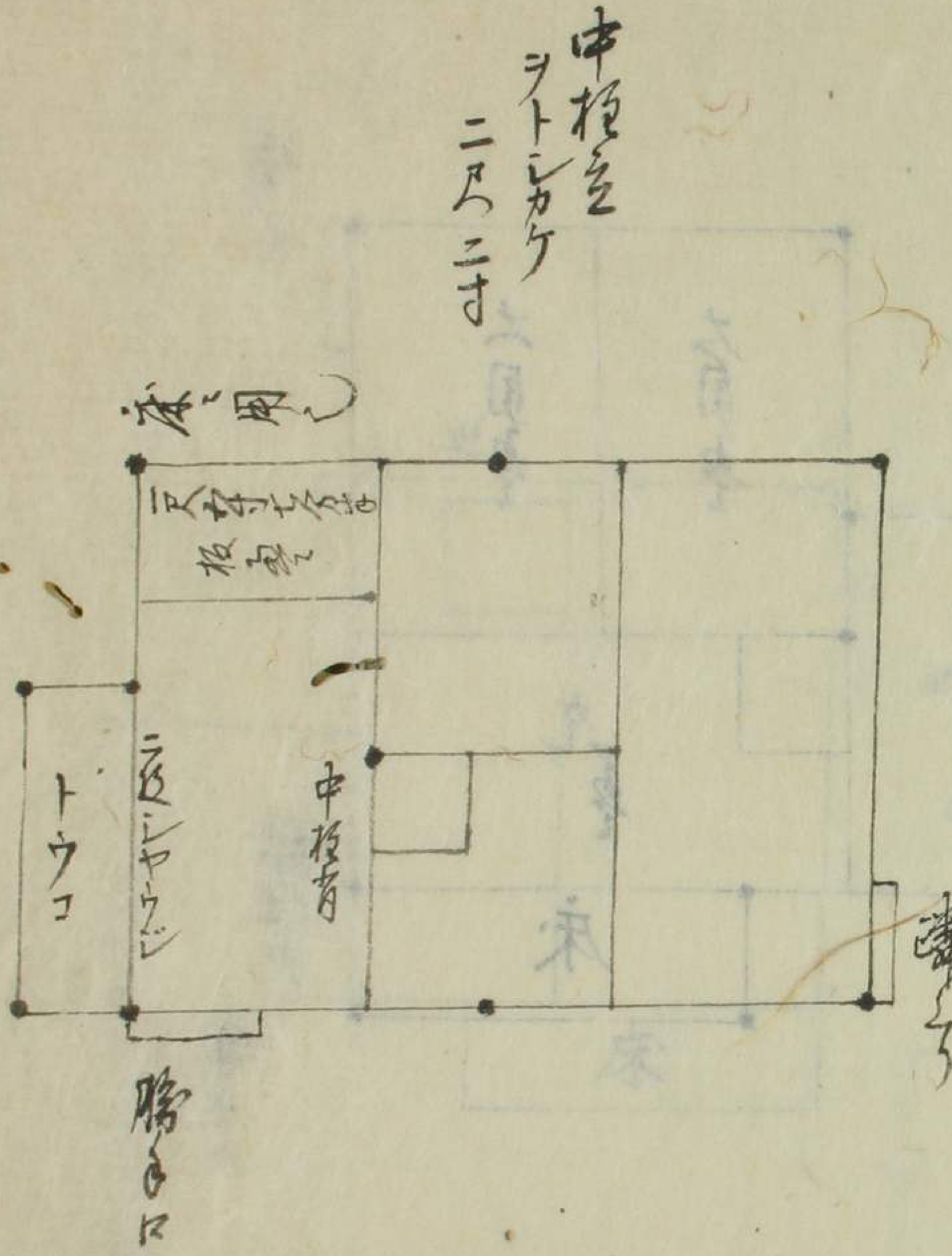


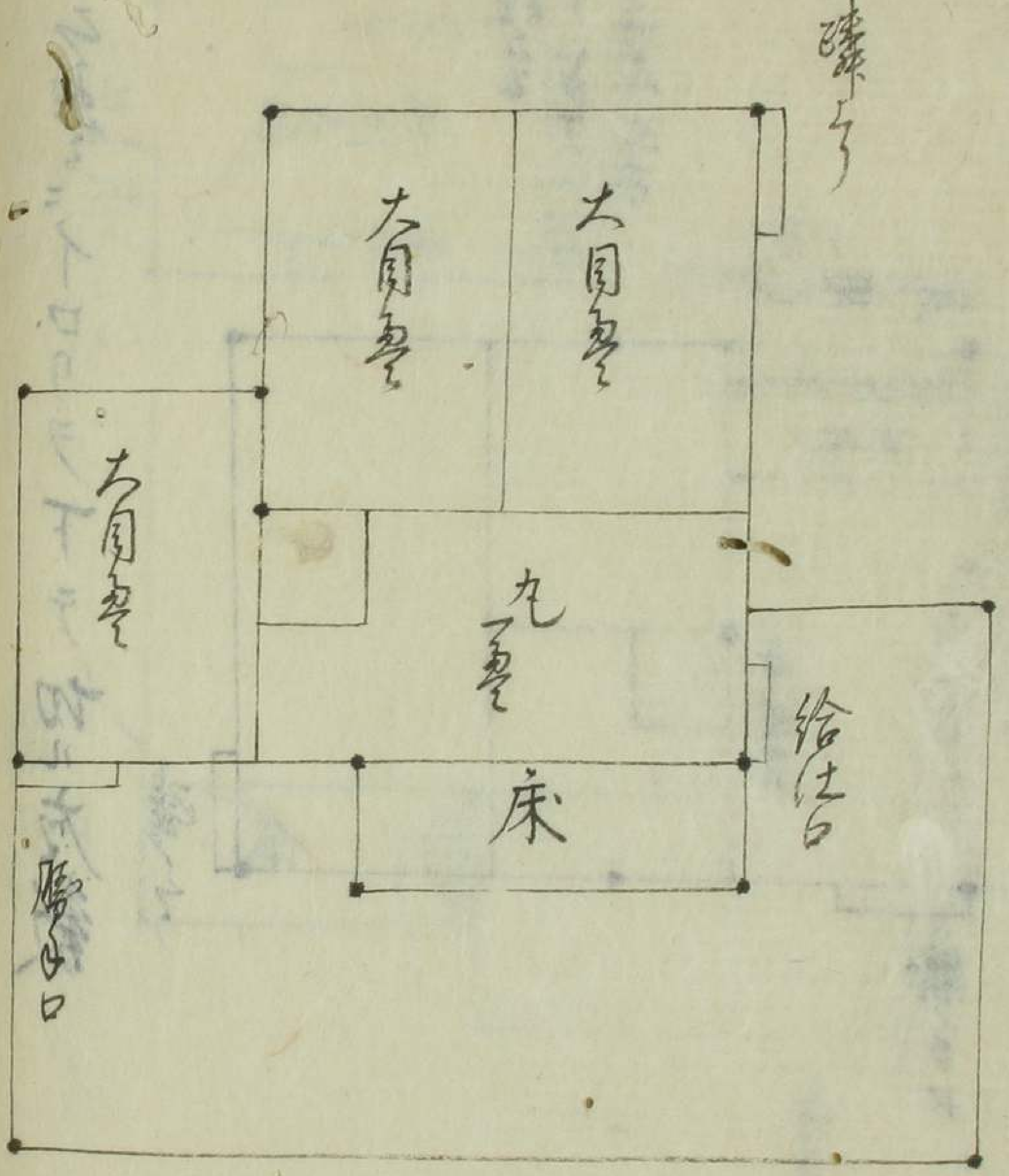
上座床中二畳



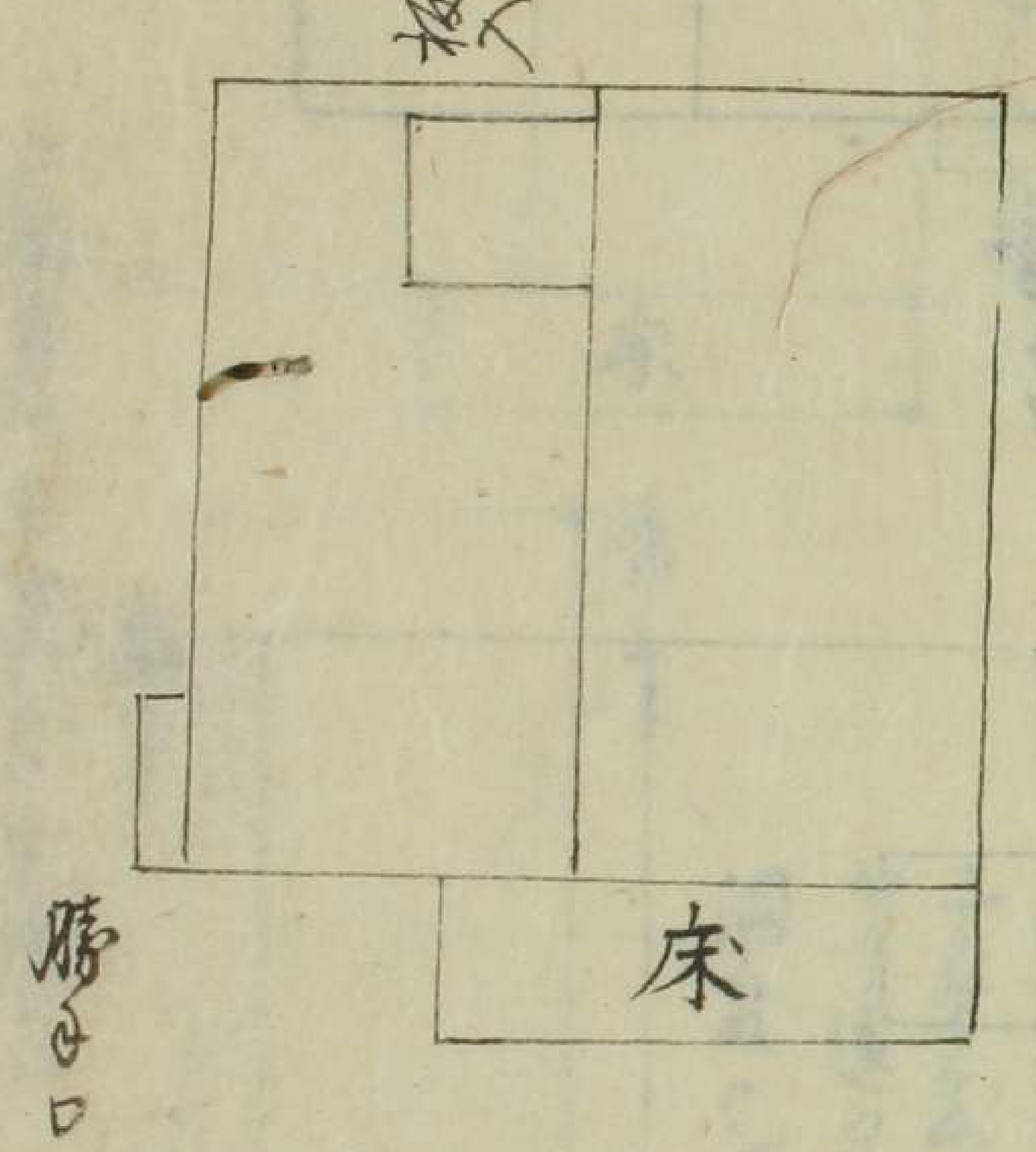


平三畳ニイロリヲ下テ切ル座敷

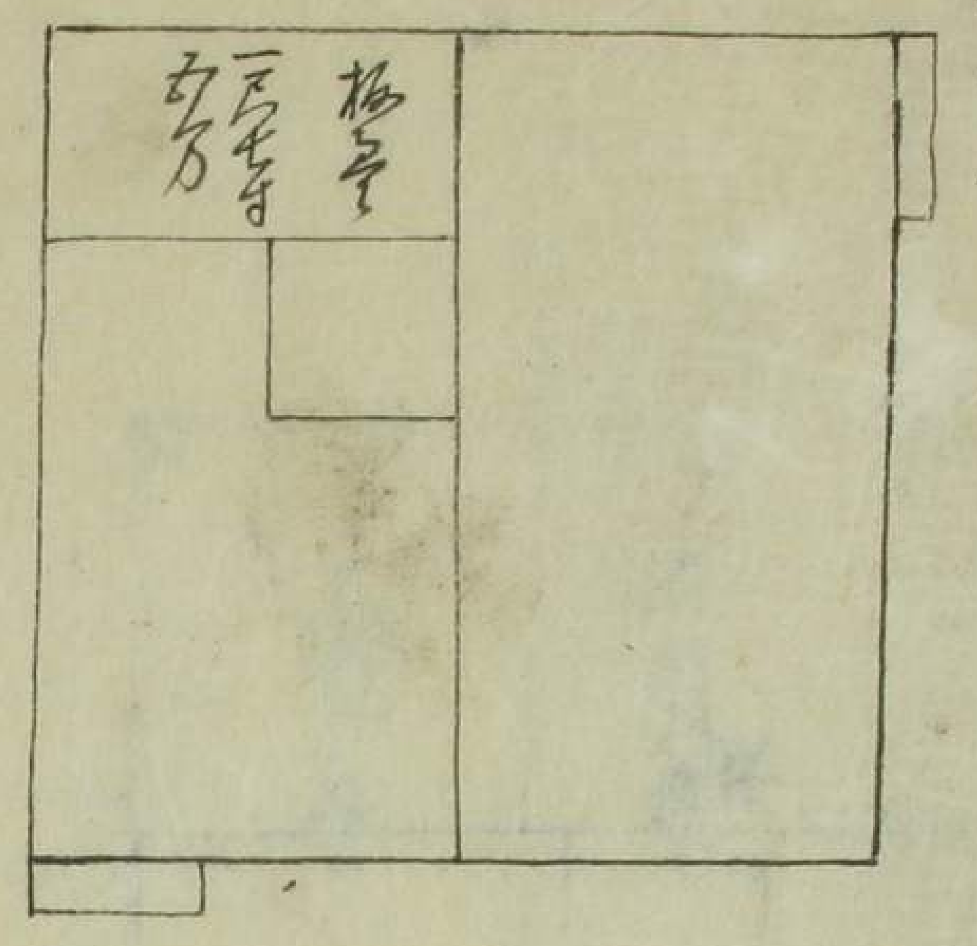




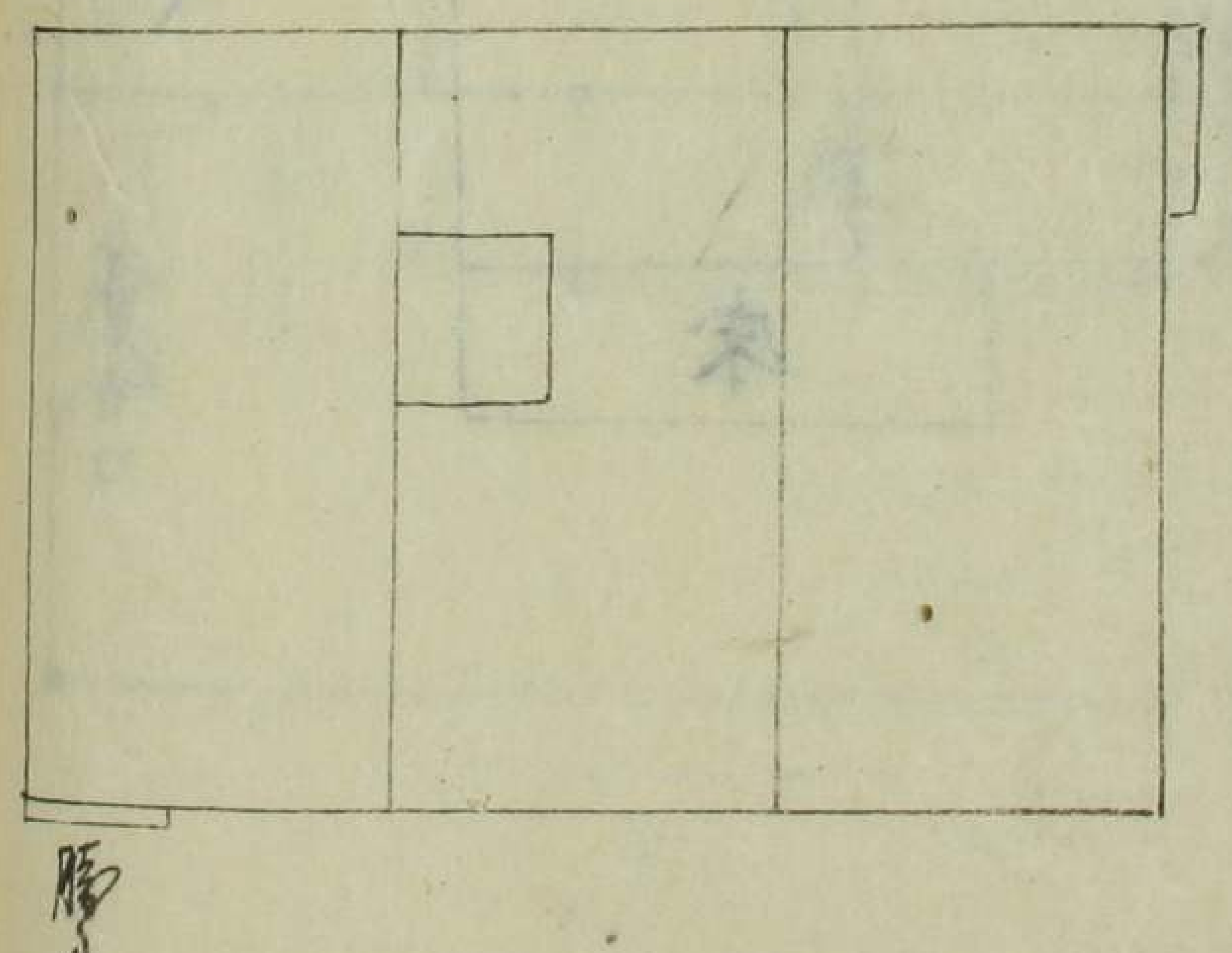
九二畳の座敷



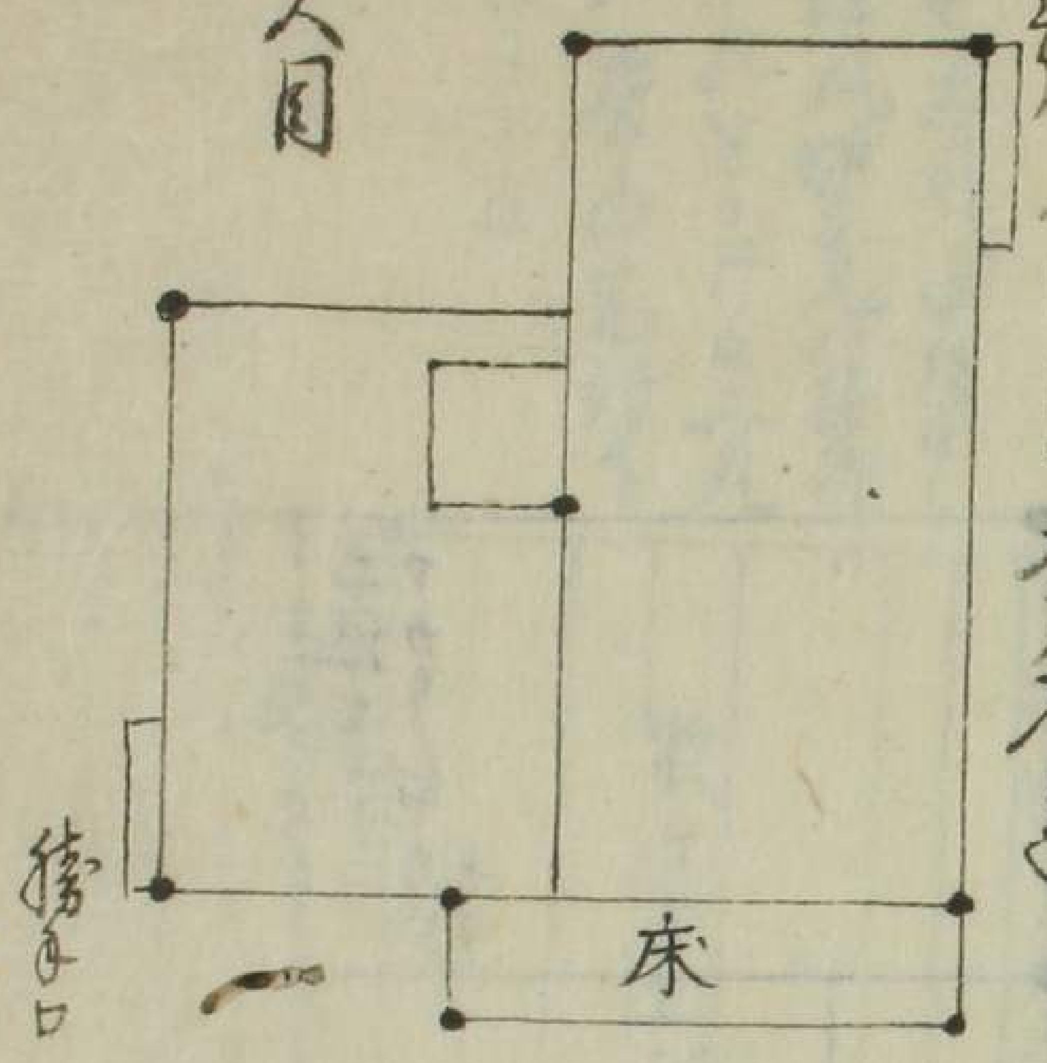
九 二畳



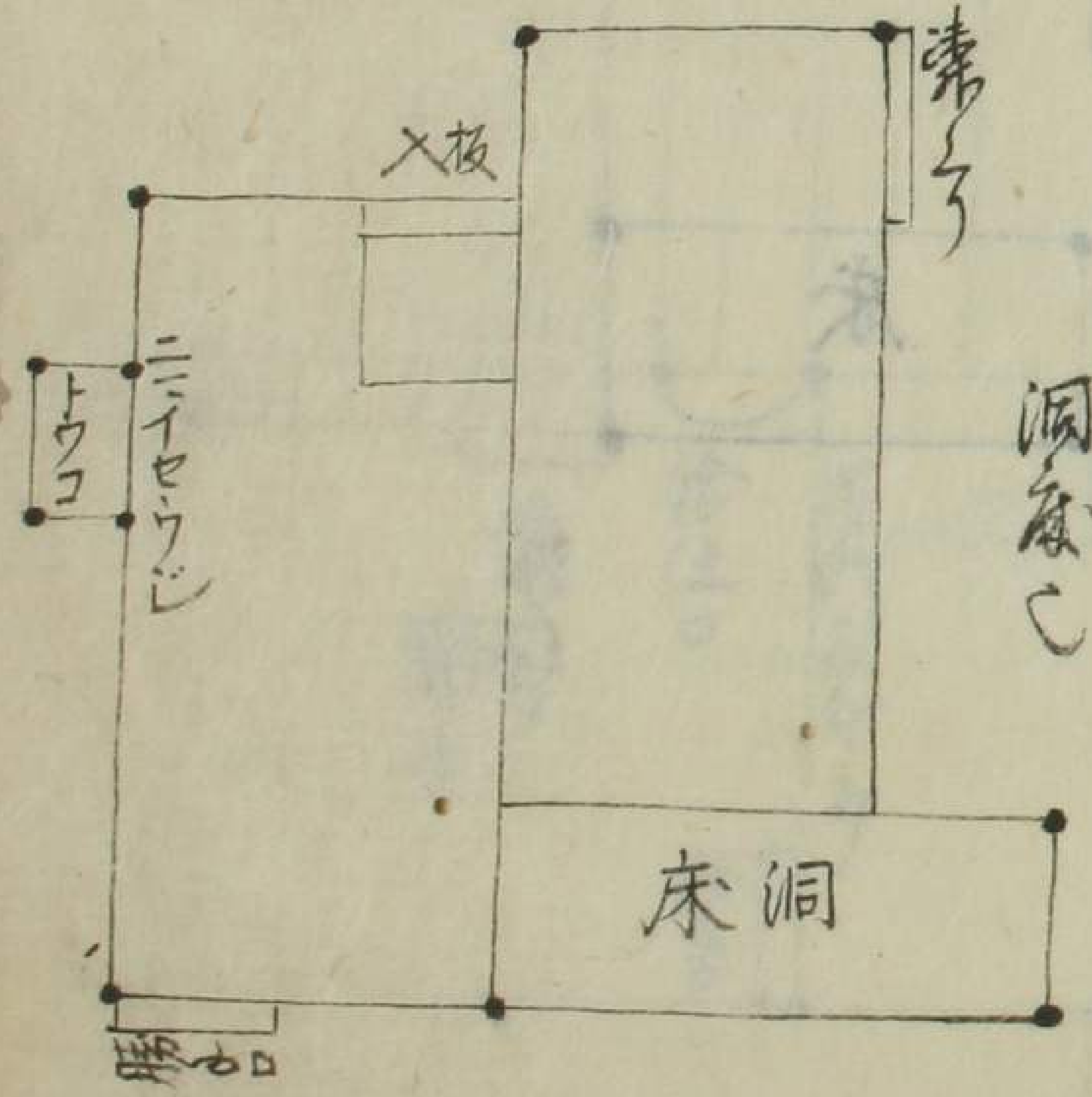
此座敷自然中柱入所ハ中柱の外ニ入
也ニより風炉先の炉右也の間一尺七寸五分之
板の二畳も大目畳ニ立テ少し用ル所ハ一寸
本寸の取遠ニテ少し候し



一畳大目



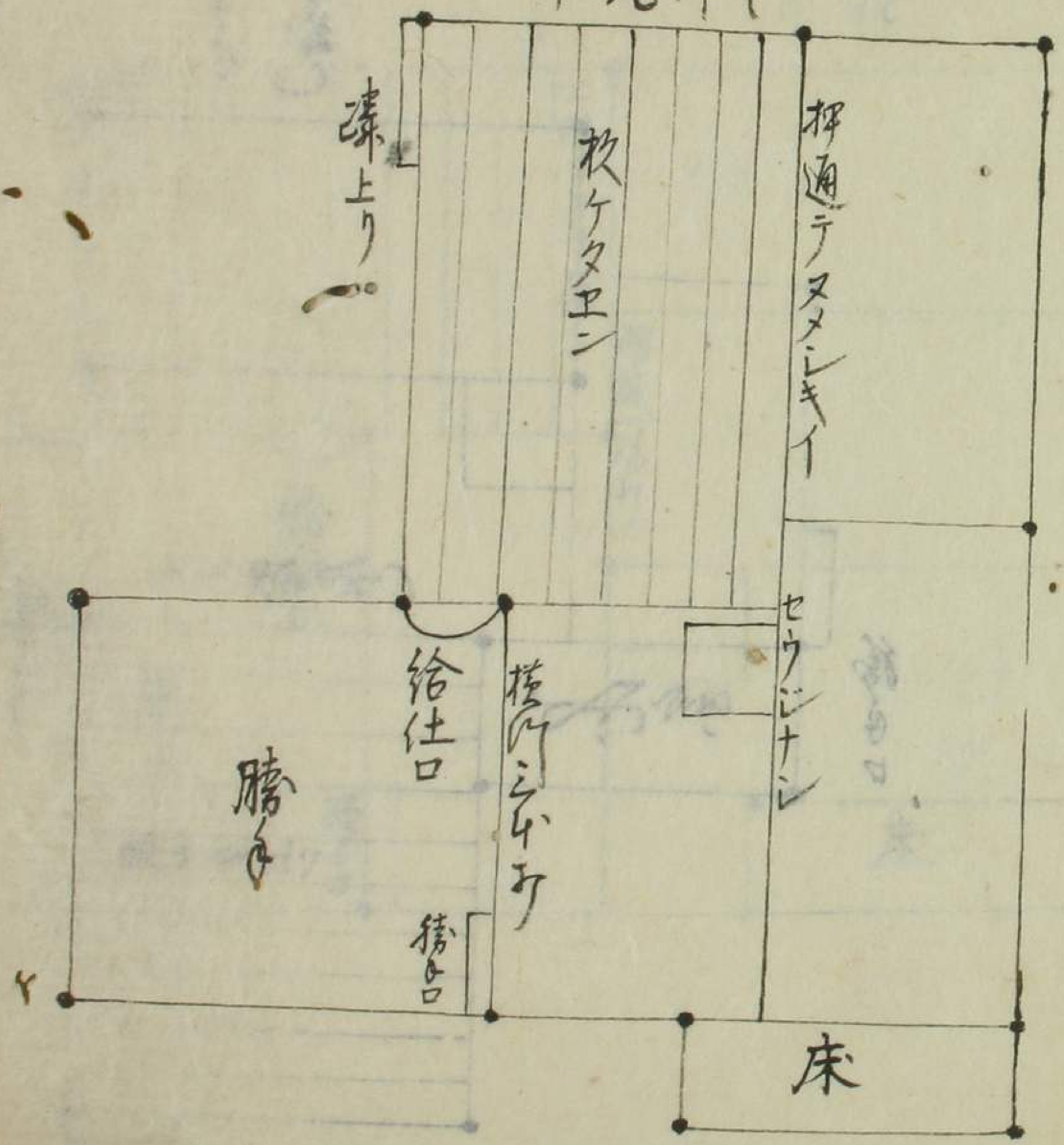
一寸七分ホドノ板畳ヲ出サバイロリ縁ト
ヒトシク入ヘし然ハイロリカキ畳ハ風炉先ノ
炉右也通る也然板畳ハ縁ト炉[illegible]板
ヨリ分中ニシツメテ入ルヘし

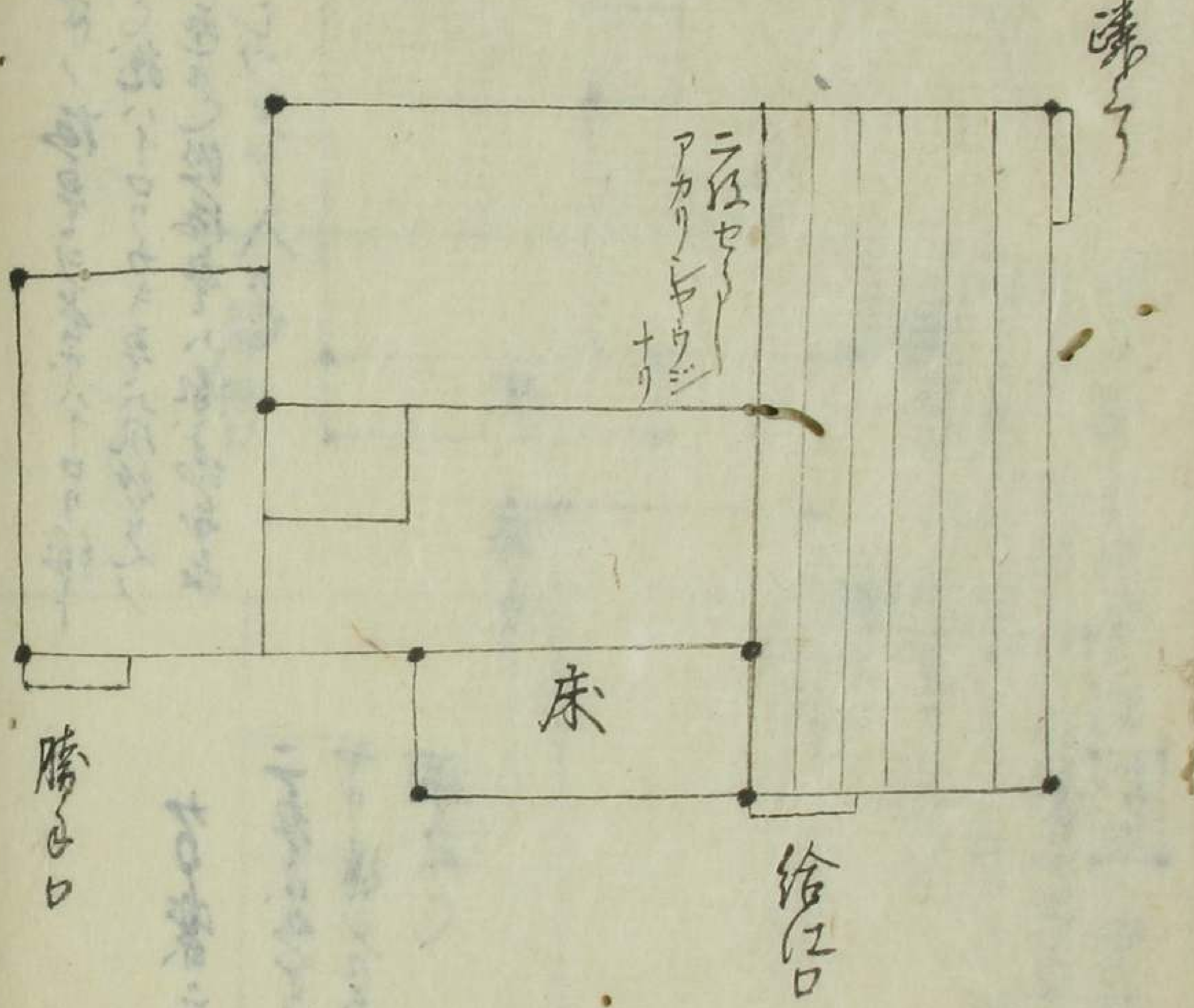


右楽ニ座敷
二畳大目ヲ台目ノコトク
ヤリ違タル座敷也
洞床也

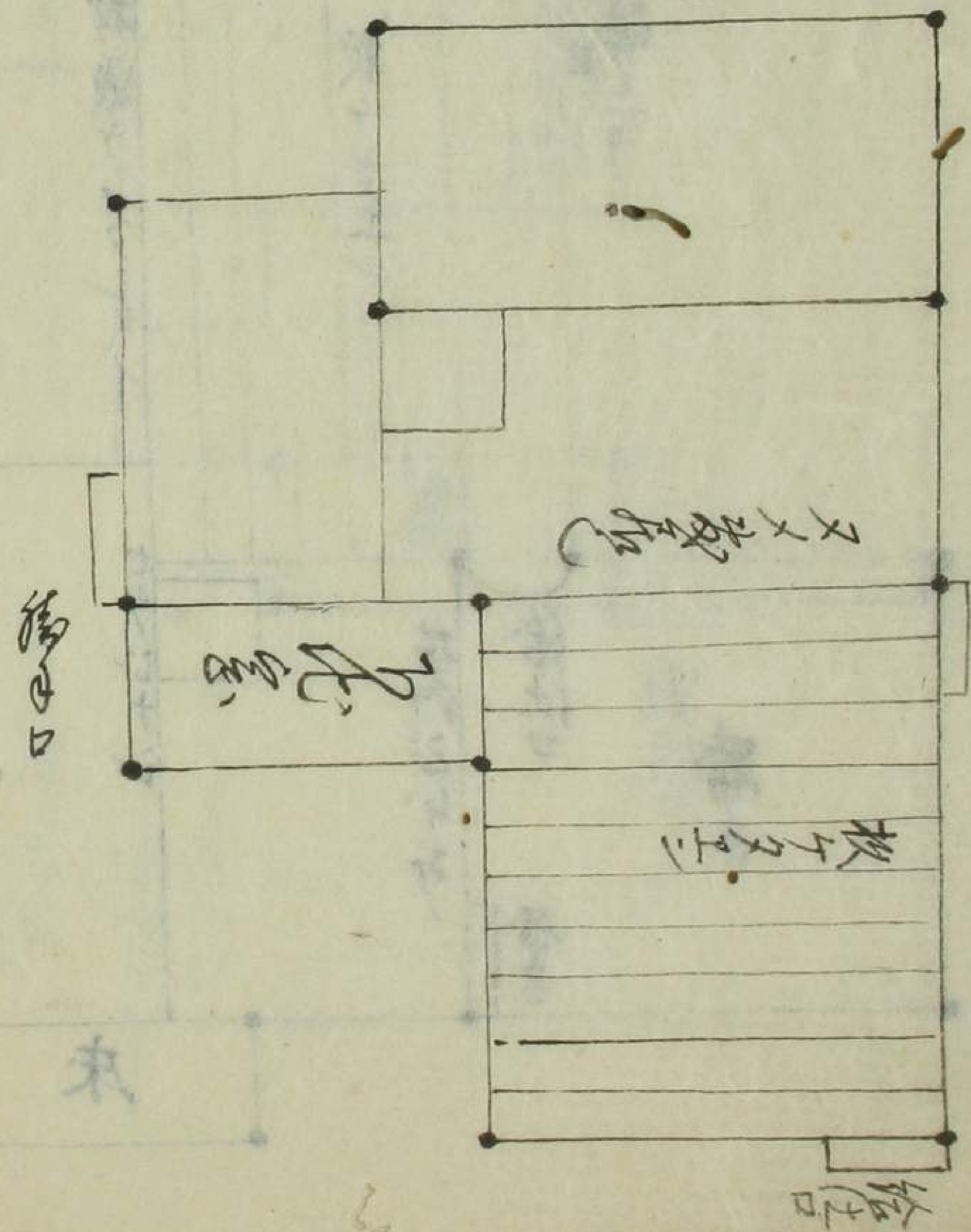
音楽座敷

右二畳大目ニ中柱立し
構之但風炉先ハ勝手
なきられをみれみ尾
炉先の常の窓は下
地まゝやしム

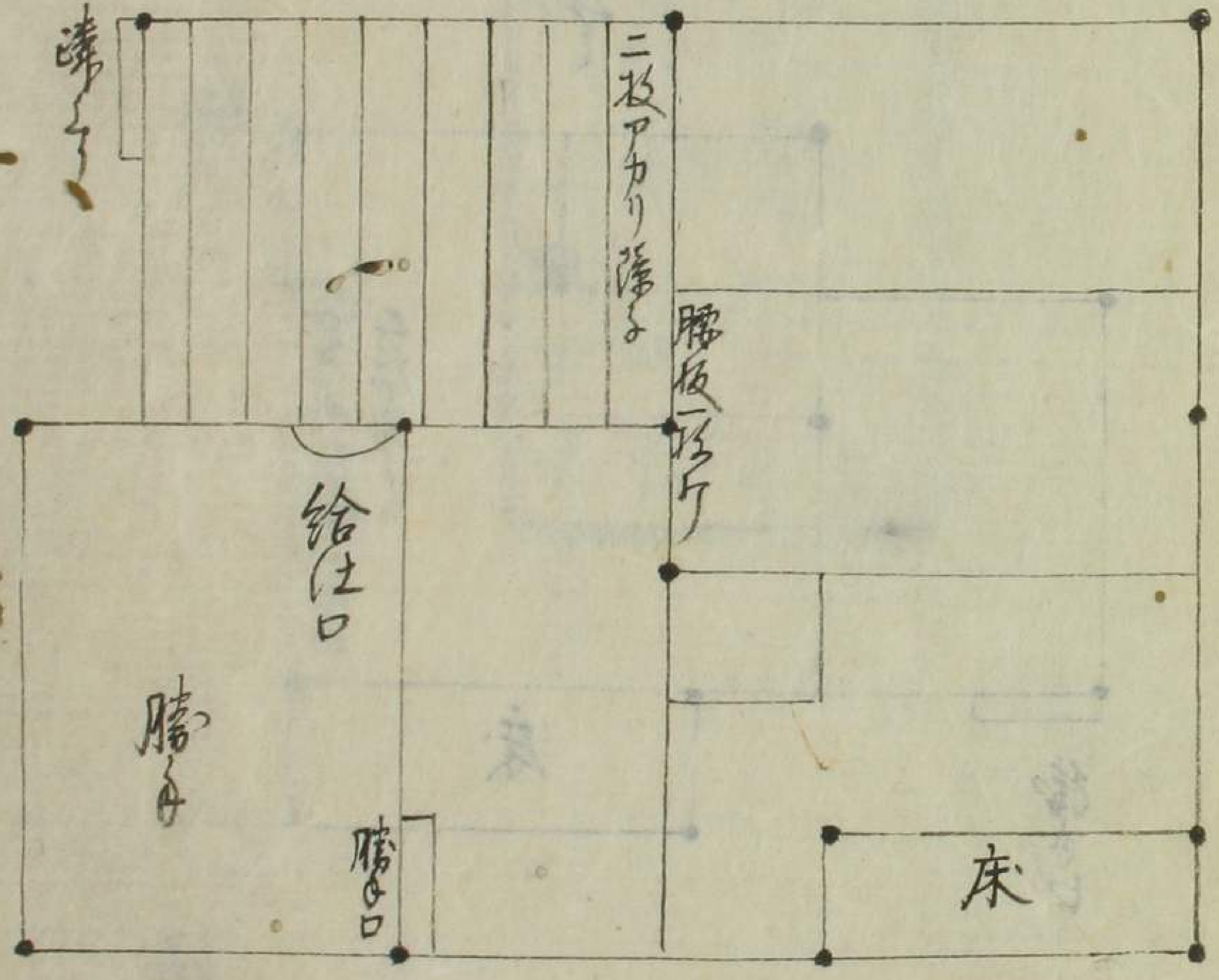




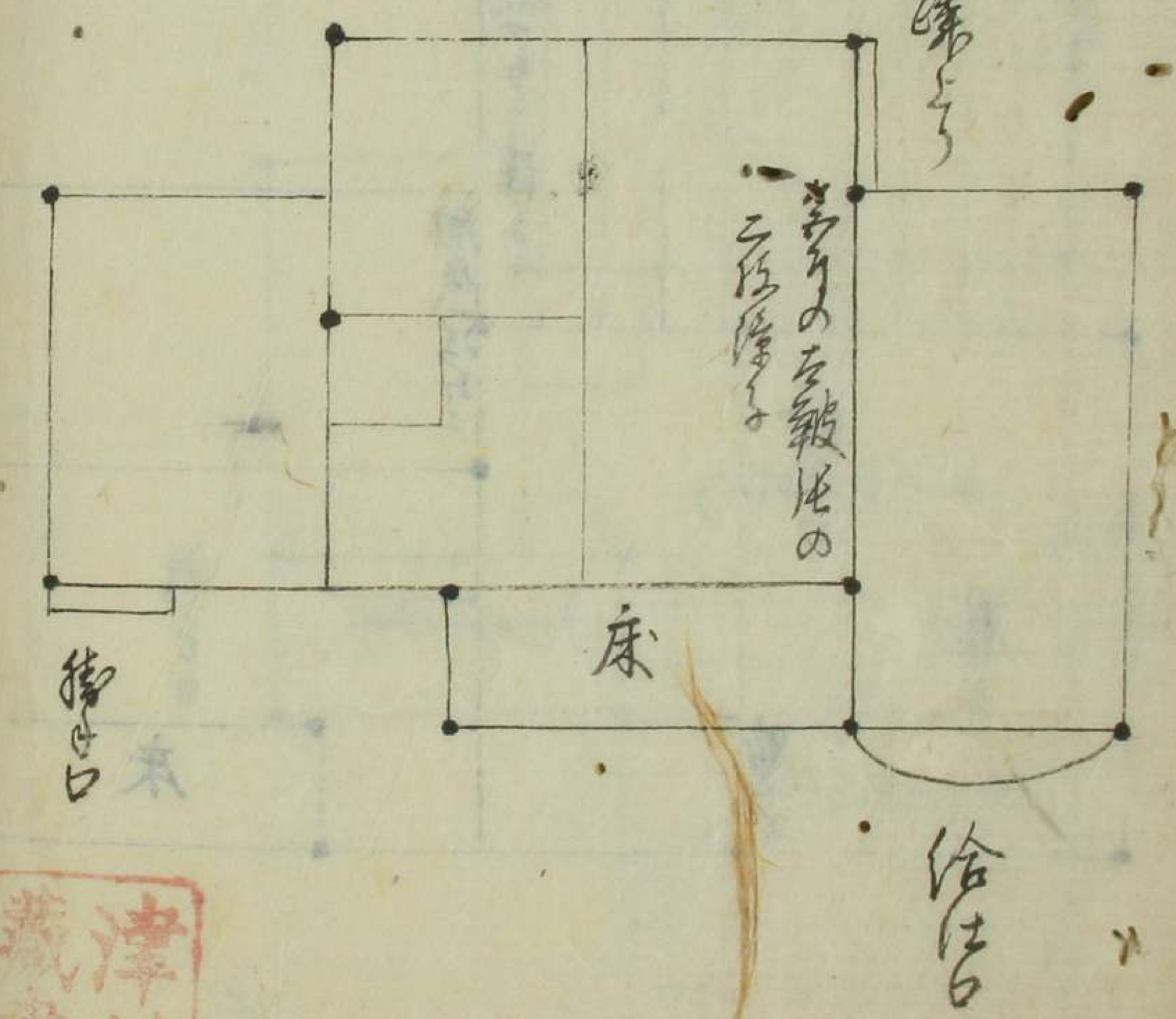
二畳大目に柱をたて
ゑん州後座の敷之



有楽座敷
三畳大目ニ中柱
入柱けさゑんを
打ちら敷之



織部之図



津村藏書